釋尊の御在世に一人の富豪がありまして其名を尸迦羅越と謂つたと申すことです、この尸迦羅越と云ふ人は毎朝晨起するや必ず先つ水邊に至つて洗面し、其洗面が終ると必ず東西南北上下の六方に向つて禮拜するを一の規律として毎朝これを實踐躬行して居つたそうです、處が或日の事、釋尊この尸迦羅越の邸に臨ませられ、尸迦羅越に對して「御身は毎朝六方に向ふて禮拜するそうであるが何の意があつてかやうな事を爲すや」と尋ねたまひしに、尸迦羅越は釋尊に對し奉りて答ふるやう「我れに親あり我が親は常に此事をなし又我に敎ふるに此事を以てし、重ねて命ずるに永久必ずこれを廢すべからざる旨」を以てしました、故に今日尙此事を爲すのでありまし

す、敢て他意あるにあらずと申上げました、こゝに於て釋尊は尸迦羅越に對して一場の敎誨を施されたのであります、「尸迦羅越よ、御身の親は形體上の禮拜を誨へて未だ精神上の禮拜を誨へぬのである、これより我は精神上の禮拜を誨ふべし」と說かれ、更に詞を改めて云はるゝやう、「尸迦羅越よ人は毎朝六方を禮拜するがよい、しかし東方を禮拜するときは心にかくの如き誓約を爲すべし、我れ今日一日は子として親に事ふるの道を過つべからず。また親として子を慈くしむることを忘るべからず」と又南方に向ふて禮拜する時は心に斯くの如き誓約を爲すべし、我れ今日一日は弟子としては師に敬順するの道を過つべからず、又師として弟子を見ることに怠るべからすと、又西方に向つて禮拜する時は心に斯くの如き誓約を爲すべし、我れ今日一日は夫として妻を愛するの道を過つべからず又妻としては夫を敬するの道に乖くべからすと、又北方に向ふて禮拜する時は心に斯くの如きの誓約を爲すべし、我れ今日一日は信を以て朋友相互の交りを厚くすべしと、又上方に向つて禮拜する時は心に斯くの如きの誓約を爲すべし、我れ今日一日は宗敎家の敎誨を信奉してこれを輕んずべからずと、又下方を禮拜する時は心に斯くの如き誓約を爲すべし、我れ今日一日は奴婢等の下人を憐れみて虐待すへからすと、（以上取意和譯）、

因緣 釋尊の入滅

釋迦如來は二月の十五日に拘尸那城の中、跋提河のほとり、沙羅雙樹の下、七寶の床の上にありて、頭北面西右脇に臥したまひ、ついに涅槃の雲に隱れさせられた、獅子吼菩薩涅槃の會座に於て御尋なさるゝやうは、月も多いに二月、日も多いに十五日、如何なる所以を以て二月十五日に入滅したまふや、佛、獅子吼に告てのたまはく、二月は春の陽氣に入る初め、人氣も自ら浮き上り、花見々物に心を奪はれ酒宴遊興に日を暮し、無常も後生も打忘れ、空しく三塗に沈むゆへ、ワザト陽氣の春に入滅して惑へる衆生に娑婆の無常を知らせるぞよと、又十五日は滿も殘さず缺も初めず滿月の大輪、娑婆の化緣已に盡きて本土に歸り、滿月の如き平等圓滿の證りに入るの義を示すぞよとの意にて、二月は墓なき無

常を御知らせ下さるゝ、十五日は圓滿の御證りを御知せ下さるゝのである。

ジヤクレン　寂蓮　【人名】

山城國智恩寺の僧なり、俗姓詳かならず、法名勢觀坊源智上人に嗣ぐ示寂の年月日を缺く、

談叢　寂蓮法師の篤學

寂蓮法師　或時二三の人と歌話をして居られたが、フト「ますほのすゝき」といふのはどんなことであろうと云ふ疑が出た、すると座中の人誰もわからぬが、唯一人此事をば攝津の渡邊あたりに知る人がありと云ひまする と、法師はさらばそれへまいつて、教へを受け來らんとて出かけまする、時に雨が烈しく降まするで、人々雨やみてから立ち玉へと云ふに、法師は、いな〳〵無常定め難き人の身の、若し其人の死に玉はゞ、誰もこの事を教ふる者がなくなるであろう、明日をといふ中に我れ死なば聞くべきものもなくなりなん」とて、雨の中を、わざ〳〵出かけて行かれたと云ふことである、道に志すものは此位の覺悟がなくてはなりませぬ。

シヤバ　娑婆　【術語】

忍土と譯す、諸苦を忍ばざるべからざる國土の義とす

悲華經「何ヲカ名ヲ娑婆ト是ノ諸ノ衆生忍ンヲ受ニ三毒及諸煩惱ヲ能ク忍ニ斯惡ヲ故ニ名ク忍土ト」

歌　世の中をそむくたよりやなからまし
うき折節に君が逢はずば

これは平家の亂にあふて、時の天皇は讃岐へ落ち行き玉ひ、只管後生の勤め怠りたまはぬと聞いて、都より西行法師の贈られた歌である、この意は世が太平であつて兵亂がなくは、一天萬乘の至尊は、榮華にのみ心を奪はれて、後の世の事などは思ひつき玉はぬであろうに、かゝる亂世にあひ、西海の浪の上にうき苦に逢ひ玉ひし逆緣にて、向上求道の心をおこし、後世の御勤めになさるやうになつたのであると云ふ歌の意、今在座の人々も、順緣より佛法に入つた方もあろうかなれど、十中の八九は逆緣が動機になつたので、我子を先き立てるとか、夫に別れるとか、愁歎に沈んだが御手引となり、たのみすくなひ娑婆の有樣、「されば不定の人間にあらんよりも常住の極樂を願ふべきものなり」と、不定の娑婆を厭ひ常住の極樂に往生すべき身となつたのである。

歌　世の中を思ふもかなし花の色
うつれば蝶も住ますなりけり

「桃李不言ハ下自ラ成蹊ヲ」と、花の方より人を招にはあらねども、嵯峨、芳野の櫻など盛りの節は、人々見物にあつまりつねは道なき處にも道がつきて一旦は賑へども、花ちりての後は一人も訪くるものなし、人の來たるは花さかりの時ばかりなり、「富貴佗人合レ貧賤親戚離ル」人も富貴にして世にある時は、花のさかりの如く、世間よりもてはやして、門前市をなすやうなれども、身上をとろへて見る影もなくなれば、佗人はをろか我身にしたしき親類まで、うと〳〵しくして寄りつかぬやうになるなり、頼みすくなきは人間の心である、故に源信僧都は、

淨土に非れは心にかなふ處なし、

聖衆に交らざれば心にかなふ友なし、と仰せられてある。

シャリホツ　舍利弗【羅漢】

十大弟子の隨一にして智慧第一なり、

因緣　舍利弗命名の由來

舍利弗と云ふは、舍利を春鶯とも云ひ又は秋鷺とも云ふ、これは母の御名ぢや、弗は唐の子と云ふ字で、御子息樣とか御子達とか云ふ時の子の字のかわり、それゆへ般若心經などでは、直に舍利子と云ふてある、母の名を子に呼びそへて舍利弗と云ふのぢや、これは日本で云へば、お松の子お竹の子と云ふと同じことです、さて其母の名をなせ春鶯秋鷺と云ふたぞと云ふに、春鶯の方は聲をほめてつけたもの、秋鷺の方は目のすゝやかなことを名を顯はしたもので、舍利弗の母は生得聲が美麗でありたゆへ、春の鶯と云ふは、舍利弗の母の聲の美しきを讃嘆して、其聲の美しき舍利の子であると云ふことで舍利弗と云ふた又秋鷺と云ふは白鷺のこと、白鷺と云ふは至りて目の中のすゝやかなものゆへ、此母の目の中の清美を讃めて秋鷺と云ふ、日本でも、「男の目には糸を引け女の目には鈴をはれ」と云ふて、目の中のすゝやかなとは人を讃めることぢや、そこでこの舍利弗の母の目のすゝやかなことを顯はして秋鷺と云ふ、其目のすゝやかな舍利の子であると云ふことで、舍利弗と云ふのです。

因緣　舍利弗の智慧

舍利弗の母の兄に拘絺羅と云ふのがありて殊に智慧も學問も勝れて居られた、妹の舍利女と問答なされると十度が十度ながら御勝なされた、處がこの舍利女が鐵腹居士と云ふ人の處へ嫁入なされたが、程なくこの舍善弗を懷胎いたされた、さてそれからは兄の拘絺羅と問答なさるゝに辨論明かにして義理明白にわかれ、十度問答すれば十度ながら兄が負けられた、そこで拘絺羅が思案して、今迄已に勝つたことのない妹が、俄かにあの樣に智慧辨論の勝れると云ふは、唯ことではなゐ、全く胎内に居る子の仕業であろう、又胎内に居る間からあのやうに智慧が勝れてあるからは生れ出た時にはとても相手にはなられまい、伯父の身で甥に負けては口惜い程に、彼の子の生れぬ先に學問をせうぞと、それより五天竺をまはり四韋提の經論を學び、晝夜出精して爪をとる隙さへ惜んで學問せられたゆへに後には爪が一尺も延びて、人が異名に長爪梵士と云ふたことあるが、舍利弗は智慧が勝れて居られたゆへに、胎内にありし間から、其智慧が母にあらはれて、論議問答に御勝なされたとある。

因緣　舍利弗と乞眼婆羅門

舍利弗が布施の行を持つてござる時に、乞眼婆羅門に出會はれた、波羅門が舍利弗に向つて云ふには、貴僧の眼の玉を施して下されと云ふた、處が舍利弗は布施の行を持つてござるのぢやから、眼の玉をくれよと所望せられても、いやぢやと斷り云ふことが出來ぬ、よし〳〵と承知いたし、眼の玉をくりぬいて

今の波羅門に御與へなされた、波羅門は血汐の滴りて居る眼の玉を手の上へ載せて、じろ〳〵と見て居りましたが、やがて大地へ投けつけて足で踏みにぢりて仕舞ふた、そうして云ふことが憎らしい「貴僧の眼の中にある間は、きら〳〵と光りて水晶も及ばぬ樣にみねたが、くりぬいて取りみると血汐が流れてまことに穢い、もうこんな穢いものは入らぬと云ふて、土足にかけてふみにじりた、其時舍利弗尊者の心の中に、ア、邪見なものはあればあるものぢやが、もし己れが成佛をしてもこの樣な邪見なものを濟度することは出來まいと云ふ、一念の思ひがおこるなり、利他大悲の行が欠けたと云ふので、これまでつんだ自力の行はさらりと消ねてしもうて無量永劫佛果の證りを開くことの出來なゐ、阿羅漢になられたと云ふのである。

シユウキヨウ 宗敎 【術語】

宗には崇尊王の三義あり、敎とは聖人下に被らしむるの言なり、西諺に曰く「宗敎なき人は手綱なき馬の如し」

談叢 文字以外の大學問

唐に神贊禪師と云ふ大德があつて、三人の御弟子を學問修行の爲め他國へ出された、五年の後に三人共に業を卒へて歸り、それ〴〵に學んだことを禪師へ復命しました、甲曰く私は性相を十分に研究致しました、乙曰く私は一乘家の學問に全力をそゝぎました、ところが丙の僧は何も申上げぬ、段々詰問せられ私は何も致しませぬ唯徒らに日を送つて居るばかりであつたと云ふ、禪師は腹を立てゝ、

「憎い奴ぢや金をもたせて學問に出したのに、何にもせぬとは不屈至極、今日より寺男の代りにつかうてやろう、庭をはけ水をくめと言ひつけられたものゆへ、致方なく寺男となり下つた。

折節夏の頃で、禪師が行水をせらるゝ時、肩を流せと云はれた、ハイ〳〵と云ふて肩を流しながら、獨りつぶやくやう「これは肥滿した丈夫な御身體ぢや、しかし、御佛檀は結構ぢやが、肝心の佛の居られぬのが玉に瑕ぢや」と云ふ、禪師は妙なことを云ふはいと思ふて居られたが、段々と考へてみるとどうも合點がゆかぬ、そこで座敷へ今の丙の弟子を呼びつけて「先刻貴樣は妙なことを云ふたが全體あれは何の事ぢや」と尋ねらるゝと「ハイ佛檀はよけれど佛がないと申しましたのは貴師は御身體は肥滿しておらるゝから立派であれど、肝心要めの證りの佛がないと申したのでござる」と臆面もなく答へた、生憎そこへ虻が一匹來て障子に行あたり、ブン〳〵と云ふて居る、如何ほどブン〳〵と云ふても紙が張つてあるから外へ出ることはならぬ、そこで今の弟子が、百年古紙を鍬りて何れの日が出頭の時、これ虻よ如何にしても方角をかへねば出られはせぬぞ、禪師あなたは如何ほど座禪をしても智慧を磨いても、智慧や座禪で生死を出離することはかなひませぬから、眞劍後生大事に目が覺めたなら方角を御かへなされ」と異見をしたので、禪師も今の弟子に謝罪して百丈禪師の弟子となり悟道に到達

せられたとある、學問をせなんだと云ふ丙の弟子が却て文字以外の大學問をなして大悟徹底の妙域に達して居たので、自分一人でなく遂にその師匠までを感化したと云ふは、非常に興味のある話ではありませんか、「一文不知の尼入道なりと云ふとも後世を知るを智者とす」とあるのと、同一意義であります。

談叢　散髪屋の主人

或人が散髪屋へ行きましたら、散髪屋の主人が永く眼病を患ひて難儀をしたと云ふ話をしたから、「その樣に眼病では第一職業に差支へるであろう、他人の大切なる身體へ鋭利なる剃刀をあてるのであるから、なか〳〵危險なことぢやなあと云ふたら、主人の答へるやう、「イヱ眼などは少々わるくとも腹さへしつかりして居れば手先はふるいませぬから、商賣に差支へませぬが、昨年の秋に胃腸の病にかゝりた時には殆んど閉口しました、腹がわるいものですから手先がふるひまして、剃刀なんどはサッパリつかへませなんだ」と云つた、予はこの一場の茶話を聞いて黄卷赤軸以外の經文の如く感じた、散髪屋の主人の言なれど、深く味ふてみれば、佛陀の金言にかわりはない、無教育の盲目でも宗教の信念に腹さへすわりておれば、決して手先きのふるう事はない、それに反して如何に學識はありても、信念の腹がすわらぬと手先がふるうてなりませぬ、これが事實上の例證は日々新聞紙上を賑はしておるではありませんか。

譬喩　印度の商人

昔、印度に一隊の商人がありて、海外貿易を企てゝ一儲をしようとしたが、何分印度と云ふ國は曠々とした野原の多い所で、海へ出るには日數も多くかゝるし、それに道も迷ひやすくて非常に困難するから、是非とも道案内をつれねばならぬ、それで諸方を探した揚句、一人の案内者を雇ふことを得、愈々出發した、然るに道中に一つの祠があり、其處を通るものは必ず人身御供をせねばならぬとの事である、そこで商人共は誰を犠牲にしようかと大に苦心をしたが、何分にも一隊の者はいづれも親類縁者か、さなくば同郷の人々ばかりでありて、誰一人として殺すに忍びぬ、さりとて犠牲を供へずに行くことも出來ず、いろ〳〵相談の上、遂に道案内を殺して神に捧げた、所が肝心の道案内を亡くしたので道がわからなくなり、其後は行けども〳〵本道へ出ることが出來ず、茫々たる野原の中をさまようておりたが其中に食物が乏しくなり、とう〳〵一人も殘らず餓死してしまふたとある、これは大に味ひのある教訓にして、見ず知らずの他國では、案内者がなくては安全に旅行の出來ぬごとく、人の一生涯を渡るにも宗教と云ふ指導者を得ねばならぬのである、然るに稍もすると道案内を殺した商人と同じく人生の指導者たる宗教を輕んずるは愚の極みであります。

譬喩　河渡り

こゝに人あつて一生懸命に深い大河を渡つて居ても、更に其着くべき岸の目的がなかつ

たなら、それは阿房か狂人かと云はねばなりますまい、これは一の譬喩であるが、拙僧などが世の多くの人に向ひ、なぜに貴君は信仰を求めなゐですか、宗教を味はなゐですかと斯く尋ねてみますと、大抵の人は、イヤどうも世渡りが忙しくつてそんな暇がありませんからと御答になりますで、さらに貴君は世渡りが忙しいとの仰せですが、それなら世を渡つて何處へ御着きになる心算ですかと尋ねますと、明白に答への出來る人は實に少いやうです、何よりも世渡りが大事渡世が第一と日夜齷齪と働いて居られても、渡つてから我身の歸着すべき點が明かにきまつていませぬならばそれは恐くは世渡りではなくつて世流れと云はねばならぬ、目的もなしに世を渡つて居る人々なら皆世流れです、それでは誠に殘念でありますから、どうか早く着くべき對岸を見出したいといふ希望と、如何にすれば此河を渡つて其對岸につくことが出來るかの問題をおこすのが卽ち信仰を求める心であつてこの問題を解決するのが卽ち宗教であります

譬喩 大盤石と紙片

我れ〳〵の心は散りやすい、狂ひやすいものであります、東に西に北に南に飛びあるひて、丁度風にふき散らさるゝ紙片のやうなものですが、此紙片に糊をつけて大きな石に貼りつくれは、いくら風が吹いても動きませぬわれ〳〵のこの狂ひやすい心をも、佛と云ふ大盤石の上に信念と云ふ糊をもちて貼りつけてこそ、一定不動の心を得ると云ふことが出

來るのです、こゝに心をおちつけて世の中を實際にはたらかすのが、われ〳〵の任務で、これが宗教の目的であります。

譬喩 地固めと建築

德育は地固めの如きもの、智育は家屋の如きものであります、いくら家屋は立派に出來ても基礎たる地固めが堅固でなゐと、風雨の爲めに壞れます、地震の爲めに倒れます、よしまた天災地變がなゐにもせよ、月日がたつと柱がねじれたり、土臺が下りたりして戸障子のあけたてに工合が惡くなる、今も丁度その如く、いくら才能技藝がありましても、大切なる德義がありませんと、家庭に風波の絶間はありませぬ、嫁が邪見などか亭主が不身持などか、聞くも穢らはしきことが出て來ます、學問は技藝才能にして、宗教は道德々義である、しかしこゝによく〳〵留意せねばならぬは、家屋を建築するにも、一坪を五拾圓とか八拾圓とか見積りて、金をかければかける程目たちて立派になるが、地堅めになるとそうはまいりません、土を堀りて其中へ石を入れまして、多人數の土方が毎日々々つきたてゝ、中々入費がかゝりましても、皆土の中へつぎこむのであるから、人には勿論自身にも格別それ程はかゞりたことがわかりませぬ學校の方になりますと、自身の姓名もかけず九々の算用も出來ぬものが二年三年勉强すると、郵便の往復は自由になり、加減乘除は立派に出來るし、此頃迄は單物を縫ふ事さへろく〳〵出來なかつた娘が、羽織であれ袴であ

れ何でも、器用に仕立る様になりますから、よい御子様ぢや、發明な方ぢや中々利口な息子様ぢやと、近所隣りの褒めものとなり、親も喜び子も嬉しがり、かけた入費の光りがあらはるれど、德義の教育たる宗教に至りては中々そうはき〳〵と著しく功能が知れ兼るものなれど、昨日も今日も善知識の御化導に預り、邪見の木の根をほり出してもろうたり不實な岩を碎かれたり、心の田地の地固めをして下さることゆへ、人生の行路において、非常な事に出會ふたとき、常の心を失はぬは因果の理法に明かなる、宗教信者の特色であります。

滑稽 佛いぢり

或眞宗信者の老婆が、朝から晩まで御念佛を申して阿彌陀様を拜み、又佛様に供へる物は何でも御の字をつけて呼ぶことに致しまして、御佛器御蠟燭御線香などと申しましたが御の字だけではまだ足らぬ處から様といふ字をつけて呼ぶ、そこで御佛器様御蠟燭様、御線香様と云ふやうに、何でも佛前に供へるものは御の字と様の字をつけ、佛前に供へるものは人間の用ふるものと別にしないと罰があたると申して、佛飯も一々別の御釜様で炊き別の御薪様を燃して、喜んでおりました、或時右の老婆が阿彌陀様の御飯を炊くと云ふて御小桶様に御米様を入れ御水様を注ぎて、其中に御擂木様を突き込んで頻りにかき廻はしておると、或人が通りかゝりまして、「何故に手にて米をとがずに擂木でとぐか」と尋ねまし

したら、「人間の手は汚はしい、御佛飯の米を手で洗ふては罰があたる」と申した、そこで其人が「然らば貴方は阿彌陀様を拜む時に汚れたる手は合はせずに、二本の御擂木様を合せて拜んだら宜しからう」と申すと、老婆は非常に腹を立て「其人を罰當りぢや」と惡口したと云ふことです、世にはこの老婆の如き佛いぢりが多くある、佛いぢりと宗教信者とは大に相違して居るのである。

シユウクワン 習慣 【世語】

ならはしと云ふ意、人の善惡は多く習慣の良否に依る

西諺に曰く「習慣は第二の天性なり」、

談叢 玄明和尚と大名

玄明和尚と云ふ大德がありて其和尚に或大名が御歸依申しておられた、或時和尚に申さるゝやう、「我が同席の大名が隱元禪師に歸依して、僧分の仲間へ這入りて行道せらるゝが武士が僧分の眞似をするとはおかしいことである」と話された、其時玄明和尚の答へらるゝやう「貴方は能狂言が御好で能役者の仲間になり、取分け狐釣の藝が格別御上手と承る狐の役をなさるゝときは、足どりから手ぶりから心の置場まで狐の通りにならねば出來ぬものぢやときゝましたが、大名が狐の眞似をするよりは、佛前で行道すれば即ち釋迦如來の眞似するのではござりませぬか、行道の方が遙か優れると存じます」と云はれたれば、今の大名も大に感じ入り、遂に和尚の弟子となられたとある、盜人の眞似ぢやと云ふて、人の品を奪たれば直に泥棒となり、親孝行の

眞似ぢやと云ふて親を尊敬すれば、それが即ち親孝行であるので、まねならうと云ふを畧してまなぶ（學）と云ふのです、「性相近し習ふ相遠し」まねならふと云ふ程大切なことはありませぬ。

按言 行爲は習慣を生じ　習慣は行爲を生ず

これはマルフランシュ氏の言葉である、行爲は習慣を生ずとは、相たにあらはした所作をたび〳〵重ぬると遂にはそれが一の習慣となる、例せば盗賊をするものは最初から盗賊となるものではなひ、極の初めは恐る〳〵僅かなものを盗む、處が幸にして知れなんだゆへに次に復盗みをする、それも運よくしれなんだ、それでこれなら大丈夫とおもい、「わるいとは知りつゝわたるまゝのがわ」、再三重ぬると心が大膽になり、數回かさぬるとそれが一つの習慣となりて、遂には持兇器强盗ぢやの殺人ぢやと云ふやうな重罪を犯すやうになる、こゝが「習慣は行爲を生ず」と云ふ處である。

潤色 艾子の四臓

艾子は相應に學問のある男で御座りましたが、酒を深く嗜みて常に酒氣を帶びて居ました、門人が之を憂ひて諫言しても容易に用いませぬ、依て謀計を用いて禁酒させやうと思ふて居る處、幸に艾子が大酩酊を致して、例の八百屋店をひろげさんた、門人は此機に乘じて諫言せんとて、豚の肉を一塊切つてまいりまして、之を八百屋店の中におきて、先生先生には大變なことを遊ばした、御覽遊ばせ

只今八百屋店とともに臓腑を御吐きになりました、人には五臓より御座りませぬにに、一臓吐き出しては、もはや四臓となりました、大抵に御禁酒なされぬと、命が危う御座りまするとと申しますと、艾子は醉眼朦朧として豚の肉をながめ、なぬ程予は四臓になつたか、併し唐には三藏法師さへ活きて居た、四臓なら一臓多いから差支なからうとて、また酒を飲んだと云ふ話がある、人の習慣ほど恐るべきものはありせぬ。

シユウコウ 宗孝 【人名】

相摸總世寺の禪僧なり、伊豆初島の人、天文二年正月寂す、世壽欠く、

談叢 宗孝和尚の濟度

永正年間、三浦爭同、北條早雲と戰ひ、敗北して自殺し其從卒も亦こと〴〵く殺された時に其子荒次郎、もとより驍名あり、大劔をふるふて戰ひ、人これに敵するなく自ら縊れて死んだが、死骸の眼晴爛々として、さながら生けるが如く、人々之をおそれて手を下すことをようせぬ、或は經を誦するやら、咒術をするやら、いろ〳〵にすれども寸効なし、よつて總世寺の宗孝和尚についてこれを濟度せんことを乞ふ、和尚則ち、

うつゝとも夢とも知らぬ一眠
浮世のひまをあけぼのゝ空

と詠じ威を振ふて一喝を下したるに、死骸言下に脱落して枯骨となつたとある、これ宗孝和尚が迷信の暗鬼を驅除して幻化の本源は凡夫の一心原頭にあることを示されたのである

シユウシユン　宗俊【人名】

肥前龍雲寺の第二代なり俗姓は岡本氏、肥前小城郡の人

禪話　宗俊和尚と妖火

肥州龍雲寺の宗俊和尚が同寺に住山の時、同國八戸城の南に圓藏院なる寺あり、亡僧の墓地に毎夜妖火の燃ゆるありて人民怪しみ怖れ多くの巫覡に乞ふて祈禱し幽怪をはらはんとすれども、火勢ます〳〵烈しくして如何ともする能はず、和尚これを聞いて黄昏ひそかに墓邊にゆき座禪して夜に入りしに、妖焔の熾んに上るを見る、乃ち念ずらく、

種々ノ幻化自覺心一生、
且々道ヘ幻盡キ覺盡ル時如何、

と、さらに一喝を下して曰く「薪盡きて火滅す」と、妖火言下に滅してまた燃ゆることなかりしと云ふ。

シユウヨウ　修養【世語】

佛陀聖賢の指導によりて、身を修め神を養ふを云ふ、

談叢　二程子と遊女

明道伊川の二人が或人の饗宴に列したるに主人は興を添へる爲めに遊女をして座間に斡旋せしめました、然るに伊川は嚴正謹格の人であるから怫然として其怒り顏色に現はれ袖うち拂て立歸りましたが、明道は少しも怒る氣色もなく、悠然として饗應を受けました、翌日に至りましても伊川は昨日の憤りがまだ解けませぬので、明道の云はるゝには、「昨日は席上に遊女ありて我心に遊女なし、今日は席上に遊女なくして伊川の心に遊女あり」と申されたと云ふ話であります、程明道は温容玉の如くで、其精神の鍛錬に於ては伊川に勝ること遠いやうに思はれます、禪學の修行は程明道の如く閑雅なる心を養ふが第一で、四角張りた程伊川の如き心の角をとるのであります。

談叢　陸秀夫と大學の講義

宋が滅ぶる時、陸秀夫と云ふ人が宰相の役であつた、處が宋は段々運惡く元の爲めに追ひつめられて崖山と云ふ一角の土地ばかりになり、遂に陸地は全く元軍に占領せられて、僅に崖山の沖に船住居することになつた、時に陸秀夫は、八九歳の天子を擁護して、毎日々々天子に向ひ大學の講釋せられたと云ふことである、これには昔の學者中にも種々な批評があつて、かゝる場合に大學の講義するとは、あまり迂濶千萬ぢやと罵つたものもあるしかし批評は不當ぢや、何となれば、陸秀夫は宰相であつて直接干戈を持つて敵に向ふ役ではない、敵と戰ふには文天祥とか張世傑とかいふ人が居て拔目なく軍事に盡粹して居たのである、陸秀夫は如何に戰爭に氣を揉んだとて仕方がない、それゆへこの大錯亂の時をも省みず、氣を落つけて自已の本分を守り、飽くまで幼き天子を慰め奉つたのは、實に適當の行爲であつて、普通のものゝ眞似の出來ない處である、三百年續いた宋の社稷も陸には一寸の地なく唯數隻の船に搖られ、東西南北皆敵に圍まれ、今にも天子を抱いて海底の藻屑とならねばならぬ場合に、悠然として天子に向つて大學の講義をしたとは、なか

〳〵尋常一様のものゝ企て及ぶ處でなく、陸秀夫が如何に平生に修養が積んで居るかがわかる。

談義 失敗せる商人

商人あり、商業に失敗して家に歸り、悄然として歎息をなす、「ア、我は失敗せり、我は破産せり、すべてのものを失へり」と大に泣き叫びました、之を聞きて妻の云ふやう「總てを失へりと云はるゝなれど、妾は御身の妻としてこゝに居ります、次に長男次男三男幼き娘も出て來つて父の兩袖すがり「父よ我等はこゝにあり」と、妻は又述べて云ふ「御身は御身の健康を持ち玉ふにあらずや」と、長男は云ふ「父は働くべき兩の手を持ち玉ふにあらずや」次男は云ふ「父よ兩の眼を持ち玉ふにあらずや」娘は出でゝ云ふ「父よ佛陀は父を守り玉ふにあらずや」と四方八方より慰安を與へましたので、商人は涙にむせび、「嗚呼我は未だ總てのものを失はざりし」と云ふたそうです、人生の行路には無量の失敗のあるものなれど、其中にあつて屈せず撓まず、向上の方面にたどるべきである、これ吾等が修養の歴程であります。

譬喩 水狗と龜

一人の青年が河邊の木の上で精神の修養をしておりました、十二年も立ちましたけれども心が清く靜まりませんので五官の爲めに賤しい想が起つてやみませんでした、或明月の夜一疋の龜が樹の下へまいりました、すると復一疋の水狗が餌を求めて此處へ來た、そして龜に出逢ひましたが、水狗はすぐさま噉はうとしますと、龜は頭も尾も四脚も甲の中へ引込めてしまいました、水狗は仕方がありませんから、少し遠ざかつて居ると、龜は徐々頭や尾を出して歩き初めます、おのれ今度はと水狗が飛びつくと直ぐ亦引込んで仕舞ますから、龜は畢竟噉はれずに助かりました、之を見て居た青年は何と感じたであろうか。

譬喩 貧乏人と篋

一人の貧乏人がありまして負債が澤山出來ました、けれども何とも拂ひやうがありませぬ、そこで家をにげ出しまして野原にまいりますと、實の一杯入つてある篋が落ちてありました、此篋の中には鏡が入れてありまして其上に蓋がしてあるのでした、貧乏人はそうとは知らず、喜び勇んで蓋を開いてみると鏡に人の顔がうつります、これまで鏡を見たことがないのですから、貧乏人は大そう怖れまして手を合はせ、實は持ち主がないことゝ思ひまして此中に貴方が御いでなさるとは夢にも知りませんものですから、どうか忿らずに堪へて下されと云ふて其處を立去りました、これは百喩經の中に示させられた寓話であるが、此男は自分の影が鏡面にあらはれて居るのぢやと云ふことを知らなんだのである、否此男のみならず、世の中には自分の影の爲めに實は手に入りながら、ふりすてる者が多いのである、社會百般の出來事が皆自分の影が向ふへ映つたのであると氣がついたなら、第一に心がけねばならぬのは精神の修養であり

ます。

滑稽 擔板漢

或愚者、一日肩に大なる床板を擔ぎて或町を通りましたが、家に歸りて父に告げて云ふやう「兼て聞いて居た某市街は、繁華なる美しき街ならんと思ひの外、あれだけの街にして片側の街とは、遺憾なことではないか」と歎息をもらしたと云ふことであります、これは彼の愚者が己れの肩に板を擔げることを忘却して、某市街を片側街なりと認めたのであります、古來之を一方むきの擔板漢と申して一方に偏する事を戒めたものである、智德幷び進むのが眞の修養と申すものであります。

ジユウレンアンラク 住蓮安樂 【人名】

住蓮は東大寺の維那なる實遍の子、安樂は外記入道師

秀の男なり、源空聖人の弟子にして共に承元の法難に一命を棒ぐ、時に承元元年二月なり、

因緣 住蓮坊と安樂坊

住蓮安樂の兩僧は、堅固なる信念を持ちて一身を犧牲に供して毫も恨むることなく、死に至るまで稱名相續せし活劇は、實に千載の下、儒夫をして立たしむるの慨ありと云ふべしである、

この頃のかくし念佛あらはれて
彌陀の淨土へからめとらるゝ

とは住蓮坊が辭世にして、

極樂へまいらんことの嬉しさに
身をば佛にまかせするかな

これ安樂坊が最後の叫びである、今其一班を錄せん。

安樂坊は六條河原を刑場と定められ、官人永井左衞門忠經が氷の劔を振り上た時、安樂坊は手をあげ、「ヤレ暫く御待ち下され、とてもなき命なら、一時片時の猶豫を與ゑ玉へ、わが信ずる彌陀の本願、稱る所の念佛の法門功德殊勝にして其利益空しからざれば、今や何ぞ幾分の奇瑞を現せざらん、見物の諸人緣なきものは是非に及はず、苟くも緣ある信徒は、之を見、之を聞て、彌增に法義を相續して、勇ましく共に淨土の往生を待つべきなり」と云ひつゝ、土壇の上に座しながら、兩手合はして珠數をかけ、南無阿彌陀佛々々々々、さて、嬉しや勿體なゐ、借問す家鄕は何れの所にありや、西方池中七寶の臺、我身の本國親里は、十萬億土の西方にて本師の如來が待ち玉ふ、さてもうれしや勿體なゐ、念佛稱へし罪により、今が最後の臨終なり、今が御禮の仕おさめなりとて、日沒の禮讃を稱へらる所が奇なるか妙なるかな、空中にズーット紫の雲が靉きわたりた、其雲がきり〳〵と舞ひ下り、安樂坊の頭上にありて正圓く、其狀ち天蓋の如し、群集の人々はあきれて居る、其時安樂坊の申さるゝ樣は、念佛數百遍の後、別れて最後に十念を稱ぶ、それを待つて首を切るべし、切られて後に合掌みだれず身體右の方に仆れたなら、目出度西方の往生をとげたと知るべきなり」と、高聲に念佛數百遍、最後に及び改めて念佛十遍、十念に滿つるを合圖にバッサリ首を刎ねられた、所が不思議なるかな、申されたに違はず、合掌みだれず

手を合はせながら、身體は右の方に仆れたゆへ、見物の諸人、おぼゑず法度を忘れて異口同音に、南無阿彌陀佛々々々々々と稱へぬものはなかりた。

次に住蓮坊は佐々木九郎吉實に仰せつけられ、江州馬淵西の岡にて死刑の處分に行はるゝ、これ亦誓を立て、吾胸の信心堅固にして西方の往生間違ひなくば、切られて後、首なき胴は念珠を爪繰るべし、胴なき首は十念を滿足すべし、首と胴との間より必ず光明かゝやくならん、又青き蓮華を生するならん、その蓮華の芳り芬々と四方上下に薫じわたりて、光明と血烟りとに接すべしと、慥かに諸人に告られしが、誓言果して間違ひなく、官人士壇に上りて首を切り放すなり、直に首と胴の切口より、「パーット光明がかゝやき、青々と青き蓮華を生じ、清淨潔白の香氣、光明の中血烟りの中に芬々と薫じ渡りた、その奇瑞を見るもの香氣を聞くもの、一人として佛法の尊きに感せざるはなし、猶切られた首は空中に上り、安然と住して聲はり上げ、南無阿彌陀佛々々々々と十念を滿足す、又首なき胴は珠數をさら〳〵と押し揉んで止まず、其珠數の音空中に響いて十念相續の聲に合すかゝる奇瑞を見聞せし道俗、ア、目出度き往生かなと、信心いよ〳〵増長して、異口同音に念佛の聲は土壇の周圍に唸りけり、此兩人の首は山科におくりて梟首にあげられしが、住蓮と安樂とは、俗にありては一所の朋輩、出家の後も申し合はせ、俱に一蓮托生の契りこれによりて假の死骸も一所の墓にと厚く遺言せられしゆへ、その衷情を酌量し、兩人の首を江州馬淵におくり、かの地に於て一所に埋められた、「住蓮安樂の墓」とて、今に其舊跡がのこりてある。

シユクゼン　宿善【術語】

宿は宿世、善は善根にして宿世の善根を指す、これに汎爾の宿善、係念の宿善の二あり、

詩　去年荆南梅似雪　今年楚北雪如梅

これは唐詩選に載せてある詩で、同じ花の咲くにも、處によつて早い遲いがある、又一本の梅樹でも南の枝は早く北の枝は遲し、これ春の陽氣は平等にして隔てはなけれども、木のあり處や枝の都合によつて遲速の異がある、今が丁度其如くで、如來の御慈悲は萬機普益にして平等なれども、衆生業障の寒氣強くして、宿善の熟せぬものは北枝の如く信心の花がおそい、如何なる惡人にても宿善熟したるものは南枝の如く宿善の蕾早く開く、この宿善に早晩遲速の差があるから、往生に己今當の差を生ずるのぢや。

歌　春秋を草木にうつす天津空　言葉はなくて色に見へけり

これは行基菩薩の歌である、冬の頃は枯木同樣なる草木も春になれば芽を生じ花鮮かに夏は青々と繁茂し、秋は紅葉する有樣は皆天地陰陽の德である、今我々凡夫の性も無漸無愧で枯木同樣なれども、宿善の苔ひらけて信心の花となり、參詣恭敬の枝葉が榮へ、邪見我慢の我々が、御恩うれしやと色をかへたる

は、誠に喜ばしきことです、このこゝろを蓮如上人の歌に、

阿彌陀佛にそめられし身の色はこれ
　秋の木の葉のたぐひなるらん

歌

青柳の糸ばかりこそなびきけれ
　木ども春の風はふけども

春の風は何れの木にもわけ隔てなく吹きわたれども、心よくなびくものは柳ばかりである、されば風になびく、なひかぬは木の方の生れつきであつて吹く風の咎ではない、今善知識より教へたまへる御法にすこしも隔てはなけれども、宿善なきものゝ、ありがたしと信ずる心は起らず、無宿善の機は力及ばぬ所にて普く風は吹けども外の樹の枝はなひき動かぬ如くなり、宿善さへありぬれば、吹く其まゝ風次第になびく柳の如く、信順の心を發すべし、さてこそ「遇獲信心遠慶宿緣」と、聖人は宿善の大切なることを知らせ玉へり、もし宿善開發の機にてもわれらなくはむなしく今度の往生は不定なるべきことなけきてもなをかなしむべきは、たゝこの一事なり」と蓮如上人も示されてある。

句

鵲の巣ありこれ鳩こゝにおる

くちばしの強い鳥は骨おりて巣造りをする其出ぬけたあきあとへ、我が骨おらずに鳩は巣ごもりをする、聖道諸宗の外に淨土の別宗を開かせられたは法然聖人、其淨土宗の骨髓を淨土眞宗として御ひろめ下されたは、祖師聖人、いろ〳〵さまゞ〳〵と御骨の折れてある御宗旨へ、尋ねまわる苦勞さへせずに生れながらに御流れを汲ませてもろうたは、よく〳〵宿因深厚の身であると喜ばねはなりませぬ。

説話

栗

「時かいたれば〳〵」と云前句に「要害を内からやぶる栗の房」、夏から秋の中旬までは、房か剛ふて、なか〳〵觸られもせぬ、夫れが秋の季になれは、自然と房かほころび發て中から美しひ實が出る、強剛難化の我等か、宿善時到らぬ間たは、慳貪邪見放逸無慚、要害きびしきありさまは、栗の剌房よりもをそろしかりたか、今宿善到來したれば、疑惑不信の房もひとりでに綻ひ裂て、御助候へとほぞをちのするやうになりた。

因緣

轉乘の法華經讀誦

大和國の僧轉乘は、法華經八卷の中、前の六卷は覺へたるも、後の二卷をそらんずることのならぬより、初瀬の觀音へ祈禱せしに、觀音の告げらるゝやう、汝が前生は播州赤穗にありし巨蛇なりしが、或僧の旅ごもりして徹夜讀經せしをば、害心を懷きつゝ聽聞して居たが、僧もつかれて前六卷にて休み、巨蛇も害心やみて去つたが、其宿善によりて今汝は人界に生を受け、僧となりて法華經を讀誦する身となつたのである、しかしながら前六卷は前生にて聽聞したれど、後二卷は聞かなんだから、それで今後の二卷をそらんずることが出來なゐのであると告げられたそうです今我々が佛法を聽聞するのも亦其如くで、

過去已曾修習之法今得重聞卽生歡喜

ふかい〳〵宿善のあらはれてあると喜ばねばなりませぬ。

因縁 智誓和尚と衆生縁

唐の開元寺智誓和尚は、學德幷びに高き人でありたれど、講筵を開いても法話をせられても聽衆が至りて少なゐ、和尚は大に之を歎いて、かくまで聽衆の少なゐは定めて佛の御心にかなはぬのであろうと思ひ、それより諸國をめぐりて、學を磨き德を積まんものとて發錫せられたが、或時、南岳山と云ふに至らるゝと、一人の老僧に出遇はれた、老僧曰く汝若きより菩提心ふかく、晝夜學問に精を入れ、四百餘州に幷びなき學者なれども、衆生緣のなゐと云ふは致方のなゐものぢや、依てこれから食物を調へ、野に出でゝ虫や鳥に施すべし、それを緣として法を聽聞するものが多く出來るであろう」と云はるゝかと思へば老僧の御姿は見ゑぬ樣になりた、和尚はさて〳〵これは不思議の靈告、定めて佛菩薩の御指圖であろうと思ひ、早速自分の着ておらるゝ九條の袈裟を賣りて食物を買ひ、野に出てゝ鳥や虫に施されたが、其後二十年ばかりすぎて、說法せらるゝと云ふと、八百人千人と云ふ樣な大群參でありたが、皆二十歲以下の人ばかりでありたと云ふことぢや、これ袈裟を賣りて施された緣によりて、和尚の下に集るようになりたのぢや、これから思へば、今日參詣の人々も皆多生の强緣のあらはれによりて、一堂に會することが出來るのぢやぞや

シユジヨウオン 衆生恩 【術語】

一切衆生無始以來五道に流轉して多生の中に父母となる、この因緣の故にもろ〳〵の衆生に亦大恩あり、

談叢 一莖の菜

昔、或僧が師を求めた處、叡山の或寺に一人の大德が居らるゝことを聞き、其御方を尋ねて白河の邊より山に上りました、だん〳〵行くと一つの谷川がある、この谷の奥が其大德の御寺のある處であると云ふことを聞いて樂み〳〵上りてまいりますると、フト川上より一莖の菜が流れて來ました、そこで思ふには、一塵一芥皆佛物である、然るにこの菜をみだりに流すと云ふのは誤りた量見である、その樣な人を師と仰ぐことは出來ぬと、力を落して踵をかへし少しく下りて來ますと、忽ち一人の僧が後ろの方より走りて來る、「何事であるか」と尋ると、「今一本の菜を流したればそれを拾ひに行くのである」と答へましたそれを聞いて前の僧はゑらいと感じて「あなたはどうゆう御方か」と問ひまするとと、「この奥の寺に居らるゝ御方の弟子であ」ると申したゆへ、弟子でさへ此通りであれば、師の聖の德もおもいやらるゝと感じて、又引かへして山に入り、その大德について修行せられました、私はこの話を聞いて、古の師を尋ぬる人の眼のつけ處が當並でなゐことを奥床しく思ふと共に、又衆生恩を思ひて些細なるものをも疎末にせぬといふことをたふとく感じました

談叢 熟飯の回向

佛弟子は熟飯の回向と云ふのがある、これは食事をする度毎に、

耕夫餉婦疲馬嫩牛
螻蟻蚊虻蝦蟇蚯蚓
舂炊人力供給淨人

と呪文を唱へるので、このこゝろは、この一ぱいの茶碗の飯なか〳〵容易なことで我口に入るにあらず、男は耕し女は耘る、五月雨の植付時分には、雨にうたれ泥にまぶれ、汗水流して身を苦しめ、加之、馬の背を煩はせ牛に骨をおらせ、鋤鍬にほりかへされては思はず知らず蟻や蚓をころし、其他數多の生物の命を取ること限りなし、秋になれば朝に星を戴いて稻を苅り晩には星を戴いて家におさめ、長き夜もすがらこぐやらひくやら、はたすやら、精げて研で釜に入れ、衆多の人の汗の堅り、種々動物の命の値ひ、願くば此が爲めに骨を折り汗を絞り、身を亡し命を捨たるもろ〳〵の衆生、三寶供養の因緣によつて佛果菩提にいたれかしと、慇懃に回向して箸を取るが佛弟子たるものゝ食事をなす時の規則である。

歌話 繼子の孝行

昔、信濃國の人が京都にて或婦人と懇ロに相成まして妻にせんとて召し具して歸りました、然るに此婦人は心浮きたる女にて京都なる他の男より數多の文を書き送りましたるを取りかくして、夫に知らさぬやうに致して置きましたが、隱さんとすれば却てあらはるゝ道理で、人の口には戸がたてられず、遂に其事が評判となつて夫の耳にも入りました、夫は大に怒つて彼の文を數多尋ね出しましたが

無學文盲の悲しさには少しも讀むことがなりませぬ、そこで我子が戸隱の山寺に居りますのを呼びよせ、繼母の前にて讀ませました、此時繼母は色を失ひ、肝も心も身に添はず心配して居りまする、然るに此子は心あるものにて、只尋常の文のやうに和らげて多くの文を讀み聞かすれば、繼母は元より、父も漸く安堵して何事もなくて相濟みました、繼母はあまりのうれしさに、詠みてつかはしたる歌に。

信濃なる木曾路にかくる丸木橋
ふみみし時はあやうかりける

とありましたれば、其子の返歌に

信濃なる其はらにしも宿らねど
皆はゝきいと思ふばかりぞ

なんと哀れに優しい心かげでは御座りませぬか、これ經文に所謂、

一切の男子は皆吾父
一切の女人は皆吾母

と申す心で、天地同根萬物一體の道理に合したる道德で御座ります。

シユダツ 須達 【人名】

又は蘇達多と云ひ善施と譯す、波斯匿王の大臣にして祇園精舍の施主なり、

因緣 祇園精舍の由來

阿彌陀經の初に祇樹給孤獨園とありて、祇樹とは、祇は祇陀太子のこと、樹は樹木のことで、祇陀太子の寄附せられたる樹木と云ふことで祇樹と云ふ、給孤獨とは須達長者のこと、園は園地のこと、この園は祇陀太子の所

持の園でありましたが、精舍を立てるについて、須達これを買ひ求めようと願ひしに、太子戯れに、この園に金を布き満つる程いたさば與ふべしと、其時須達が承知をして、其園に満つるだけの金を布き其園を買ふて釋迦如來に奉つた、そこで祇陀太子が須達長者の志に感ぜられて、其園にある樹木だけは私が献上致すとて差上られたゆへ、それで兩方をよせて祇樹給孤獨園と云ふ其園に須達が精舍を建てたのが祇園精舍であります、須達を給孤獨と名くるは、探玄記に、無レ父云レ孤無レ子云レ獨 須達長者恵施貧給名二給孤獨一とあるにて明なであります。

因縁 須達長者と舍利弗

須達長者、釋尊を舍衛國へ御招待申たひとて、舍利弗一人御供して、祇陀太子の別荘をもらい、金を數つめて買ひ求められ伽藍の繩張をせられた、舍利弗の御指圖で、其處へは大講堂此處へは十三重の塔彼處には山門と、あらまし伽藍の繩張がすむと、舍利弗尊者、ニッコリト御笑ひなされた、「これは如何なる譯であるか」と問へば、御答なさるゝやう、「今祇園精舍の繩張がすんで、ハヤ其許が未來生れる忉利天に宮殿が出來ました」と云はれた、須達長者は「それは見たい、見せて下され」と云ふたら、舍利弗が須達に天眼を貸してやり見せられたとある。

シユツセホングワイ 出世本懐 【術語】

釋尊が此世に出現し玉ひたる本意を云ふ、

句 唯といふ文字は燕かつくりしか

燕と申す鳥は、親鳥が家の中や軒場に巣をつくり、雛鳥を育てあげるに一心不亂になつて、自分はやつれおとろへて、ろくに餌ばみをさせて育てあげ、種々様々の苦勞をして巣だちをさする、そこで口篇に隹と云ふ字を書いてたいとよませる、それを今「唯といふ文字は燕がつくりしか」とよんだ、正信偈にはこの唯の字を六ヶ所まで御使なされてあるが其第一番が唯説彌陀本願海である、聖道門の苦いところや自力のかたい處をすてゝ、うまいところの彌陀の本願海を説いて下されたが如來出世の御本懐である。

シユリハンドク 周梨般特 【羅漢】

周梨般陀伽とも云ふ釋尊の弟子なり、愚鈍なるを以て名著ほる、

因縁 周梨般特の魯鈍

周梨般特は釋尊の御弟子八萬の大衆の中で一と云ふて二のなゐ愚鈍な御方でありたが、よく〳〵の愚鈍な人と見ゑて御自身の名さへ覺ゑられぬ、たま〳〵人が御前の名は何と申しまするぞと尋ぬると、されば私の名は何と申しますやらと、急に返答しかねる故、釋尊は周梨般特と云ふ名を札にかいて迷ひ子の札を見るやうに提げさせておかれた、そこで人が御前の名は何と云ふと問へば、其札を出してみせられたとある、ヶ様な愚鈍な御方であるゆへ、一夏九十日の間、五百羅漢の中で、一日づゝ御經を教へなさるゝ所、今日舍利弗が教へなさるゝと明日は迦葉と云ふやうにして教へなさるゝとき、朝から晩までかゝりて

やう〳〵一句か二句かを覺へなさるゝと、喩へて云はゞ今日一日舍利弗が「如是我聞一時佛」まで敎へると、どうやらこうやら覺ゑ、又明日目連尊者が、昨日「如是我聞一時佛」はすんだで今日は其次をと云ふて、昨日の處をさらへさせてみると、昨日覺へたことは殘らず忘れて仕舞ふておる、又初めから如是我聞と敎へねばならぬ、毎日〳〵覺ゑては忘れ忘れては習ひ、九十日の間かゝりて一字一句も覺ゑなんだ。

時にこの周梨般特の兄君が先きに出家してござりたが、あまり他の御弟子方へ氣の毒に思ふて、周梨般特の手を取りて門前へ引き出し、所詮其方の樣な愚かなことでは佛道修行はならぬ程に、親の家にかへりて還俗せよと叱かられた、其時周梨般特の思ふやう、「いかさま兄樣の叱からるゝは無理でなゐ、一夏九十日の間、毎日〳〵大勢の御世話になりて一字一句も覺ゑられぬとは、どうした先世の因緣やら、されど今更家にかへり九十日の間御經習ふたれど覺ゑることが出來なんだにより て、追ひ出されて戻りましたと云ふて我家へも歸られまい、出家さきからは追ひ出され、我家へは歸られず、所詮生きては居られぬ、これは是非なきゆへ身體をなげて死なうと覺悟はしてみても、佛世には値ひ難く佛法は聞き難いのに、たま〳〵如來の御在世に生れ御弟子までになりながら、一字一句の法門も辨へずに死んでしまうたら、未來も三惡道に沈んでうかむ時節はあるまい」と思ひ、死ぬるに死に兼て、五體を大地へ投げ伏して泣き悲んで居られた、處へ大聖釋尊他より御歸りなされ、周利般特は何故に其樣に泣き居るぞと御尋遊ばされたれば、御答へ申すやう、「如來の嚴命によりて九十日の間御經を敎へてもらいましたれど、どうしたものやら一句一字も覺ゑられませぬ、それゆへ兄に追ひ出されまして、親の家にかへりて還俗せよと申されますれど、今更内へ歸られませぬ、死なふと覺悟は致しましたれど、たま〳〵佛在世に生れながら、空しく死んでは未來永々刼、三塗に沈んで浮む時節はあるまいと存じ、死ぬるにさへ死に兼て此樣に泣いて居ります」と申上たれば、如來は不便に思召して、「最もなことぢや、家にかへるには及ぶまい、マアこちらへ來れ」と百福莊嚴の御手をのべて、周梨般特の手を引き門内へ御入りなされ、汝は其樣に覺ゑられずば、マア當分庭の掃除をしたがよいと箒を取りて御渡しなされ、守口攝意身莫犯如是行者得度世と、たつた十四字ある偈文を敎へさせられ、この經文の心を思ふて掃除せよと仰せられた、如來の加被力にて其偈文が覺ゑられて精出して掃除して居りながら忽然として思案が出て、この夥しい塵埃も箒ではけば奇麗になる、煩惱は塵埃の如く智慧は箒の如く、智慧の箒を以て掃はゞ如何なる煩惱ぢやとて斷除せざるべきかと暫く思案する内に廓然として夜が明けたやうに阿羅漢のさとりを開かれた、たつた十四字の偈文を覺へたばかりで、智慧第一の舍利弗

や神通第一の目連と肩をならべて、阿彌陀經の會座にもつらなられてあります。

因緣 周梨般特と比丘尼

釋尊の御在世に五百人の比丘尼がありて、別の精舍に住して居たが、釋尊は日毎に一人づゝの比丘をつかわして、尼の精舍にいたりて經法を說かしめ玉ふた、たま〳〵明日は周梨般特來るとの事を聞いて、多くの尼は口を覆ひて笑ひ、相約して云ふには、「周梨般特が明日來りたらば、例の守口攝意の文を此方より唱へて、彼をして耻をかゝしめようではござらぬか、彼れは守口攝意の外に一言も演ることが出來ぬから、顏を眞赤にして愧づるであろう」などと噂をして居た、さて翌日になると周梨般特が來られました、大小の比丘尼皆いでゝ之を迎ゑ、互に顏を見合せて笑ふ、乃ち齋を供へ手を洗ひ、說法を請ひました、周梨般特しづ〳〵と高座に上りて曰く、「我はまことに德うすく才なし、僅かに沙門となるも頑鈍にして無智なり、わが學べるところ唯一偈あるのみ、その意はホい之を知り得たりまさに爲めに說きのべん、願くはおの〳〵靜かに之を聞かれよ」とて、例の守口攝意を誦し出さんとせし時、かの年少き比丘尼、かねてたくみし如く、先づ此方より彼の偈をとなへんとするに、忽ち口つぐみ舌ちいまりて言ふこと能はず、よりて大に怖れおのゝき、自ら進み出でゝ、自分たちの惡計をのべて罪を懺悔しました、周梨般特は釋尊の說きたまへるごとく、身口意におこす所のいろ〳〵の罪能く愼めば天に昇り、犯せば冥きに沈み、悟りて道を得ぬの理を說き明しましたれば、もろ〳〵の比丘尼、大に感じ喜びて何れも禮をのべましたとある、これは德の如何に尊きかと云ふことを說くには、最も適切なる材料であります。

因緣 物わすれの競爭

或寺の長老が客僧に向ふて「貴僧も久々にて當地へ御巡敎下されたことであるが、何ぞ珍らしきことはござりませんか」と問ふた、客僧曰く「先頃私の地方に殊の外に珍らしいことが御座りた、それは斯うなのです、十歲ばかりの子に十念を授けましたが、大層喜んで辭世を讀んで死にました」、長老曰く、「それは珍らしい御話して、其辭世はどうゆう歌でござりました」、客僧曰く「エ、何とやら云ふ歌でござりましたが、其當時はよく覺ゑて居たれど、とんと忘れて仕舞ました」、長老曰く「その樣な有難い歌を忘れることは何とした淺間布ことであります、沙門が物忘れして悟の道がどうなるものぞ、チト御たしなみなされ」、貴僧の樣な御人が釋尊の御弟子にもありたそうですが、其人の名は（周梨般特と云ふことを忘れて）、エ、なんとやら云ひましたわい…

シユンジヨウボウジユウゲン　俊乘坊重源

【人名】

源空聖人の弟子なり、俗名重定、俄に佛門を慕ひて出家し、醍醐寺にありて佛門をならひ、後源空に隨ひて專修念佛の法を受く、東大寺再建の勸進を命ぜられて名著ばる、建久六年六月寂す、壽七十餘、

因緣 大佛建立の功德

奈良の大佛再建開眼供養の砌、俊乘坊重源法然聖人への御尋に、「ヱ、御師匠樣、最初聖武天皇大佛の靈像を御建立なされしとき婆羅門僧正讃嘆して、大佛建立の功德は南閻浮提第一の大善根と朝廷へ奏上せられたそうでございます、然るに御師匠樣の日頃の御敎化には、眞實信心の稱名は稱るたび〳〵に功德は十方法界々に滿ち充つるこのこと、大佛建立の功德と念佛の利益と其勝劣如何でございます」と申出られたら、聖人の御答に、「婆羅門僧正の讃嘆せらるゝは自力の上の沙汰、予が述る所は他力門の御利益、依て大佛建立の功德は廣大にましませども、他力不思議の念佛に比べたら、日輪と螢、鯨と蛙、それよりもまだ〳〵相違があるぞよ」と仰られたとある。

ジユントクテンオウ 順德天皇 【人名】 名は守成後鳥羽天皇の第三子なり、承久三年北條義時の爲めに佐渡に流され、仁治三年佐渡に崩す、在位十一年、壽四十六、

歌話 順德天皇と郭公

順德天皇、佐渡の國へ御遷幸遊ばされし時郭公の聲をきゝたまひて、

鳴けば聞く聞けば都も思はるゝ
物思はせり山ほとゝぎす

と詠じたまひて、都にて玉簾の內できゝしこともありしに、今はかゝる島守となつて、あじきなくも聞くことよ、郭公の聲を聞くたびに都の事が思はれて、幾度も〳〵我を泣かせるぞと詠じたまへば、郭公もこれを感じ、さては天子つ御歎きの種となりたるかと、其夜より佐渡が島中に郭公はなかなんだとある。

ショウオクニモン 攝抑二門 【術語】 攝とは拐取、抑とは抑止なり、釋迦は慈父の如く、五逆と謗法を抑へ止め、彌陀は慈母のごとく、惡人女人を攝め取りたまふ、

歌 父親の雷聲に驚きて
臍繰金をくれる母親

と云ふ狂歌がある。

又「臍繰を雷婆も子に取られ」と云ふ狂句がある、共に雷に臍を取られると云ふ俗話からよんだので、人情の至極があらはれて居ると思ふ、藥鑵頭の父親が、息子を膝下へ呼んで、帳簿上と現金とは大違ひ、サア此金の行衞はどうぢや、こんな事では此家の財產はどうなるぞ、破產をしては祖先へすまぬとはなぜ思はぬぞ、金の行き塲はどうぢや〳〵と嚴しい吟味、息子は一言半句の返辭もなく、唯さしうつむくばかり、用事ありげにこそ〳〵と母親を裏へつれて行き、母さんどうなとして下されと、母親にすがれば、誰にも云ふな極內證ぢやと、臍繰金を出して、モウこれ切りで一厘もなゐ、今度からはしらぬぞと放蕩息子に渡す、これが「臍繰を雷婆も子に取られ」と云ふ處ぢや、子には目のなゐ親心、親が盲目になりたぢやなゐが、我子を可愛い〳〵が親の慈悲ぢや、其中にも父は嚴父と云ふて嚴しく、母は悲母と云ふてやさしきもの、それ故和讃にも「釋迦彌陀は慈悲の父母と仰せられ、口傳鈔には「抑止は釋迦の方便眞實の落居は彌陀の本願にきわまる」と仰せられたのぢや。

句 たゝいても明けてやるなと待つて居る

兄はまた戻らぬか、毎晩々々の青樓遊び、女郎買に浮身をやつす樣子、今晩こそは表の戸を叩いても明けてやるなと、嚴しき父親の口上、これが釋迦の抑止門、待つて居ると云ふのが彌陀の攝取門、母親は寢ても寢られず今頃は何處にどうして居る事やら、醉ふて路傍に倒れて居りはせぬかと、裏口あけて待つて居るは母親一人、今大悲の阿彌陀如來は、觀經下三品の裏口あけて、今やたのむか信ずるかと、惡人女人を待ち兼て御座るのぢや

歌話 加茂の長明と津守夏國

加茂の長明が觀月の宴を催し和歌の友達を集めて月を待ちうけておられたが、生憎月が曇りかゝりた、其時長明が、

吹き晴れよ我が加茂山の峰の嵐

こはなほざりの秋の空かは

とよまれたれば、此歌天地に感應やしけん、暫くの間雲がはれて月が見られたとある。

又住吉の神主に津守夏國と云ふ人がありてこれも十五夜の月を待ちうけて居られた所が其年の月が曇りた、そこで夏國が、

よしくもれ曇らば月の名を立てん

我身ひとつの秋の空かは

とよまれたれば俄かに空がはれて、鮮かな月がみられたとある、この二人の歌は言は別なれども、意は一つで、先づ長明の方は吹き晴れよ我が加茂山の峰の嵐と吹きはらし玉へ我が加茂山の神風よ、今宵の月を詠めたさに、折角まちうけた月なれば、晴したまへと希は

れた歌の意、夏國の歌は、よしくもれ曇らば月の名を立てんと、曇らばいくらでも曇りたがよい、世界中の人が今宵の月を待つて居たのに、曇つたら惡い月ぢやと浮名こそ立て、我一人見る月ではなゐものをと思ひ切つた意ケ樣に言の上は違へども、吹きはれよと願ふたも、曇らば曇れと思ひ切つたも、月を詠めたいの心は一つなればこそ、天地も感應して曇つた月も晴れたのぢや、除くと說いた釋迦の抑止も、救ふと說いた彌陀の攝取も、言葉は別なれども意は一つである。

譬喩 芝居落語

世間で親が子を育てるのに、芝居や落語義太夫などには、決して行くことはならぬと云ふて禁する人もあり、又中には芝居は勸善懲惡の早學問ぢや、落語や義太夫も人情を解するには有益であると云ふてこれを許す人もある、禁ずると許すとの差ひはあるけれども、我子の將來の爲めを思ふところの親心の慈悲と云ふ點に至りては、たゞ一つである、釋迦の抑止も彌陀の攝取も、つゞまるところはたゝ一つの御慈悲より外はなゐのであります。

因緣 棄兒

五六年以前に京都の千本通に至極貧窮なる人がありたが、五人の子をおいて夫は、死出の旅路に趣いた、あとに殘る女房は女の手一つで五人の小供の養育をせねばならぬのですから、なか〳〵やりきれぬ、殊に當年生れの末子は乳がなゐから致方がなゐ、牛乳やミルクを買ふ樣な力はなし、人に預けると云ふ樣

なこはは尚更出來ず、この上捨子にするより外に道はなゐと決心したが、どうも慈善心のあつき人の門でなければ捨てることは出來なゐと思ひ、いろ〳〵と考へた、尾張の名古屋に非常なる慈善心のあつき富豪ありときゝ、わざ〳〵四十里の道を遠しともせず、名古屋まで行いて、深更人の寢靜まるを待つて、其富豪の門前に可愛い子を捨てた、主人は門前に嬰兒の泣聲ありときゝ、番頭などに云ひつけて門の戸を開いてみれば、果して嬰兒がすてゝある、主人は早速に抱きあげ、闇に向ふて云はるゝには、「この嬰兒の親は其處らあたりにはおらぬか、もし、居るならばよく聞けよ、因緣ありて己れが拾ふたからは、乳母を雇ふて大切に養育し、小學校は云ふに及ばず中學大學も卒業させてやる程に安心をせよ」と云へば、母親はうれし涙にむせび耻も打ち忘れて、主人の前へ名乘り出で、其子の行末をふかくたのんだとある、今なぞらへて御取次に及んでみると、三世恒沙の諸佛には、大蛇を見るとも女人を見るなかれと見捨てられた、我々なれど、もと〳〵諸佛も御慈悲ゆへ自力で養育の出來ぬことを御見拔きの上、第十八願の門前へ御捨てなされたのぢや、大悲の彌陀は惡人攝取の門の戸を開きて、「たとひ罪業は深重なりともかならず彌陀如來はすくひましますべし」と呼びかけたまひ、罪は願力の不思議で消し亡ぼし、功德は廻向で與へて、彌陀同體のさとりを開かせようとの御慈悲である、抑止は釋迦の方便と云ふ味ひがこれでよく〳〵難有く頂かるゝでせう。

ショウキホンマツ　生起本末　【術語】

教行信證に「聞二衆生佛願ノ一一一一一一一一一無レ有二疑心一」とあり、彌陀の本願のおこりを能く聞けとなり、

【註】蘇晉長齋繡佛ノ前醉中往々愛二逃禪一

これは杜子美の詩である、此意は唐の世の蘇晉と云ふ人佛法に歸依して常精進を致したが、性得殊の外の上戸なれば酒を止めることかなはず、御内佛の本尊には繡彌勒と云ふて布袋禪師の繪の畫像を一幅かけてある、これは布袋を彌勒の化身と云ふ、それゆへ布袋禪師の繡にしたのを直に繡彌勒佛と云ふ、されば餘の佛菩薩は酒を好き給はぬにこの布袋ばかりは、酒が大の好物なれば、我家の本尊に相應なり我が性質によくかなへりと云ふて彼の畫像の前で醉まぐれに座禪をしたと云ふことがある、此因緣で酒德利に布袋の姿かつくりておくのぢや、蛭子でも大黑でもよかりそうなものぢやに、昔から酒德利には布袋ときまつておる由來はこれで明白でありませう今も其如く佛願の生起本末をきかぬ内は、一日七日の名號をとなへ、稱へた力でまいることのやうに思ひ、取り違へて居つたのを、聖人、善知識の御蔭で佛願の生起本末を御きかせ下され。

阿彌陀佛の昔、法藏比丘たりし時、衆生佛にならずは我も正覺ならじと誓ひたまひ其願すでに成就したまひし姿こそ今の南無阿彌陀佛にてありけりと思ふべきものなり。

と聽聞してみれば、無手と願力に乘托するばかりぢや。

賛嘆 本帳

物品を買ふにこれはいくらぢや、それは高い、代呂物がわるい、拾錢にまけよと云ふ、代呂物に難をつけて貳拾錢のものを拾錢にねぎるは、腹の立つことの樣なれど、根切るやつなら相談が出來る、これはいくらぢや、貳拾錢コリャ安い、代呂物もよひ、コリャ直打があると、代呂物ほめる奴に物を買ふためしなひ、彌陀の本願は四十八返まで正覺の命をなげ出し、御受合の御言をきいても疑ひ、何もかも尊いが、たのめの御意が六ケ敷いと、六字に難をつけて小言を云ふ奴は、小づら憎い樣なれども彌陀の方では、サアしめてやりた、一度は六字、買はさにやおかぬと御喜ひたい、尊い難有と譽めてながめて居るものは如何な彌陀でも仕方がなね、精出して直切らつしやれ、段々直切ると本帳出して見せる、本帳見れば直切り好きな奴でも臍落して買ふ氣になる、信ぜられぬたのまれぬ根切小切をすると、祖師聖人が本帳を出して「佛願の生起本末を聞いて疑心あることなし淺間布機と直るなら本願は入らぬ、生れ付きの木地のなりで本願を信ずるのが邪見ではなね、親の心に叶ふとある本願の本帳に夜があけたら、いかな氣強い凡夫でも、そう云ふ御慈悲の親樣でござつたかと遠慮なくたのむ樣になる。

消息 尾張大根

愛知縣の或小學校教師が、一生徒に向ふて「當地で最も名高い農產物は何でありますかと云ふと「ハイ大根であります」と答へた、「その大根は何方で出來ますか」と云ふと、「ハイ隣りの八百屋で出來ます」と云ふたそうなる程隣りの八百屋に大根が山程積んであるから、小供の心では隣の八百屋で出來る樣に思ふたも無理はなね、されどその八百屋の店頭に大根をならべる迄の農家の骨折りと云ふことを忘れてはならぬ、淨土眞宗の店頭で惡人攝取の大根ばかりをながめて、佛願の生起本末を知らぬならば、丁度この一生徒と同じことぢや。

ショウクウ 性空 【人名】

播磨國書寫山圓教寺の開山なり、橘諸兄六世の裔、大中太夫善根の子、延喜十年を以て生る天慶八年比叡山に登りて剃髮授戒す、康安三年出て〻諸名山を巡り播磨書寫山に登り圓教寺を剏す、寛弘四年三月入寂壽九十八、

因緣 性空上人と松影の硯

性空上人は、もと時賴大納言の内に仕へ小太郎と云ふ草履取なりしが、其御家に「松影の硯」と云ふ重寶あり、それを君の御留守の間に拜見せうとて取り出して推し戴きましたが、誤りて取り落し打破りしを、十三歳になり玉ふ御公達が我が破りしと云ふて父に詫すべしとて、自ら罪を我身におい玉ひ、やがて父君かへり玉へば、御公達自ら誤りて破りしと詫び玉ふたら、父君は大に驚き卽座に公達を殺された、其時小太郎は過失は自分にあることゆへ、懺悔せうと思ふたれど、又思ふ

やう、殺されて益なし、寧ろ出家して公達の菩提を吊はんと薙髪せられたのが性空上人である。

ショウグワツ　正月　【行事】

宮中には四方拜の儀式あり、民間にも各其分に應じて年の始の祝意を表す、

歌　新見正路元旦の詠

新見伊賀守正路は、天保年中大御所の御側取次にて、謹愼敦厚を以て稱せられたる近世の名臣なり、或年元旦の詠に、

初春のかゝみの餅に向ふても
　濁らじと思ふ我が心かな

亦以てその修養に心がけの深きを察するに足れりと云ふべしである。

因緣　阿彌陀佛利益の事

無住禪師の砂石集に「阿彌陀佛利益の事」と題して曰く、鎌倉二町のつぼねとやらきこへし德人ありけり、ちかく使ふ女童しかるべき宿善やありけん、念佛を信じて人目には忍びつゝ靜かに數遍しけり、この主は嚴しくはしたなく物を忌みいはひ事けしからぬ程なり、正月一日にかようしけるが申しつけたる事にて心ならず南無阿彌陀佛と申しけるを、此主なゝめならず怒りはらだちて、忌々しく人の死しけるやうに今日しも念佛申すことかへす〳〵不思議なりとて、やがてとらへて錢を赤く燒きて片頰へあてゝけり、念佛ゆへには如何なる咎にもあたれと思ひて、それについても佛をぞ念じ奉りける思はず痛みなかりけり、さて主年始の勤めなどせんとて持佛堂に詣でゝ本尊の阿彌陀佛金色の立像を拜み奉れば、御ほうに錢の形くろくつきて見へけり、あやしくてよく〳〵見るに、かなやきにしつる錢の形、此女童のかほの程にあたりて見へけり、あさましなんど云ふはかりなくて女童を呼びて見るに聊かも疵なし、主大に驚き慙愧懺悔して師佛をよびて金箔をおさするに箔は幾重ともなくかさなれども疵はすべて隱れす、當時も彼の佛御座す、金やき佛と申しあひたり云云。

雜錄　正月元日

一生の計は幼年にあり
　幼年に與はされば年老ひて後空し
一月の計は朔日にあり
　朔日に爲さゝれば日過て後空し
一年の計は元日にあり
　元日に爲さゝれば月立て後空し
一日の計は鷄明にあり
　鷄明に爲さゝれば時過ぎて空し
一家の計は和順にあり
　和順に爲さゝれば不和となりて後空し
一日道を忘るれば一年の旅行におくれ
　一月業を怠れば、百年の身を失ふ
　いづれ恐るべきは今日只今
元日や大晦日のはじめかな
元日やうしろに近き大晦日
元日や人のしておくはかりこと
元日や又うか〳〵の初めなり

元日や先づ朝起を仕初めた

ジョウグワンボウ　乘願房【人名】

名は宗源、源空聖人の高弟なり、初め仁和寺にて眞言宗を修め後、源空聖人に謁して淨土教を受く、建長三年七月入寂壽八十四、

大緣　乘願坊と報謝の大行

法然聖人の御弟子に乘願坊と云ふ御弟子があつた、或時聖人に申上らるゝやうには、「御師匠樣には日に六萬邊の御念佛、私は年が若いで七萬邊位ひ稱へたらば宜敷ございますか」と、申さるゝと、聖人の御答に「乘願坊殿そりやたらぬ」「左樣なら八萬邊稱へたならよろしかろうか」と、申すと、「イヤ〳〵八萬邊位ではたらぬ」左樣なら死ぬ身になつて十萬邊稱へたらどうでござる」と申たれば、其時御開山「十萬邊位でなんで足りませう」と仰せらるゝと、乘願坊こらへ兼て「それでは善信御坊にはどれだけ御稱へなさるゝのでござる」と云ふと「乘願坊明に聞きなされ五劫永劫の御苦勞がこれだけと云ふ限りがあるので御座るか」、そこで乘願坊「五劫永劫の御苦勞や、兆載永劫の御恩德は野にも山にもおき處がない、船や車につめぬ御恩で御座りまする」、「それ程の御恩報謝の念佛に限りをつけらるゝは如何の譯、十萬邊でよかろうとゆるす其機がまだたらぬ、數のたらぬと申すのではない、聽聞がたらぬと申すのでござる「それでは善信御坊の御喜びは」「イヤ私はいつも懈怠不沙汰、日々何萬返と數を數へてはよう稱へて居ません、私の稱へごゝろは、かほどの御恩蒙る上からは、寢ても覺ても立ても居ても、處定めず數定めず稱ふるのでござると仰せられたで、「さてはそうでござるか、私の思ひぶりとは大違ひ、御師匠樣はどうであろう」と乘願坊は法然聖人の前に兩手をつき「恐れながら申上ます、彼方の毎日御稱へなさる六萬邊の念佛は、どうゆう御心で御稱へになりますか」と申上たれば、法然聖人一首の歌、

一念にまいる淨土と聞くからは
　うれしさのまゝ數を稱ふる

と御返答あらせられたとある。

ショウコウボウ　聖光坊【人名】

筑後國善導寺の開基なり、名は辨長、筑前遠賀郡香月の人、應保二年五月に生る、弱齡にして比叡山に上りて修學し、三十六歲の時源空聖人の門に入り專ら念佛を修す、曆仁元年閏二月入寂、壽七十七、

大緣　聖光坊と法然聖人

阿波介は法然聖人に隨ふて念佛しておりましたが或時聖光坊に對して仰せらるゝには「あの阿波介の申す念佛と源空の申す念佛と何れか勝れるや」と御聞なされた、鎭西上人も御心に辨へておらるれど、尙仰せを蒙りて了簡を定めようと思ひ、「いかでか等しく候べき」と答へられましたら、聖人由々敷御氣色にて、「日頃敎ふる淨土の法門を如何にきゝ玉ひけるぞ、あの阿波介も助け玉へ南無阿彌陀佛、法然も助け玉へ南無阿彌陀佛、さらに差別なし」と仰せられましたら、鎭西上人にも本より存ずる處なれども、往生の肝要、今更に新に仰せを受くる心地にて實に有難く覺えて感涙を催されたと云ふことである、彼の阿

波介は唯往生極樂の爲めに助け玉へと思ふて念佛すれば疑なく往生するぞと思ひ取つて申す外には更に別の仔細を知らざる愚者である、法然聖人は釋迦一代の御法をよく〳〵學びたまひ智慧第一と稱せられ玉ふ御大德である、智者も愚者も本願に托し往生を願ふときは南無阿彌陀佛より外はなゐのであります。

ショウジキ　正直【世語】

口に僞りを云はず、身に私を行はざるを云ふ、俗諺に曰く「正直の頭に神宿る」、

談義　正直の光り

元文四年のことでありましたが、京都のある商人が二人で、東京へ商用ありて東海道を旅行いたしましたが、阿部川を渡りて暫く行きますと、一人が懷中なる金をおとしましたそこでおどろいて二人とも立ち歸りて河原を彼方此方とかけまわりてさがしましたが、その間に一人のいと若き男が走り來りて云ふには、「貴殿は若し何か物を落し給ふたか、紙入なれば、我等ひろひたれば、主を求めて返し贈らむとて急ぎて、今此處へ參りましたゆへ差上ます」と云たら、おとし主大ひによろこびて受取直に御禮を云て、いくらかを包みて與へようとしたら、いやとよ、私は川向ふのものなるが、先刻この川岸にて之を拾まして主を知れませんゆへ、天より與へられたものと思ふて、急ぎて家にかへり、父上に其由を話しましたら、父は大に怒り、いづこより盗み來れるかとて、打擲せられんとせし故、事のよしを委しく語りましたれば、假令主はしれずとて、人の落したるには、ちがひなし、その人をたづねて返さむとは思はずして、持ち歸り來れること即ち盗賊なりとて追ひ出し給ふ故、いそひで主を尋ねに出でましたら、幸にもこゝにて返し得たれば親にも申し分立つこと、これに過ぎたる喜はなしとて、二人をもてなしました。二人は感心してその男とうちつれて、父の家を訪ふて、事のよしを述べ禮をせんとて、金子を少々贈らんとせしに、容易にうけがはねば、せむ方なくあつく禮を述べて別れたりと、阿部川の村人これを奉行所へ告げたるに、松浦公其親子のものゝ正直なるに感して褒美をたまひ、其事ついに將軍家の御耳に入りことの外賞せられたとある、正直の光りとはこれらのことを指して云ふのであろう。

談義　銀行の事務員

ニューヨーク某銀行頭取は、或日曜日にその事務員某に向ふて臨時の仕事を命じたるに某は日曜に務めに就くは自分の主義に反すと答へた、頭取は免職するぞと云ふておびやかしたれど、某は、主義は免職よりも重しと云ふて主張したので、行がゝり上やむなく免職した、其後、頭取の友人が銀行を創立するので、正直なる金錢出納係の周旋をたのみますと、頭取は先きに解雇せし某事務員を推擧して云ふやう、某は正直に於ては天地と共にする程のものなりと語りたので、知人も大に喜び、某も頭取の恩に感泣したとある。

談義　天は正直の人を殺さず

東京府下源助町に松本長七と呼べる車夫あり、天性正直にして苟めにも人を欺き僞りたることなし、故を以て人の信用極めて厚く花客も隨て多し、正直長七の名は、車夫社會に鳴れり、嘗て人の爲めに使して、途中に百五拾圓の大金を遺失す、長七家に歸り獨り以爲らく、吾れ貧にして賤しき業をなせば、彼金を遺失せりといふも人必ず信せざるべし、妻子を後に殘すは憫然なれども、死して潔白を示すより外に策あらずと、乃ち用に托して妻子を外にやり、一通の遺書を認めて帶を梁に吊し、悄然として死に就かんとしけるに、忽ち烈しく戸を叩くものあり、長七合點行かざれども、戸を開きて之を迎ふれば、一人の男流るゝ汗を拭ひ敢へず、忙はしく言ひけるは、余は木挽町に住する車夫橋本勘平なり、今夜客を載せて歸る途中、何やらん足に觸るゝ者あり、取りて之を視しに金嚢ゆへ、中を改むれば百五拾圓の大金なり、落せし者は何者にや、定めて落膽せしならんと思ひ、提燈の光りにて尙ほ能く〳〵視れば、松本長七とあり、されば正直長七の落せしものか、一刻も早く之を返し遣りて安心させんと、斯くは深夜に來れるなり、いざ改めて受取るべしと言ひて彼金嚢を差出せしに、長七は夢かとばかりに打驚き、涙を流して厚く禮を述べ、且ついふやう、實は今日使先にて此金を遺失せし故、死して其罪を謝せんと決心し、見らるゝ如く縊死の準備をなしたる所なり、貴公の恩誼は死すとも決して忘れず、是は聊か謝禮の寸志なりとて、金拾五圓を差出せば、勘平は手にも取らず、固く辭しく曰く、己に百五拾圓を惜まざりしに、何とて拾五圓を頂戴すべき、足下の落せしものを足下に返すは當然なり、若其拾五圓を取るときは、廉潔勘平の名折なり、唯足下の一命を救ひしは、此上もなき喜びなりと、後をも見ずして立去れりといふ

談叢　拾金と警察署

或處に正直者があつた、途中で十五圓の金を拾ふて早速警察へ届けて出た、君子は遺たるを拾はずの古語を其まゝ實現したのであるところが落し主が非常に强慾な奴で、もし拾ひ主があらはれたら一割位は謝禮にやらねばならぬから……と云ふので、五圓を增して「二十圓落しました」と云ふやうなことを申立てた、而して其言ひぐさが憎ひ、「私の貳拾圓落したに相違ありません、それに拾五圓しか拾はないと云ふのは、定めて拾ふた男は五圓だけ盗んでおいて、拾五圓を届出たのであろう」と云ふやうな毒舌を弄した、するとこの狂言を看破した警官の裁判がおもしろい、「貴樣貳拾圓落したに相違ないか」「ハイ貳拾圓落したに相違ございませぬ」又拾ひ主に向つて「貴樣拾五圓拾ふたに違ひなひか」「ハイ拾五圓拾ふたに違ひありません」「フムすりやこの拾五圓の金は其方が落したのではない、苟くも拾ひましたと自分から届けて出るやうな正直ものに、五圓だけ隱くすと云ふやうな不正なことのあろう道理はないで、後日貳拾圓

拾ふたと云ふものが出來たら呼び出す程に……」と云はれて、強慾な落し主は一厘も金は手に入らず、正直な拾ひ主は滿一年の後、落し主がしれないと云ふので、拾五圓丸もらいをせられたとある。

譬喩 水晶と食鹽

天然の事は何一つとして正直でないものはない、昔から遂に日が西から出た事もなければ、水が底い處から高い處へ逆に流れた事もない、もつと細い事で云へば、水晶は何處で見ても必ず六角な形を持てをる、食鹽はいかほど微細に碎いても、粒々皆眞四角で、決して外の形になるといふ事はない、この通り天然の凡ての物は正直にちやんと、各自の分を持つて居るに、人間ばかりが不正直なことや道ならぬ事をしては天地萬物に對してすまぬではないか、耻かしいではないか。

俚諺 陰陽師身の上しらず

如何に占者でも其身の善惡がしられるものではない、辻町の占者は太抵道樂者の仕事、奸智者の渡世である、何程、占者でも博奕うつたり大酒飲んだりしたら其身が危い、たとひ占はせずとも、

心こまかに、小間物賣れば
佐渡の金山うちにある

正直律儀に職業をすれば、神佛は自ら守りたまふものである。

ショウシユジヤウ 諸有衆生 【術語】

和讀の左訓によれば、二義あり一に諸有とはあらゆると讀みて因願の十方衆生と同じく廣く凡聖善惡の人を指す、二に諸有とは二十五有界の衆生を指す、

譬喩 御用金と御救ひ米

軍事公債とか恤兵金とか云ふ樣な御用金を仰せつけられる時には、財產の有無を調べねばならぬ、又飢謹とか水難とかの場合に、家並一軒につき白米五升づゝ御救米を下さる時は、財產や人品の吟味はいらぬ、諸佛の本願は御用金の如く、善根功德の廻向を以て成佛得脫を願ふときには、惡人凡夫の貧乏人は仕方がなゐ、智者聖人の歷々ちやなければにや如說に修行することはならぬ、彌陀の本願は御救米の如く、他力廻向の下されものゆへ善惡の機をゑらぶには及ばぬ、十方衆生と呼び擧げて、菩薩でも聲聞でも緣覺でも天でも人でも阿修羅でも三惡道の罪人までも、あまさずもらさず助けずば我も正覺とらぬぞよと御誓あらせらるゝ、さて又願成就の文に、六道の迷ひの衆生ばかりを目ざして、諸有衆生と仰せらるゝは、役場から今日中に御救米を渡すゆへ、貰ひに出よと御觸かありても、其時刻になりながら、貰ひに出るものがなゐと、村中で貧乏人ばかりへわざと使をたてさせられて早ふ貰ひに出よと御催促がある、御觸れの時は村中一同、御催促のあるは貧乏人ばかり、これ何故なら、村中一同へ下されても、御救米の御目當は、米の貯へのある富者ぢやなゐ今食ふことのならぬ貧窮者が御目當ゆへぢや今御十八願の御觸れには、十方衆生と呼びかけ玉ひ、機に御ゑらびはなけれども、他力廻向の御救米の一番がけの正所被は、たつた今にも火の坑さいて落込むより外に仕方のなゐ

惡人ひとりが正客ゆへ、諸有衆生と仰せられたのぢやぞや、それでもまだわれ〳〵が自力の執情にほだされて、むづと頂きかねるゆへ祖師聖人や善知識と御相をはかへさせられ火宅の娑婆へ御出世は、たゞ今日の我々へ六字名號の御救ひ米が與へてやりたいばがりぢや程に、どふぢや南無阿彌陀佛が頂かれたか食べる資糧があるのなら貰ひに出ぬも最もぢやが、今食ふものゝない身分で、やらふ〳〵の米をもらはず、飢へて死んでは殘念ぢや、こんな阿房なことはなゐ、やらふの聲が先手ぢやゆへ、遠慮はいらぬ頂くばかり、各々方や我々も、助かる因があるのなら、他力の御廻向をいたゞかず、自力で氣張るも最もぢやが、助かる縁は盡き果て、十方三世の諸佛にきらはれ、泣より外になゐ身分、足の下には炎をふまへ、鬼の捕手は前に立ち、今火の車に乘り出すやつへ、六字の寶やろふとて、今この御座の御化導ぢやが、こゝで木願信じかね、もとの地獄へかへらふなら、こんな殘念なことはなゐ、いよ〳〵後生が大事なら、このまゝすぐに頂くばかりぢや。

譬喩 拾圓入りの手紙

東京から金拾圓入れた手紙が來たが、婆が手に持つて居れど、上の名前が讀めぬに付て村長とか教員とかに讀んで貰ふたれば、此金入の手紙は婆樣そなたが息子が東京へ行ゐて奉公して其給金を貯めて其方の所へおくした此手紙ぢやと、上の名當を讀んでもろうたれば、狀の封を切りて拾圓の金は婆がものになりた、讀んだ村長のものには一厘もならぬ、婆のものになりたは、狀の名前が婆ゆへぢや極樂淨土から聞其名號の六字の手紙、信心歡喜の拾圓の金が封じ込んであれど、誰の處へ來たやら知れぬについて、釋迦如來と云ふ村長に讀んでもろうたら、六字の狀の名當は、諸有衆生の惡人女人ぢやと知らして下されたから、六字の手紙の封を切りて、信心歡喜の拾圓の金が我がものになりた、故に蓮如上人は「信心歡喜と云ふは信心定りぬれば淨土の往生は疑ひなく思ふて喜ぶこゝろなり」と仰せられてある。

因緣 總案内と別案内

或處に三十あまりの女同行がありて、若年より後生の大事と云ふ事に心がかゝり、始終御法座へは出ながら、どうしてもこの一念歸命の信心と云ふことが會得が出來ない、手次の住職は大に之を苦にして、緣に觸れ事に寄せて導いて居られたが、

聞く時はげに最もと思へども
其場を去ればあとかたもなし

の風情で、いつも一向要領を得なかつた、或時其住職が二三里ある處へ布教に行かうと思ひ最寄の停車場へ行かるゝと、偶然例の女同行と出遇ふたので、「何地へ行くのであるか」と聞くと、其同行の答ふるやう、「今日は實家へまいります、今日は亡き父上の七年の法事が勤まりまするので、必ず參詣するやうにと別案内を受けましたゆへ、それで思ひ立つて出て來ました」と云ふた、住職は「別案内を

もろうて親の家へ行きなさるとは實に御羨いです、拙僧の如き父もなく母もなきものは生涯にその樣な樂みは御座りませぬが、實に貴方は幸福な御身の上ですナー、時に其別案内はどうして御もらいでしたか希くば此處へ一つ出して御見せを願いたいです」と云ふと、婦人は怪訝顔して申されまするに「御茶の子にもらつた餅とか御土産の瓦煎餅なら、ハイこれで御座ると出して見せることを出來ますが、私の申しまする別案内とは所謂口頭で、御案内を受けたことですから、此處へ取り出して御見せ申す事は出來ませぬ」と云ふた、「それでも貴方は別案内をもろうた〳〵と云はるゝのですから其もらはれた有樣をどーか詳細に聞かせてもらいたい」と、追求すると其同行の答に「されは其模樣を申しませう、四五日前に實家の母がわざ〳〵私の宅へ來られまして、何日には父上の七年の法事を勤めまするから、皆樣御同道で御參詣下されと、私の舅姑や所天へも法事の案内を致し、それから妾を陰へ招いて申しまするには、今度はお父さんの七年の法事ぢやで是非御前はまいりて呉れよ十三年の法事には、どちらが欠けるやらも知れぬから、まづ〳〵この七年が法事のつとめおさめと思ふておるから、必ず來てくれよと、それは〳〵念の入りた別案内を母の口から聲でもらいました、これより外に別案内と云ふものはありませぬ」と云ふた、住職は尙一歩を進めて、「貴方は其母親から聲でもろうた別案内はどう受けられましたか」

と尋ると「ハイ親なればこそ遠方から態々案内に來て下されて御親切に言ふて下さることのうれしや、キットまいらせてもらいますと御うけをさせて頂きました」と云はれた、「それは口で御うけになりましたか、心で御うけになりましたか、すがたで御うけになりましたか」と尋ねると「イヱ〳〵口もすがたも心もござりませぬ、娘必ずまいりて來てくれの別案内がきこゑるなり、ヤレうれしやまいらせて頂きますと心一ぱいにうれしさがみち〳〵て下され、そのうれしさのまゝ、口やすがたにあらはれて、頭をさげて、ハイ〳〵まいらせて頂きますと、口へも出る樣になりました、この御案内をうけてから今日まで、思ひ出しては樂み、指おりかぞへてまつておりましたが、今日はいよ〳〵其日となりましたので、早朝からこしらへて漸く只今出てまいりました」と云ふた、住職はこの一場の會話を材料として、第十八願では十方衆生の總案内、或就文では諸有衆生の別案内と云ふことから、說き初めて本願招喚の勅命の耳から心へ聞へたなりが親樣なればこそかゝる機までも御助け候へと御請をさせてもらいすがたに出ては禮拜恭敬、聲にあらはれては報謝の大行となるまでをくれ〳〵申示されたら、今の女同行も非常に喜んで、一念歸命の信心と云ふことに漸く合點をせられたと云ふ話がある。

ショウジョウゴヰン 證誠護念 【術語】

諸佛が誠實の言を以て證據に立ち、惡魔等の障りを防

ぎたまふを云ふ、

譬喩 重病人と醫者

こゝに重病人がありて、此病人は私がキット請合つて全快させますと、醫師が請合はするが晝夜不斷病人の側につききつて守りてはおられぬから、病人に變でもあれば不安心である、これは請合へども護られぬと云ふの例話です、又此病人はとても私の力には及びませぬ、誰ぞ外の醫師にみせなされと云ふ時、家族も病人もとも〴〵に、イヤ〳〵御前樣の御手を離れては、外に賴もうと云ふ御醫者もなゐことゆへ、命の事は力に及びませぬ、それは據なひが、日頃の好みに死ぬ迄の處を見屆けて下され、必ず病人の側を離れて下さるなとたのまるゝゆへ、據なく晝夜側離れずに護りておれども、まもるばかりで命は受合はれぬ、これは護りてはおるが請合はれぬと云ふの例話である、今專修念佛の行者は、往生は請合ふが護りてやらぬとものたまはずまもることはまもれど往生を請合ふことはならぬとも仰せられぬ、證誠とは受合ふて下さること、護念とはまもりて下さること、これを御和讃に、十方恒沙の諸佛は極難信ののりをとき五濁惡世のためにとて證誠護念せしめたり」と仰せられてある。

ショウシン 證眞 【人名】

隆惠永辨の二師に從ひ、惠心煙那法流の源底を窺くす寶處院に入りて世を離れ、戶を閉ぢ、大藏經を閲覽すること十六遍、獨り著述を事とし私記三十卷をあらはす其他著書多し、寂年及び諡缺く、

談叢 證眞の學道

比叡山の寶池坊證眞と云ふのは壽永の頃、の人で平家の武士であつたが、一度發心して出家の身となりしより、一意專念に學道に怠りなく、俗塵の吹かぬ比叡の山奥に靜かに經を讀んで源平の大亂を知らず、後、人の訪はるゝに遇ふて、初めてこれを知つたと云ふことである。

因に記す、編者嘗て小栗栖香頂師より賜はりたる卷幅あり、この證眞を詠じたる五絶を記さる、左に抄錄せん、

源旗白如レ雲　平幟紅ナリニ於電ヨリモ
樹腹老僧居ル　不レ知隣ニ有ルヲ戰

ショウシンゲ 正信偈 【書名】

親鸞聖人の遠遊數行信證文類の中行卷の終りにあり、

因緣 行平中納言と松風村雨

昔、行平中納言、勅勘を蒙り、須磨の浦へ流されたまひ、侘しき配所の御住居、心なき浦人も行平卿の御心根を思ひやり御痛はしく思ひ種々に心を添へる中にも、松風村雨と云ふ二人の海士は、中納言の情を受け御傍につかはれ、心を盡して勤めて居たが、三年振りに、御上より勅免を蒙り都へ歸れとの御沙汰を聞いて二人の女中はいとゝ名殘を惜み、「雲井の君に情を受け枕ならべた身の果報、申上るも恐れあれど御前が都へ歸らせ玉へば我等二人も御供がしたふ御座ります」と、右と左に取りすがりなげけば、行平卿も涙を流し、「其志はかたじけなゐ　しかし流人となりしこの行平、此度御赦免になりたとて、女を連れて都へかへりては、實に朝廷への聞へも

恐れあれば、時節を待つて呼びよせん、又逢ふまでのかたみに」とて烏帽子狩衣を二人の女中に下されたれば、涙ながらに押し載き、行平卿の御歸りなされた後でも、戀しさ勝る其時は御形見の烏帽子狩衣取り出し、やるせなき心を慰めて居た、其後間もなく行平卿は御隱れなされた、それを聞たる二人の女中、歎きの淵に身を沈め、特に松風は夜となく晝となく、御形見を取り出しては泣き、眺めては泣き、

形見こそ今はあだなれこれなくば
忘るゝこともありなんものを

と、一首の歌を詠んで泣き明し泣き暮したとある、成程行平卿の烏帽子狩衣でも、緣のなるものが見ては難有も悲しくもなる、古着屋の店を見るも同樣なれど、情を受けし村雨や契りをこめし松風が見れば、行平卿の御實意が胸にこたへて、見る度び毎に涙が溢るゝのぢや、今正信偈御和讃は、己が使ひに己が來にけりの御開山樣が、末世の各々へ筆を盡し心をこめての御形見ぢやぞや、

形見こそ今はうれしやこれなくば
淨土まいりは出來まじものを

ショウシンボウ 性信房【人名】

東京淺草報恩寺の開基なり、俗姓は大中臣、名は興四郎、出家して親鸞聖人の弟子となる、建治元年七月下總に寂す、壽八十九、

因緣 性信房と飯沼天神

親鸞聖人の上足の弟子たる性信坊は、飯沼の報恩寺を創立して、聖人一流の御勸化の趣きをひろめられたが、門前市を爲すと云ふ程の御繁昌となりた、貞永元年正月七日、衣冠正しき老翁、フト飯沼報恩寺へまいられ、御教化を聽聞して後に殘り、性信坊に對面して申さるゝ樣、今日は難有き御法をきかせて頂き此上もなき仕合せに存じます、今後は貴方を御師匠と崇めますから、私を弟子の一分に御加へ下さるべしと云ひ終りて書き消す如く消る失せ玉ふた、時に飯沼天神社の傍に御手洗池と云ふがある、その池の畔に大きな杉の樹がある、其木の下に衣冠正しき老翁來りて、毎朝性信坊の在所に向ふて叮嚀に禮拜して立ち歸らる、神職の人々はさても不思議なる老翁であると、その老翁の後を追ふて行いてみたら本社の神殿に入り玉ふたとみるて消失せ玉ふた、さてこそあの老翁こそ當社の天神にてましゝたかと、大に感服致したとある、又、御手洗池の鯉を献上せよとの神勅にまかせ、正月元日に二尾引あげて献上せられたが、性信坊はこれひとへに垂迹利物の御方便なりと謹んで領承致され、その返禮として御鏡餅を二重、天神社へおくられた、其後飯沼の報恩寺は武藏國江戸、今の東京淺草へ移されたが、二尾の鯉は相變らず報恩寺へ送り來りて、性信上人の木像の前に御供へに相成り、正月二十八日の御齊に、その鯉を料理して、參詣の諸人に配分するの例となりておるので、七百年後の今日まで、其儀式の傳はりておることは皆人の知る所である。

因緣 性信坊と親鸞聖人

親鸞聖人御往生の前日、即ち弘長二歳十一

月二十七日に性信坊は關東より聖人の御病氣見舞に上られたのである、所が御一門の方々を初め御弟子衆や歸依の道俗、御庵室に集りておられたから、性信坊は非常に驚き、草鞋の紐もとかぬ先きに、委細の御病況を尋ねられたら、まだ御存命とのこと、やれ〳〵嬉しや間に合ふたかと、急ぎ草鞋を脱ぎすて、足を洗ふや否、御居間へゆき、兩手をついて「關東の性信でござります、只今御見舞に出ました」と申上られたら、聖人は兩眼を開かせられ「性信かようこそ來てくれた、關東の同行は大切に法義相續をしておるかやと御尋ねなされて下された、性信坊はおそれ入り、御法義繁昌の狀況をくわしく申上げましたら、聖人は御病氣の中からニッこり笑みを含ませ玉ひ、「それで安心したぞよ、其方をなつかしく思ふたも、關東の法義の樣子が聞きたひばかり、左すればモハや用事はすんだ、氣の毒なから直樣ひき返して關東へ歸りてくれよ」との仰せに、性信は打ち驚き「御師匠樣それは胴慾でござります、私は御存生の御顏を拜ませてもらい、尚御臨終の今端まで御介抱を申し上げ、末期の水も汲ませて頂きたい所存で夜を日について遠路をはる〳〵上りましたが然るにこのまゝ直に關東へ立ち歸れとは、それでは名殘り惜うございます、せめて一兩日なりと御側に居て御介抱をさせて下さりませと、言葉を盡して願はれたれど、中々御聞届け下さらぬ、「これ〳〵性信よ、其方の云ふことは最もなれど、おれが病氣の介抱よりも、

まだ急ぐのは惡人女人の胸の病氣の介抱ぢやが、先年其方にあづけた關東の同行に、一時も早く引かへし、法の藥を與ゑてくれよ、おれが臨終のたのみぢやほどに」と、重き病の其中から繰り返し〳〵仰せられた、性信坊は身を切り割くほどにつらけれど、是非に及ばず畏りましたと御請をせられたら、聖人直に御筆をとらせられ、

愚禿、年つもりて病に犯され、只今淨土に往生す、極樂の蓮臺にて一味の衆中を相待ち候、あなかしこ〳〵、

弘長二年十一月二十七日　愚禿　親鸞

關東の同行へ

と一通の御消息を認めたまひ、これが臨終の紀念なりと御渡しなされた、性信坊は聖人の御新切を今更の如く深く感じ、そのまゝ御暇乞の御挨拶をなされ、涙の袖を絞り御別れなされたとある、御臨終の今端にも、關東の法義は如何であるか、はやく立歸りて煩惱の病氣を介抱してくれよとは、何たる御慈悲の親樣でありませうか。

ジョウセツ　誠拙　【人名】

鎌倉圓覺寺の禪僧にして、詩頗る深く近世の大德なり、

談話　誠拙和尚の祈禱

誠拙和尚が鎌倉圓覺寺に在住の時、其信者なる深川木場の白木屋の一人娘が大病であると云ふので、醫療投藥、いろ〳〵手に手を盡したが癒らない、醫者も匙を投げ、今に息を引取るを待つばかりと云ふ始末、この上は神

佛の加被力を受くるの外なし、就ては平生信仰する誠拙和尚を勸請して祈禱を請ふと云ふので飛脚を立てゝ迎へた、すると誠拙和尚はそれは氣の毒ぢやと云ふので駕に乘つて來られた、時に主人は泣く〳〵、娘の病氣の始末をのべ、是非御僧の力にて御祈禱を願ひたいとの賴みに、和尚の曰く、よし〳〵賴みに任せて祈禱もしやうが、御布施を少々多分に頂きたい、それも後金でなく前金に願ひたいとの注文ゆへ、主人も娘の病氣が全快するとあれば、財産の半分は差上てもよいとのこと、和尚の曰く、然らば金百兩に米百俵を願いたいと、主人これは聊か多過ぎるとは思へども娘の命にはかへられざれば、承諾し、早速人夫をして鎌倉へ輸送した、而して和尚はおちつき拂ふて佛間に入り、心經一卷を讀み終つて娘の枕元にゆき、娘に宣言して曰く「御身もこの大家に生れて別に榮耀榮華もせずに死ぬとは氣の毒ぢや、併し人間と生れては一度は死なねばならぬ、此定命と云ふのは、神でも佛でも動かすことは出來ぬわい、御身も此場に臨んで誰を恨むにも及ばぬ、併し御身もよいことをした、それは御父さんが御身の御經料として米百俵に金百兩の御布施をくれたが、あの御布施は何もこの老僧が贅澤をするのではない、拙僧の禪堂には何百人と云ふ參禪の坊主が居る、あの米と金は彼等を養ふ料にするのぢや、あの中には一人や二人は佛になりそうなものもあるらしい、ア、御身も此死に際はに未來の佛を養ふ善根功德を積んだのぢや、世の中にこれ程よい行はない、安心して死ね〳〵」と云ふて病室を出で、鳴呼愚僧はこれから增上寺へ遊びに行くのぢやと暇を告げられた。

あとで主人は「何か有難い御祈禱があるかと思ひの外、箇樣の始末なれば、非常な立腹死ね〳〵とは何のことだと、糞坊主呼びをしたとのことである、而して今にも息を引き取らんとする程の娘も、和尚の「生の喜ぶべきなく、死の恐るべきなく、定命の動かすべからざると云ふ垂誡をきゝ、頓と安心したものと見へて、病氣もすつかり全快したとあるそれより白木屋の主人もます〳〵和尚の高德に感じ入り、一層信仰の念慮を高められたそうです、これ所謂、死中に活を說き活中に死を談すると云ふものであろう。

談叢 誠拙大尚と不昧侯

誠拙和尚は雲州松江の城主不昧侯の歸依をうけて居られた、或時、京都の相國寺へ行かうとて箱根の山にかゝらるゝと、頃は冬の半ばにて山中一面の雪で寒さが甚しいものですから、和尚も乘物の中に小さくなつて關所近くへ來ると、向ふから下たに〳〵と警蹕の聲をかけながら行列をそろへて來る大名がある、「何藩ぢや」と問ふと「松江の城主ぢや」と云ふので、「それは久し振りぢや、よい所で逢ふた」と乘物を止めて待つておると、不味侯も和尚と聞いて乘物を止めて一別以來の挨拶をせられた、すると和尚が「老僧も若い時分にや此山を素足で越したこともあつたが

年が寄るとしかたがなくなつて寒くて凍へるやうぢや」と云はれると、不昧侯「老師はこのやうなものを持つて御座らぬか」と銀の手爐を見せられた、和尚これを受取つて、「なる程これは調法なものでござる、暫時借用いたす」とて手を煖めて居られたが、やがて「よし〳〵乗物をやれ」と、そのまゝ手爐を横領して西に向ふて下られた、不昧侯も仕方がないから懐手して東に向はれたとある、これは只和尚の悪戯と見てはならぬ、武士たるものは如何に大名でも、一朝事あつた時には千軍萬馬の中を往來せねばならぬ、そうゆう身を持ちながら乗物の中でぬく〳〵と手爐を擁して居るやうではならぬと云ふ和尚の警訓である。

ショウゾウマツ　正像末【術語】

正法とは如説に修行して證果を得る者のある時を云ひ像法とは正法に似て修行する者あれども證果を得るものなし、末法とは釋迦の遺法は衰へて、あれども無きが如き時節を云ふ、

壁吟 藤の花

藤の花と云ふものは一莖の内にても、本の方は色鮮かに快く開き、中程は開くことは開けど花の咲き心も形も本ほどになし、さて末はこと〴〵く蕾にて開かずして遂に散る、然るにこの藤の花を末までもこゝろよく開かせんと思ふ時は、去年十月の中頃に、酒の糟を其根に埋めて置くがよい、さすれば今年の花は極めてこゝろよく開く、これは植木屋の傳授である、今も其如く、正法の間は證りの花も快く開けども、ハヤ像法の中頃に及んで

は、餘程證果の花もおとろへ、末法のすへに至りては、證りを開くべき佛性の種はあれども、未有一人得者とて蕾ながらに一生を暮らし、ついに開き得ずして命終ることとなり、然るを彌陀如來の御方便を以て、過去因位の冬の頃より、入一切衆生心想中と、大悲の酒の糟を我等衆生の根性へ埋み入れて置かせられたゆへ、今と云ふ今、宿善の春の時、正法像法の智人にかわらず、十人は十人百人は百人快く報土得生の花を開くのである。

壁吟 蔓物と秋風

瓜などの蔓ものを植へおくに、夏の間は蔓もはびこり葉もしげり花も咲き瓜もなれどもモウ秋に入りて涼風がたてば、葉もあり花も吹き瓜もなれども、其瓜がなつたなりで成長せず、程なふ蔓も枯れて仕舞ふごとく、正法五百年の夏の間は教行證の三つともにうち揃ふて佛法盛に御繁昌なれども、モウ像法の秋にうつれは教行の蔓花はあれども肝心の證を開き得ることが叶はぬ。

像法のときの智人も　自力の諸教をさしたきて

時機相應の法なれば　念佛門にそ入りたまふ

天親曇鸞は像法の世に御出世なれども、所詮自力の證りはかなはぬぞと思ひすてさせられて、皆他力易行の道に入り玉ひた、御學德と云ひ時節と云ひ、上代上智の御歴々なれども、自力を見限りて他力に趣かせらるゝからは、今日在座の我々は、いらぬ自力のはからひすてゝ、他力本願の御慈悲にすがらねばなりませぬ。

ショウヂヨウジユ 正定聚 【術語】

御草本の左訓に「まさしくさだまるともがら」とありて正しく佛になるべき身と定まる位を云ふ、

辞言喻 定宿

旅行をする時に、一人旅をして定宿のなきものは朝から晩までとまりを案じる、一人旅で宿屋ではいやがる、晩にはよい宿にとめてくれればよいがと、定宿のなきものは、朝から晩の泊りを案じる、又定宿のあるものは一人旅であろうが、日は暮れようが案じ氣はなし、何時でも定宿へゆけば馳走してとめてくれるゆへ、心丈夫に思ふ、今阿彌陀如來をたのむも其如く、極樂淨土のやどり處があるまいなら、今にも命終れば、未來は地獄へ行くやら畜生道へ趣くやら、末年のゆくさきは知れぬ、年はよる死場は近ふなる、未來はどこへ行くやらと心がゝりのものぢやのに、難有は彌陀をたのんだ仕合には、

極樂は日々に近くぞなりにけり

あはれうれしき老の暮かな

娑婆執着の凡夫なれば、格別に死にたいと、死ぬるを急ぐ思ひはなけれども、娑婆執着の間にも、未來の行く先きに案じげのなる思ひになり、心丈夫によろこび〳〵日を暮すのが信心決定の相たである。

辞言喻 堂班

位と云ふはすわり處の定まること、上へも上れず下へもさがれぬのが位ぢや、僧侶ならば餘間の位、内陣の位、院家の位などと分れる、院家の位なれば助音別助音の席へも上れず、餘間内陣の位へも下られぬのが位と云ふものでは、すわり場のきまりて居ること、即得往生と云ふは未來魂のすわり場は、極樂淨土の蓮華の上と、きまりの付たが即得往生の位田舍に居る時は餘間も内陣も院家もわからねど、御本山へ出仕をすれば、すわり處がきまりてあるが位、娑婆逗留の間は信得たものも得ぬものも分らねど、信決得の身の上は、死なぬ先きから魂の行き場は極樂淨土の蓮華の上と、きまりの付くが即得往生の御利益である。

辞言喻 茶の湯の茶碗

茶の湯の茶碗は素人が見ると穢いもの麁末なものてはあれど、それを桐の箱に入れ錦の袋に入れて大切にしておるは、製造人が立派で、しかも品物が見事に出來ておるからである、今本願を信じたものを凡夫の素人目でみると一向に心の轉じかはりた處は見へども、光明の箱に入れ攝取の錦の袋に包んであるゆへに、正定聚の寶物ぢやと賞せらるゝ、

決緣 義常法師と宗本禪師

高僧傳の中に斯う云ふ話がある、唐の義常法師と云ふが夢の中に彌陀の淨土を拜まれたが、菩薩聖衆が百寶の蓮臺に乘じて樂んで御座る、其中に一つ空位の蓮華がありて、其傍に宗本禪師の蓮臺なりと云ふ札がたつて居る義常法師の思はるゝ樣、宗本禪師はおれの學問友達であるが、それにハヤ御淨土に蓮臺が出來て居る、アヽ羨ましいことであると思ふなり、忽ち夢がさめた、それより義常法師は

宗本禪師の處へゆきて申さるゝには。貴公と我とは以前の學問友達であるが、現今は如何なる法を信仰して御座るかと御尋ねなされたら、宗本禪師の答ふるやう、私は昔は自力の行を勤めて居たれども、時は末代なり機は下根なり、とても自力修行を致して居らは、轉迷開悟の目的を達することは出來ませぬゆへ、今は時機相應の要法たる彌陀の本願を信じて居りますと申された。そこで義常法師も、左樣なれば私も其彌陀の本願が信じ度う御座るから、コドーカ御すそわけ下りませと願はるゝなり、宗本禪師は日頃信じて居らるゝ彌陀の本願を說かせられた、それを聞くなり、義常法師は自力の珠數を切りて彌陀の本願を信じ共に西方往生を御願ひなされたとある、參らぬ先から淨土の蓮臺に札のつくが正定聚の分人となりたる身の幸ひであります。

ジョウド 淨土 【衞記】 所期に約すると所宗に約するとの二義あり、所期に約せば西方彌陀の淨土を指す、所宗に約せば他土得證の法門を指す、

歌 うれしきは花に風なき吉野山
月は曇らぬ更科の里

吉野の花はうるはしけれども嵐に散らさるゝの難あり、更科の里はあざやかなれども、村雲のかゝる心つかひありて、とにもかくにも娑婆の事は何につけても善き事あれば惡しき事が出來て心のやすまる事はなき所である「歡樂きはまりて哀情多し」で、嵐に花の散らさるゝ如く、年少き人も壯健なる人も皆無常の風にさそはれゆくのである、村雲の月に

かゝる如く、窈窕たる美人も老と云ふ雲かゝりて姿形次第に見にくゝなる、喜びあれば悲しみあり、始めの樂が後の苦とかはりて萬づに心を痛むるは、この娑婆の習ひでありまず、然るに西方彌陀の淨土は、永離身心惱と云ふて、心を痛め身を苦しむることのなき樣に成就したまふ淨土ゆへ、花に風なく月に雲なき如くに、永き世、老ひず死せず苦もなく悲しみもなく大樂を與へたまふのであるからそれを慈鎭和尙の詠ぜられたのが上の三十一文字である、かく聞いてみれば「たゝ急ぎても生れたきは極樂淨土、願ふても願ひ得んものは無漏の佛體」であります。

歌 君まさで煙たへにし鹽釜の
浦さびしくも見へわたるかな

昔嵯峨天皇の王子融大臣、河原院と云ふに下屋敷をかまへ、種々の景色を設けて慰みたまふ中にも、熊野の浦より鹽をはこばせ、千賀の鹽釜をうつして興せられけることもありしに、無常の風は貴賤をゑらばず、人命限りあつて、娑婆の習ひに隨ひたまへば、年月星霜を經て後はみな昔物語となる、してみると金銀珠玉をちりばめて、立てならべたる宮殿樓閣も、一旦主がなくなれば、跡は狐狸のすみ家とかはる、たのみ少いは娑婆のありさまである、然るに淨土は無爲涅槃の境界なれば、宮殿樓閣は建立常然無衰無變、ながき世かわらぬ樂みは唯極樂の果報に極まる。

譬喩 將棊の駒
將棊の駒にでも王は一人、其王を守護する

臣下には高位高官の飛車もあり角もあり、金銀の富豪もあり、人の頭を飛び越す桂馬もあり、一本鎗の香車もあり、其日暮しの歩もある、これ皆過去の因縁であるとあきらめねばならぬ、王は自在の義でどこへでも行かるれど、餘の駒は不自在にして就中　歩と云ふ駒は淺間しや、一目づゝしか歩むことはかなはぬ、二つ飛べはしからるゝ、されど不自由きはまる歩でも、今に向ふの地面へ這入つたなら、成りて金の資格が出來る、成り込むとは成佛の成の字、金銀香もあきれはて、二歩ぢやと云ふたがお耻かしい、これが向ふの地面の土徳である今もその如く迷ひの婆婆も今しばらく、やがて命の終り次第、彌陀の淨土へ國がへしたら、鬼よ大蛇と云はれし凡夫が、彌陀同體の御證り。

談叢　智藏禪師と張拙

智藏禪師の處へ張拙秀戈がまいりて、「三世諸佛は有か無か、十方の淨土は有か無か」と尋ね申すに、禪師一言に答へて「有」と申された、所が張秀才が申すには、「これは存じもよらぬこと、佛法の通義心外無法なり、禪傳によるも心外無佛今何ぞ十方淨土あり、三世の諸佛ありとの玉ふや」、禪師曰く「君は何ぞ學んだことがあるか、誰ぞに何かを聞いたことがあるや」、張拙曰く「予不肖なりといへども少く性相を學び、且つ徑山禪師より聞く所もあり」、今禪師が十方淨土あり三世諸佛ありとは何等に依つての玉ふや」、禪師曰く「西があれば東があり右があれば左がある、心外無佛と云ふ云へば佛外無心ぢや、あまり一方ばかりをにらんでおるはほめられたことでなひ、それはさておき君は家族ありや」、張拙曰く、「妻一人あり兒童二人あり」、禪師曰く「君が相傳をうけたる徑山禪師は妻子ありや」、張拙曰く「これは意外の御尋、徑山禪師は世間で活如來と云ふでおる位であるから、なか〳〵妻子などのあるやうな御方ではありません」、禪師襟を正して曰く「君も亦徑山禪師の如く妻もなく子もなくさらに一の累もなき時を待つて、三世諸佛もいらぬ十方淨土もいらぬと申されても未だおそくはあるまい」と諭されたので、流石の張拙も一言もなかつたと云ふことである。

ショウトクタイシ　聖德太子　【人名】

用明天皇の皇子にして厩戸皇子と稱す、敏達天皇三年甲午正月元旦に出生し初めて日本に佛教を興隆す、功勳甚だ多し、推古天皇三十年二月二十二日半夜斑鳩宮に薨す、壽四十九、

談叢　聖德太子の幼時

太子の幼時に於ける言行に付き、名高き人の著書について二三の事實を掲げませう、

其一

太子生れたまひしより御手を握りたまひしが、二歳にて東方に向ひ、南無佛とて開き玉へば、一の舍利ありき、佛法流布の爲めに權化したまへること疑なし、佛舍利は今に法隆寺に崇めたてまつる「神皇正統記」

其二

太子、三歳の時、天皇と後園に遊び、天皇より桃花松葉、いづれを願ふと問はれて、桃

花は一旦の榮松樹は萬木の貞、故に松葉を愛すと答ふ（「扶桑畧記」）

因に記す、天慶六年に勅して日本書紀を講ぜしめたまひ、竟りて宴を賜ふた時、諸臣に各書中の事蹟を題にして歌を作くることを命ぜられたが、其時、右中辨師尹が聖德太子の題にて、

さきにほう花をばおきてとよとみこ
松にはすみま色なかりけり

と詠ぜられたとあるは、全くこの事實を詠まれたのものである今の書紀には削られてあれど、天慶六年頃にあつた書紀には載せてあつたから從つて此歌も出來たものであろうと思ふ。

其三

太子、六歲の時、諸皇子宮中に集りて相戲れ口鬪をなしゝに、帝の苦を執つて起ち玉ふて見て皆逃れたるに、太子のみ衣を祖いて進めり、帝、汝のみ何ぞ然るとありければ、不レ可ニ天ニ階ニ而昇ニ、不レ可ニ地ニ穴而隱ニ、よりて笞を受ると對へ給ふたとある（「大日本史」）

談話　聖德太子の御祈禱

聖德太子、十六歲の時、御父公用明天皇の御病氣が烈しかつたので、日夜看病をなされ亦祈請を凝らされました、其事を太子傳曆と云ふ書の中に、

太子不レ解ニ衣帶一日夜侍レ病ニ天皇一飯レバ太子一飯、天皇再飯ヘレバ太子再飯ヘ擊ニ香爐一祈請、音不レ絕レ響ニ

とかいてある、眞宗に安置してある太子は即

ちこの御姿なので、身には二十五條の袈裟をまとひ、手には香爐をさゝげて立つてござる眞宗の如き現世祈禱を排斥する宗旨に於て、御祈禱の像を安置すると云ふは、頗る矛盾の至りではないかと云ふ不審があれどこれは太子の孝道の深きことを知らしめたものであります、孝は百行の本で、俗諦道德の肝要と孝道にあるのですからそれを知らしむる爲めに特に十六歲御祈禱の像を眞宗には御安置申すのである。

内緣　聖德太子と善光寺如來

人皇三十四代推古天皇十年、聖德太子御齡三十一歲、難波の四天王寺の金堂に御參籠ましゝ、七日七夜の間念佛を稱へさせられ、表は欽明用明兩帝の御追善の爲め、出世に取りては大悲の佛恩を報せん爲めに、稱名怠り玉はず、七日滿ずる日に當り、小野の妹子大臣を御使として、信州善光寺の阿彌陀如來へ御手紙を上させられた、其御詞が四句の偈文ちや。

名號稱揚すること七日已んぬ
此れは斯れ廣大の恩を謝せんが爲めなり
仰ぎ願くば本師彌陀尊
我を助けて濟度し常に護念したまへ

八月十五日、御名は佛子勝鬘、宛名は本師善光寺如來の所へと御したゝめなされ、東に向ふて三度禮拜して、小野の大臣へ其御消息を渡させられた、小野の大臣甲斐の黑駒に打ち乘り、此御書を懷中して、三日三夜の間に信州善光寺に參着し、本田善光を取次とし、如

來の卽前へ今の御書を差上げ、幷に紙と硯を御戸帳の內へ差入れ、小野大臣善光の兩人はは遠か下りて平伏て居られると、墨をすらせらるゝ音がさだかに聞ゑ、速に御返書をしるさせられて、御戸帳の外へ出させられた故、兩人は歡喜の涙にむせばれたとある、それより小野大臣御返書を頂戴して都へのぼり、太子の御許へ差上られた、其御返事が同しく四句の偈文、

一日の稱揚恩を留むることなし
何に況んや七日の大功德おや
我れ衆生を待つ心に間なし
汝能く濟度す豈護念せざらんや

奧には八月十八日、御名前を善光と記させられ、上宮太子御返報とあそばされた、又この御意を一首の御歌

待ちかねて恨むと告よみな人に
いつをいつとて急がさるらん

と御詠みあそばされた、聖德太子、この御歌を御覽なされ、ともに御涙にむせばせられ、とりあへず御返歌に

いそげ人彌陀の御船のかよふ世に
乘りおくれなば誰かわたさん

末代の惡人油斷をするな、五障の女人はやいそげ、露命不定の世の中ぢやぞや、大願の船に乘りおくれ、此度地獄へ落ちたなら、うかむ手掛りがなる程に、其儘たのめ信ぜよと、御やるせなく御勸め下さるゝ思召ぢやぞや、

內容 施鹿苑寺の因緣

聖德太子、四十三歲の時、大和國信貴山の

北の邊を御乘馬に召されて御通行なさるゝ時路傍に一疋の白犬が伏して居た、向ふの溪の間に小さき鹿の居るを見付て忽ち其鹿を追ひつめ嚙み殺した、太子の思召すには、あの鹿はもとより山に住みなれしものなれば、山や溪を驅ることは自在なるに、あの犬に見込まれてにげ去ることもならずして、犬に嚙み殺されたとは不審の至り、如何なる前世の業因にやと、定に入りて觀察遊されたれば、彼の犬と鹿とは前世の敵同士でありたと云ふことが知れた、その次第は、妾腹に一人の男子を生せしに、本妻は嫉妬の心やる方なく、彼の男子が三歲の時に本妻は毒藥を以て殺して仕舞ふた、その事は露顯して本妻は重き刑罰に處せられたが妾の恨み未だ晴れやらず、生々世々に仇となり怨みを報せんと一念の憤りより愚痴の闇に陷り、本妻も俱に畜生道に生を受け、聖德太子の御時代まで九十九生の其間生れかわり死にかわり、或は殺しつ殺されつ、これより末も何時を限りともなく、殘害殺戮の苦患を受くること、イト不便に思召されて、それより彼の鹿の嚙み殺されし處にて七日七夜法要を營み、太子自ら御導師となりて、彼の本妻と妾との怨親平等苦界得脫の爲めに菩提を吊ひければ、七日滿ずる日に當りて、虛空より二人の天人舞ひ下り、聖德太子の御前に跪き、厚き法施の功德によりて、畜生道の苦患をのがれ、今は忉利天に生を受けたりとて、身心歡喜の相をあらはして虛空に飛び去れり。それより太子其處に一宇を御

建立なされて鹿に施す寺と云ふことで、施鹿苑寺と寺號を御つけなされたとある。

内縁 聖德太子と親鸞聖人

親鸞聖人は非常に聖德太子を慕ふて御座るので、其事は御製作の和讃の上にあり〳〵とあらはれております、皇太子奉讃と題して、

和國の教主聖德皇
廣大恩德謝しがたし
一心に歸命したてまつり
奉讃不退ならしめよ
上宮皇子方便し
和國の有情をあはれみて
如來の悲願を弘宣せり
慶喜奉讃せしむべし
聖德皇のあはれみに
護持養育たへずして
如來二種の回向に
すゝめいましめおはします

など仰せられてあるを以て其一班を伺ふことが出來ると思ふ、又、御年十九歳の七月に大和國法隆寺へ入らせられ、六十日の間覺運僧都に從つて因明の奥義を學ばれ、九月十二日に聖德太子の御廟へ參詣せられ、

我三尊は塵沙界を化す
日域は大乘相應の地なり
諦かに聽け〳〵我が教へ
汝が命根應に十餘載なるべし
善信よ善信は眞の菩薩なり

と云ふ御告を蒙られたことがある、因に記す、この聖德太子の御廟と云ふは

河内磯長の地にあります、太子四十二歳の時、甲斐の黒駒に召され日本中を御巡回あそばしたが、其時にこの磯長の地を御覽になり、これ我入滅後の墓所なりとて自ら廟窟を築かせられ、我れ入滅の後我が骨は勿論、我が母も我が姫も、三骨皆此所に納むべしと御遺言あそばし三骨一廟三尊位等と云ふ碑銘まで認めておかれた、それゆへ、中央には母公間人皇后東の方は皇太子、西の方は通手姫、この御三方の石棺がおさめ奉られてあるのでこれを三骨一所の御廟と申すのであります。

ジョウドシンシユウ 浄土眞宗 【宗名】

元仁元年の創始にして親鸞聖人を以て開山とす、

句 子の爲めに織るはきびしき機の音

横一節の其糸にも母のまことを繰り出し、染めて卷きあげ、織て仕立てゝサア着よと、與へられたる嬉しさは、兩手を通し手をついて有難うござるの口上より外はない、今御開山の御苦勞は教行信證の堅糸に三帖和讃の横糸、浄土眞宗を織り出して、眞俗二諦に仕立あげ、娑婆の世渡りは德義をまもれ、未來は間違なく安養の浄土へ迎へ取るぞよと、御懇ろなる御化導を頂いてみりや、これは〳〵の思ひより外はあるまい。

諺喩 宿引と料理人

旅行をすると何處の停車場へついても、停車場前の旅館には、それ〴〵宿引が出て、口々に自分の家の屋號を呼んで旅客を招いてお

る、門口に立つておるは大低女じや、さていよ〳〵旅客が來ると云ふと亭主は歡んで之を迎へ奥の間へ案内する、勝手では料理人がこち〳〵馳走をする音がする、淨土眞宗と云ふ旅館には、大悲の彌陀が愚禿親鸞と名乘りて亭主役、觀音樣が玉日の宮の赤前垂の宿引、煩惱の荷物はこちらへ渡せ、愛妻愛子の其まゝで大悲の親樣は御引受け下さるぞよと、本願の御座敷へ御案内、御亭主役の御開山は、御泊め申しませうの勅命を忝なゐと受けた處が信順ぢやで、八萬四千の光明の奥の間へ攝取不捨と御案内ぢやぞや、勢至の化身たる法然聖人は御安心の料理人ぢや、「もろこし我朝の智者達の觀念の念にもあらず」等と御臨終の夕まで安心の料理方、サアこれでよく合點せられよ、觀音の宿引は前には聖德太子の出迎ひ男、淨土眞宗の門口では玉日の宮、宿引は表へ出るものゆへ、日本中に觀音堂は澤山あるが勢至堂はなゐ、法然聖人は勝手の料理人、御開山樣は亭主役、泊りの旅客は御座の我々、ドーヂャ後生の宿が取られたか。

譬喩 阿古屋の松

昔、阿古屋の松が見たひとて奥州めぐりをしたものがあつて、どう尋ても尋ね當らぬので、物に心得のある人に聞いてみたれば、大むかしは奥州にあつたゆへ、歌にも、むつのくのあこやの松とよんであれど、其後むつのく一國を分けて、出羽奥州としたについて、阿古屋の松は出羽の國にあることになつたと云ふて教へたと云ふ話がある、法然聖人の淨土の宗義は、自餘の淨土宗を尋ねても尋ねあたることは出來ない、淨土眞宗の出羽の國でなければ、尋ねあたることは出來なゐのである。

因緣 眞田幸村の利劍

眞田幸村、浪人をして居られた時分に、大小の拵を木綿の打糸で卷いておかれたを、或人が見て大に笑ひたれば、幸村の申すやう、「たとひ上に錦を着たりとも心頑愚ならば用には立たぬ、此魂を見玉へ」と兩刀ながら目釘をぬき銘を見せられた處が、大小ともに相州政宗であつた、たとひ見かけは結構な金つくりでも、中が鈍刀では所詮がなひ、木綿の打糸はさておき繩まきにしてあろうとも内が正銘ならば刀の用は達する、自餘の淨土宗のやうに定散要門のかざりことをゆるしますと、素人好はするやうなれども、内證へ立ち入りてみると、如來をたのむ眞實のまことがなひに依つて報土往生は心もとなひ、然るに御開山の御一流には、定散要門のかざりことを用ゐ玉はず、あたまから他力信心の正味を御勸めなさるゝに依つて、いかなる愚痴無智の輩も、彼尊の御蔭で内心にふかく他力信心の正銘を貯へたれば、煩惱の敵に逢ふて利劍卽是の手拵をあらはし、臨終一念の夕、大般涅槃を超證する、これが淨土中の眞宗、親鸞聖人の御一流にてまします。

因緣 越の大將と不龜手

莊子の雜篇に斯う云ふ話が出てある、二三代も續いた洗濯屋に不龜手と云ふ妙藥が傳は

つてある、この不龜手を手足にぬると云ふと如何なる嚴寒の際に氷の中へ手をつけても凍へると云ふことが微塵もなゐ、それでこの洗濯屋は綿々と渡世をして居た、或時吳と越との間に戰端を開き數年の間にわたりたが、極寒の時節となりて兩方とも對陣して冬籠りをして居た、越の大將フトこの不龜手と云ふ妙藥のある事を傳へきゝ、洗濯屋をたのんで其製法を敎へてもらい、早速これを應用して吳の國を攻めたてたが、吳の軍勢は凍へておるから太刀も槍も取ることが出來ないのに、越の軍人は不龜手の德で、聊かも凍へると云ふの憂ひなく、縱橫無窮に切りまくつて大勝利を得られたと云ふことぢや、これを以てよく聽聞せられよ、不龜手は同じ不龜手なれども、洗濯屋が持てば漸く二三人の生活するばかり越の大將が持ては敵國を亡ぼす、程の大勳功があらはれた、妙藥にかわりはなけれども持ち手によつてはたらきに大差がある、今大悲回向の南無阿彌陀佛も我れ／＼の胸に得てはわづか一人の往生淨土の眞因なれど、祖師聖人の持たせられては、日本國中津々浦々まで、南無阿彌陀佛の聞あげさせ、極樂淨土へつれかいらせらるゝ程の大事業が出來るのである。

因緣 孟之反の大勇

論語の中に「孟之反不レ伐ラ奔デ而殿タリ將ニ入レント門ニ策ニ其馬ニ曰ヒ非ニ敢テ後レタルニ馬不レ進也」とある、これは孔子が孟之反と云ふ人の武功にほこらぬことを贊めた言ぢや、殿と云ふはあとおさゑの事で、敵に向ふて進擊する時には、先へ進んだを先鋒と云ふて手柄とする、もし利あらずして敗軍となりた時には、殿と云ふて人より後れてあとになりたを手柄とする、然るに彼の孟之反、君に從ひて軍に趣きしに、其軍利あらずして逃ぐる時、すべての人は我れ一と先へ逃げたれども、孟之反ひとり後になりて、軍のあとおさへをして、徐々と引退いたを大勇であると云ふて人の褒めたてた時に、孟之反の返答に、イヤ／＼拙者がわざと後になり、殿せうと思ふたではなけれども、何分にも馬がすゝまなんだものゆへ、偶然に後になりたのであると云ふたを稱讃せられたる孔子の言ぢや、今も大聖釋迦如來は、八萬四千の煩惱の敵を對治なさんとて、三百餘會の軍備、八萬四千の兵士、八家九宗に部署を定めて向はれたが、正像末の三時を經たる長き戰爭に、敎の術もつきさせられ、華嚴經を始めとして、數多の諸經もろともに、我も／＼と敗北、龍宮さして引き取り玉ふ、末法萬年の只今、親鸞聖人御一人がひとり踏みとゞまらせられ、御開闢下された淨土眞宗は、一代佛敎の殿である。

ジョウニヨ 乘如 【人名】

東本願寺第十九代なり、名は光暹、鼎船と號す、寶曆十七年七月宗務を繼ぎ、寛政四年二月寂す、壽四十九、

逸話 乘如上人と養老瀧

乘如上人、養老へ御出の時、口ヶ島の長誓寺、瀧に打たれて御覽に入れたら、甚だ御喜びなされ「其裸體のなりで來い」との玉ふ

仰せに從ひ裸體のなりで御前へまいりたら、御手づから菓子を頂戴した、衣を着たり、帶をしめたりするより、仰せの通り裸なりが御意に叶ふたのである、今も善根の着物を着ず定散の帶しめず、煩惱具足の裸體のなりが如來の勅命に叶ふのぢや。

ショウマツ　庄松【人名】

讃岐國の人なり、篤信者を以て名あらはる、生年月等詳かならず、

因緣　本夫と姦夫

讃岐の庄松同行が、友達の宅へ行かれましたが、其御同行は平生から如實に御法義を喜ぶ人にも似合はず、奥の間の床に御幣を飾りて居る、庄松は夫をチラリト見るなり、大聲を擧げて、「姦夫見付けた〳〵」と云ひました、これは雜行すて〻彌陀をたのみましたと明に御領解はのべながら、內證で神だのみするなどは、丁度本夫のある上に姦夫を引き入れて居ると同じことぢやと云ふ御異見ですが、其同行は、この姦夫見付けたの一言が深く肝に徹し、早速御幣を庄松同行の前へ持ち出して、「庄松さん、ドーゾ堪忍して下され雜行すてました彌陀をたのみましたと、かね〴〵御領解はのべて居りながら、ッイ可愛一人娘が大病にかゝりまして、處々方々と醫者めぐりもしましたれど、更にきゝめは見ゑませず、因緣事とはあきらめながら恩愛の念にひかされて、ドーカ今一度、全快させてやりたひものと、いろ〳〵心を碎く中、つい近處の人に敎ゑられ、藥がきかねば神だのみより外はなゐと云はれ、御幣まつりたは如何にも姦夫ひき入れたも同樣であります、今日と云ふ今日は目が覺めました、ドーゾ堪忍して下され」と兩眼から涙ながしてあやまりたれば庄松同行はニコ〳〵顏で、「ドーヂャ三行半は書けたが內緣はきれましたかな」と云ふたと云ふ逸話がある、阿彌陀佛に於て二佛をならべざる一心一向の味ひはこれでよく合點をしてもらいたい。

因緣　奇拔なる答辨

昔、京都に一人の同行がありまして、一日西本山の總會所へまいり御領解を出言して御調をうけた所、何か出言の口上に過失がありたと見ゑ、時の示談役、勸學樣より大層叱られ後來を誡められた、そこで今の同行大に心配して、更に東本願寺の總會所へまいり西で述べた如く自督の領解を出言した、然るに今度は東派の大講師より大に御賞めに預りア、美はしき御領解であると御許しになりたと依て今の同行は一度は喜んだものゝ退いて考ふれば、同じ口上の領解をば、一方よりは許され一方よりは許されぬ、コハ何れが眞正であらふと疑ひ始め、大變心配したのである、然るに其頃幸に信者として名高き讃岐の庄松同行が上京して居たから、この庄松同行に尋ねようと思ひ、同人を訪れた所、流石に庄松同行のすゝめ方は奇拔である、曰く「今度の後生は誰に助けてもらうのか、まづそれから御きめなさい、西派の勸學樣も大德なれど極樂の主人公にあらず、東派の大講師も學

者なれど極樂の持主にあらず、極樂淨土の御主人でなき學者方の言辭によりて往生をきめようとするがそも〳〵間違である、たゞ極樂へまいるには極樂の主人公たる阿彌陀如來の仰せに順ふばかりである」と、最後の解決を與へたと云ふ事である。

雜錄 安心問答

問曰く「其許決定せられしかや、

答曰く 決定せり、

問曰く 如何が決定せられたるや、

答曰く 我は助からぬと決定したれば、阿彌陀さまは必ず助くると決定したまへり、

問曰く 若し間違はゞ如何なさるゝや、

答曰く、佛は親樣ぢやから、よきやうにして下さるであろう、

これは洛湯の三九郎と讃州庄松との問答なりときけりと、秀存語錄に出づ。

ショウミヨウ 稱名【術語】

四種の念佛の題一なり、稱は稱念の義にして、口に專ら佛名を稱ふることなり、

譬喩 幼兒の初聲

頑是のなゐ稚兒、生れてからまだ口をきいた事のなゐ者が、母親の膝の上で、初めて一聲「母樣」と云ふた、其時の母親の意はどんなに嬉しいでせう、此間中から、もう口をきゝそうなものぢや〳〵と待ち兼て居た矢先に一聲母樣と云ふたのであるゆへ、母の耳には鶯の初音どころで御座いません、そこでモウ一遍云ふてみよ御乳をやる、モウ一遍云ふてみよ御菓子をやると、何遍でも母樣〳〵と云はせてたのしみます、これが親の慈愛心の精粹ぢや、今も丁度その通り、阿彌陀樣が親なるやら、何ぢややら、分らなんだ乳呑兒同樣な私共に、一度は信ぜさせずばおくまい、稱へさせずばおくまいの、大慈大悲の御育により、後生の大事に夜が明けて、やれ嬉しやの思ひより、乳呑兒が初めて一聲母樣と云ふた如く、南無阿彌陀佛と彼尊の御名を呼び申せば、其聲をきこしめされ、やれ嬉しやこれでこそ五刼永刼のうき苦勞、種々に善巧方便して育てあげたる甲斐があると、大悲の御胸をやすめられての御滿足であります、これは彼尊の御名前を南無阿彌陀佛〳〵〳〵と稱へるのが報恩になると云ふ理由を手近く喩へたのであります。

譬喩 繼子と實子

子供が二人あつて、一人は繼子、一人は實子、かの先妻の子は今の母は繼母ゆへどうぞして氣に入りて着物の一枚もしてもらふと、繼母に向ふてお母さん〳〵と誠の親の如く追從する、それに引かへ實子はよそへ遊びに行つて何ぞほしい時に退屈しのぎにお母さんと云ふくらい、しかし繼子のお母さんと云ふのは繼母の心をはかりかねて、お母さんと云ふ聲に勇みがない、實の子は退屈なときにお母さんといふ位なれど、其一聲に勇みがある、今も丁度其如く、各々方や我々も本願信じ兼た其昔は、斯うたのんだらよかろうか、斯う願ふたらよかろうかと、阿彌陀樣の氣に入る

ことにかゝりはてゝ、喜びたい殊勝になりたいと、口に念佛は稱へながら、相にまいり恭敬はつとめながら、肝心の心の底に機兼があつて、稱ふる念佛に勇みがあれども、憶念の心の勇みがない、しかるに今日と云ふ今日は彌陀の實に打明されて、彌陀がたのまれた今日では、稱へて往生させてもらふとも思はず斯う思ふたらよからうかと、氣に入りたひの思ひはない、親心が骨髓まで知られたゆへ、一聲々々稱へる念佛も行く先一つに苦拔けの出來た上のことゆへ、憶念稱名勇みありと仰せられた。

句 拜領と思へば重しうす羽織

誠に薄い單羽織なれど、我が主人公より特に賜はつた拜領のものだと思へば、誠に重く受けねばならぬと云ふ句の意、今この南無阿彌陀佛も一口にたらぬ六字なれども、本師法王の親樣より、この私へ下された拜領の御六字だと思へば、誠に重くこれを受けねばなりませぬ。

古語 戯言ナレドモ出ヅ於思フヨリ

熱い時には、さて〳〵熱いと云ひ、寒い時には、さて〳〵寒いと云ふ、平生戯れ半分に云ふ言葉でも、心になゐことは云はぬものぢや酒好きはいつも酒の話をする、餅好きはいつも餅の話をすると云ふやうに、心に思ふておることが口にあらはれるものぢや、今も其如くで、如來の御慈悲が身にこたへたれば、我しらず口にあらはれて、御恩尊とや南無阿彌陀佛ととなへらるゝ。

ショカツコウメイ 諸葛孔明 【人名】

献帝建安十二年孔明劉備の爲めに草廬を出づ、十九年軍師將軍、建興元年武鄉侯となり、同五年出師表を上る、智謀倍將を拔く、同十二年卒す、

談義 孔明と醜婦

孔明と云ふ人は、日本で云ふ楠正成の如く、昔から人々に持離されます、かゝる偉きい人で其上金滿家で男が美いと來て居るから何んな美人でも別嬪でも貰ふとして貰へんことはありませんけれど、然し、孔明は別嬪や美人は決して我が女房とは致ませんで天下に一と云つて二とない不別嬪、誰も嫌がッて貰はぬ醜き女を貰つて女房といたしたのでありまし、人が不思議に思つて貴君は何して彼女ものをお貰ひなすッた、もッと美い者が幾らもあるではありませんかと云ひますれば、孔明から〳〵と打笑つて君達はそれだから駄目だ智惠があると言ひたいが遺憾ながら言ふことの出來んのだ、それは亦何う云ふ解けですと問返へせば孔明の云はるゝのに美なる者は自ら美人と思つて德を修むることをせず之と反對で醜きものは自ら醜きものと思つて之を補はんとて一生懸命に行儀作法を起ち働きを致す、夫れ起ち働き能くする者は良人がなくとも一家を維持す行儀作法のあるものは人より愛せらるゝが之に反して美人はその美を鼻に掛けて稼ぐ事もせず行儀作法も行はず日に鏡に向て御化粧し甘いものを食つて臥たり起たりするが仕事で有て、偶に、亭主が用でも云ふとブッ〳〵して面膨らして居るのが常だ、斯るものを貰つたとて何の益にか立つべきぞ

故に余は不別嬪を捜して女房としたるものだと語られました。

ショク 私愁 【世語】

日夜起り來る賤しき慾望を云ふ、佛敎に談ずる煩惱のことなり、

談叢 白木屋主人の機敏

烟草がこの日本に渡來したのは、今から三百有餘年前、卽ち慶長十年のことで、それから十一二年後卽ち元和二年の暮には、實に左の如き御觸があまねく御發布になつたことであります。

條々

一 たばこ作る者町人は五十日百姓は三十日、自分兵糧にて籠舍たるべき事、

一 賣り候者も同前の事、

一 作り候在所は過料として百姓一人につき鳥目百文づゝ出すべき事、

一 同じく作り候處の代官は過料として五百文出すべき事、

右の條々堅く被仰出候仍下知如件

元和二年辰十月三日

然るにこの嚴重なる烟草禁制のお觸が出ると間もなく、彼の日本橋の白木屋の主人が、外を歩いておると、フト目についたは五六人の非人共が或橋の下でひそかに煙草をのんで居る、其時主人の思ふやう、如何に政府から嚴重なる觸が出たと申しても、法律の力で人間の嗜好が改まるものではない、よし〳〵其處を見込んで一儲けしてやりませうと、卽ち八方へ手を配つて、盛んに不用の煙管を買古まするとと、其内においく前の禁制もゆるんでまいり、煙草をのむもの〻數は日增に多くなりたゆへ、そこで以前買ひ占めた煙管を賣出して大屑な金儲を致したそうであります、今に白木屋の商標に公を用ゆるは、全く煙管をぶつ違へにした形で、いつまでも紀念する爲であると申します、この話には左の二箇の敎訓が含まれてあると思ひます、

一 商業はすべからく機敏なるべし、

二 法律は人民を保護するの力あれども、人心を改遊するの力なし。

談叢 利欲の極、神を欺く

或强欲者、神に祈りて、大金を得んと欲し一心に祈請して曰く、願くば神樣よ、我に一萬圓の大金を授け給へよ、此願成就したる日には、九千九百九十九圓を御禮とてし差上申すべしと、再三反覆して祈る、傍にありて之を聞くもの、一萬圓より九千九百九十九圓を引き去らば、殘る處僅に壹圓なり、壹圓の利を得るに、何ぞ神を煩すに足らんや、是れ必ず失言若くは違算ならんとて、其者に注意したれば、當人曰く、是れ違算にあらず、其御禮として九千九百九十九圓を差上ぐるとは、全く神を欺く爲の方便にして、愈々壹萬圓の大金を得たる日には、一文も差上げぬ積りなりと答へたりとぞ、人の欲極りて神を欺かんとす、誠に畏るべきことなり。

談叢 幡隨院和尙と瀨川太夫

東京吉原に松葉屋の瀨川太夫と云ふがあつて、一時全盛を極めて居た、幡隨院の和尙が

或時其瀬川に對して云はるゝやう、「汝は禿の時より多くの僞を云ふて客をだます、其罪地獄の業因である」と云はれたら、瀬川の答ふるやう。

二葉より尙うるはしき虛ごとを
いふも浮世の習ひこそあれ

そこで和尙が、なる程、嘘は世の寶、しかし人に多くの金をつかはしたは、如何と詰られたら、瀬川の答ふやう、

戀すれば何の寶の惜からん
捨つる命も厭はぬものを

和尙云ふ、なるほど一言もなひ、それなら大切な金をつかはせながら、其客を振つたは如何と云はれたら、又答ふるやう、

定らぬ人の心の村時雨
空さへ晴ればなどか降るべき

これで如何な幡隨院の和尙も閉口して「如是畜生發菩提心」恐るべし〳〵と云ふて歸られたとある、實にこの傾城瀬川の云ふた如くで、晴れた月夜に雨はふらぬ、客の心が不定ゆへ自然と嘘を云ふやうになるのであるとは人情の機微を穿ち得て妙なりと云ふべしである。

滑稽 饅頭好きの書生

或書生が腹がへつて致方がない、たま〳〵饅頭屋の店先に來てみると溫かい甘まそうな饅頭が、ポッポト蒸氣がたつて居る、書生はこれを見てもはや一足も前へ進むことが出來ぬそこで、一計を案じまして饅頭屋の前へぶつ倒れまして口より泡をふくと、饅頭屋の亭主は大に驚き、書生を抱き起して介抱し「如何なされました、氣をたしかに御持ちなされといへば、書生はさも恐れたる體にて、「ア、怖い、怖い、僕は小供の時から饅頭を見ると何となく怖くて身の毛がよだつ、マア君の店には何と大層な饅頭があるでないか」と申しました、亭主は書生の饅頭を怖るゝ樣子の如何にもおかしいのを見て、再び彼を驚かして呉れやうと思案して、「左樣でござるか、然らば暫し私方の奥の間にて御休みなされませ、幾分か御心も落つきませう」と云ひつゝ自ら案内して、奥の間の饅頭を澤山に積みおける所に入れ、書生は再び氣絶するならんと襖の外より伺ふに、書生は平然と座をしめて、さも嬉しげに兩手にて饅頭を取り頻りに頰張ておる樣子、亭主は餘りの不審さに、書生が四五十も饅頭を食ふたと思ふ頃、襖をあけて、「書生さん貴方は饅頭を怖くはありませぬか」といへば、「ア、最早饅頭は怖くない茶が一二杯怖くなつた」と申したとある。

滑稽 猿の舞踏

或家の宴會の餘興にとて、五六歳ばかりの子供が實に美しい衣服を着け假面を被ぶりて宴席に現はれました、甲は貴顯を粧ひ、乙は貴婦人の扮たちでありまして、其席上にあらはるゝや、甲乙相携へて、舞踏を演じた、彼等は實に小兒の分際にも似合ざる程、其技藝の巧妙にして、一擧手一投足、席上の來賓をして無量の感を起さしめた、然るに來賓中の一人がその巧妙なる技に感じ、卓上の柿一箇

を取つて壇上に投じ其賞賛を表しけるに、これまで舞踏に餘念なかりし貴顯と貴婦人とは俄かに狂人の如く變じ、その柿を追ふて我これを得んと大に爭ひ、その結果格闘に及び、遂に互に假面を剝き取りければ、今まで小童と見へし踊り手は、人間にはあらずして全く猿にてありしと云ふ、これは誘惑に逢ふて自己の本性を暴露すると云ふの寓話です、身には立派なる學位を有し、名譽や官職を双肩に荷へるものにして、往々多年の修養と經驗とを水泡に歸せしむるが如きは、この本性を暴露したる猿と同樣である。

ショクサンジン 蜀山人 【人名】 太田七左衛門と云ふ南畝又は蜀山人は其號なり、幕府の士にして狂歌を以て著はる、文政六年四月歿す、年七十五、著述多し、

歌話 蜀山人と鷹匠

蜀山人、或日品川の旅宿へ行き用事はてゝ歸るとき、門口に休み居たる幕府の御鷹に袖が觸れましたので、鷹匠は腹を立て、何故に御鷹を驚かしたか堪忍なり難し」と罵る、蜀山人、さま〳〵に詫を入れるけれども聞かぬ終に旅宿の主人も出てともに言を添へましたら、鷹匠は漸く面をやわらげ、「汝は何者なりや」と問ふゆへ「狂歌師なり」と答ふ、「されば一首狂歌を詠め、其罪をゆるしてやろう」と云はれたから暫く打ち案じて、

一ふじに御鷹匠さんになす粗相
あはれこの事夢になれかし

とよみましたら、天晴秀逸なりとて直に罪を宥されたとある。

歌話 蜀山人火を乞ふ

蜀山人、曾て幕府の御勘定を勤めたりし時京都へ上る途中、駕籠に入れおける爐の火消ゑければ、道の傍の人家に人をつかわし火を乞はせしに、蜀山人なることを知りて即吟を乞ふた、ソハ易きことなりとて、懐紙に矢立の墨染めて、

入相のかねの火入れをつき出せば
いづこの里はひはくるゝなり

歌話 蜀山人の禁酒

蜀山人、或時禁酒を思ひ立ち、左の如く詠じて斷然禁酒を實行せうとせられた、

くろがねの門より高きこの禁酒
ならば手柄にやぶれ朝比奈

數日の後、再び酒を飲み初めて、

わが禁酒やぶれ衣になりにけり
やよついでくれやよさしてくれ

歌話 蜀山人と備前侯

或日、備前侯の御邸へ伺ひましたが、侯はかねて蜀山人の評判を聞いておられますから今日は一つ困らせてやろうと思召して、澤山に御酒を下され、十二分に酩酊しておる所へ即吟をせよと云ふて題が出ました、それは短冊に「屁の中の月」と御認めになつて居る、そこで蜀山人は、

すかしみればひるかとぞ見る武藏野の
くさきをわけて出る月かげ

歌話 元朝の門松

大晦日の夕暮に、或豪家の主人が、門前に門松を立てゝ迎歳の準備をして居られたが、

其夜烈しき北風吹き來り、遂に其門松を吹き倒した、翌朝主人之を見て、年の始めに當り祝ひの門松が倒るゝとは、我家の倒るゝ前徵なりとて大に歎息したれば、家内のものは早速其門松を起して舊のまゝに飾り立てたれど主人の不機嫌は直る樣もなく、元朝より雜煮も食はずに蒲團をかぶりて悲んで居た、處へ名高き蜀山人が年頭の禮に來てこの始末をきゝ、何も憂ふるには及ばぬとて、一首の歌を詠んだ、曰く、

元日や福壽の神が來た風に
果報寢てまつ又おきてまつ

主人大に喜び、これは禍を轉じて福に引き直したといふて、忽ち床から飛びおきて、屠蘇を酌み雜煮を祝ふたといふことぢや、吉凶禍福は善惡業報のなすところで、決して風のわざや門松の所爲ではない、されど心のすはりがなく眞の道理に暗いと云ふと、今の主人の如き迷信に陷るのである、御用心々々々。

歌話 赤の河骨

谷文晁、河骨を水盆に植ゑ、戯れに繪筆に丹朱の餘れるを以て此花に塗りしに、偶々訪ひ來りし蜀山人「コハ我國には類い少き花なり、是非一莖を賜はれ」といふに、文晁おかしさをこらへ「コハ予の珍藏するものなれど折角の望みなれば持ち歸られよ」と云ふ、蜀山人喜びて一莖を携へたが、折から五月雨の頃なりければ、傘さしてゆく程に、傘の雫にて、河骨の色悉く褪せて尋常のものとなりければ、蜀山人よく〳〵見れば繪の具の塗りつけたるに氣付き、文晁に弄れたりと、直に文晁がまつかな嘘と知れたならかうほねおつて貰ふまいものと詠み送つた。

歌話 蜀山人の船暈

蜀山人が伊勢から三州の伊良湖に渡航せられたことがあるが、其時、丁度波風烈しく、船は左右に振れ、多くの弟子共は勿論のこと蜀山人もついに心持が惡しくなり、俗に云ふ小間物店（嘔吐）を始め、キクキク、ゲーゲーと云つて眼からは涙を流し非常に苦しき樣子であつた、時に弟子達は師匠に向つて曰く、「日頃快活に洒々落々たる先生も此際に臨んでは、歌を詠ずることは出來ますまい、先生一首詠めますか」と云ふと、先生の曰く、

よめばよむ月と云ふ字は二つよむ
月とでもよむ月とでもよむ

非常に趣味のある頓智であります。

歌話 嫁が君の小便

備前侯の若君が正月初めて登城の折、禮服をつけおはりたる刹那、長押を走りながら嫁が君が小便をしかけました、嫁が君と申すと美人のやうぢやが鼠のことで御座ります、そこで若君も御立腹になつたが鼠の事ぢやから致方がござらぬ、正月匆々小便を禮服にかけられるやうでは不吉千萬、本年も祿なことはあるまいと心配して不興なること此上もない、時に蜀山人がまいり合せ、取りあへず

鼠殿てんじやう人の眞似をして
したゝれかゝるしいの少將

と狂歌を詠み不吉を拂ひましたら、若君も心機一轉して大層御機嫌よく御登城となり、其年の内に五位より四位の少將に御進みなされたと云ふ話がある。

雜錄 蜀山人の道歌

蜀山人の滑稽洒落多才多藝にして、狂歌に狂詩に戯文に、一として善くせざるなく、寛政文化の時代に雷名を轟かせり、

世の中にかほどうるさきものはなし
文武と云ふて夜も寢られず

の狂歌は幕政改革の時の口占なりと云ふ、今其教訓ともなるべき道歌五三を掲ぐ、

一聲も時鳥よりきゝたきは
誠の道をかたる世の人

我をすて人に物問ひ習ふこそ
智慧を需むる秘法なりけり

いふ人の高きいやしきへだてなく
唯よきことを我物にせよ

說法に心の花は開けても
その實となれる人は稀なり

世の中におそろしきものなけれども
家根のもるのと馬鹿と借金

へだてなき善き友とても朝夕に
往き來繁きはいとはれぞする

世の中をわたりくらべて今ぞしる
阿波の鳴戸に立浪もなし

雜錄 蜀山人の飲酒法

酒は飲むべし、飲むべからず、

一 節供禮義には呑む、
一 珍客あれば呑む、
一 肴あれば呑む、
一 月雪花の興あれば呑む、
一 二日醉の醒をとくには獨り呑む

其外、群飲佚遊、長夜の宴、終日飲を禁ず

童謠に曰く「おまへ其樣に酒のんで猩々にならんす下心」と、猩々よく酒のめども禽獸を離れず、人として禽獸にだにもしかざるべけんや。

ショクブン 職分 【世語】

身體を勞するあり、精神を勞するあり、農工商より官吏軍伍等千差万別なり、

談叢 橋本醫學博士の親切

先年亡くなられた橋本綱常と云ふ人は、醫學博士の肩書を有し陸軍々醫總監、日本赤十字社病院長の顯職にありながら、其職務に對して細心留意せられた方である。

或時、赤十字社病院へ一人の立ん坊（勞動者）がひどい腫物ができ行路病者としてかつぎこまれた、博士は多忙なるにも拘らず、この憐むべき立ん坊に療治を加へ用事終つて夕刻歸宅せられた、さて自宅で夕食をせられながら、さきの立ん坊の容態がよろしくなかつたので、どうも心配で仕方がない、箸を取りながら思ひ出してやまれぬので、早速書生に命じて、病院へ電話で照會した、然るに宿直の醫員が「あんな立ん坊はどうなつたか知りませぬ、多分今頃は摸樣もわるいでせうが別にかまいません」と答へたので、奮然電話口に立つて、「君は全體病人をどうゆうつもりで取扱ふのか、成程立ん坊一人位どうなつても

差支なかろうと思ふかも知れぬが、それでは醫士と云ふ職務にすまぬたらふ、俺は彼のことがどうも氣になつてならぬ、すぐゆくから其つもりで手當をしておいてくれるやう」と平生の溫厚にも似ず不親切な醫員を叱りつけ夜分馬車の支度もまたず表へ飛び出し辻車で赤十字に行き、彼の立ん坊を見まつた處果して餘程重體であつたが、博士は丁寧に治療を施し、且つ十分に看護を命ぜられたので、立ん坊は一命を助かつたとある、博士は平生子弟門下生に向ふて云はるゝやう「富豪にばかり丁寧にするのはよろしくない、醫士の本領は人間には粗末でも病氣だけは十分忠實に取り扱はねばならぬ」と、くれ〴〵誨へられたとある。

談叢 忠實なる技手

先年、亞米利加のミスシッピー河が大洪水で、其河の近所近邊は非常の水害を蒙りまして、家を流すやら、田畑をさらはれるやら、命を失ふやら、中々悲慘なものでありました から、平日でさへ多忙な電信局が、この水難の爲めに西へ東へ電報を依頼する人が多いので、なか〳〵の混雜を極めました、その混雜の中に段々水が增して來まして電信局へも水が攻めこんで來た、所が其中で一人の技手は平然として依頼して來る電信を取次いで、これを彼地此地に打電して居りましたが、猶も水は增して來るので、遂には技手の腰まで來ました、モウケ樣になつては致方がなゐと云ふので、局内の人は皆一生懸命でにげ出したけれども一人の技手は平然として事務をとつて、結局水が肩まで來た時に、いまわれしすと本局へ打電して、遂に水の爲めに溺れて死したと云ふ話がありますが、この技手の如きは自己の職務の爲めに忠實なる人と申さねばなりませぬ、自分が職務の爲めにつとめるのは、只金錢の爲めではなゐ、幾分か世の人のためにならなくてはいけなゐと云ふ觀念を以て盡さねばならぬと云ふ好箇の模範であります。

談叢 忠臣藏の寺岡平右衛門

忠臣藏の寺岡平右衛門、國家老の大星に向ひて申すやう、「千五百石御取りなさるゝ貴方樣でも、五両に三人扶持の私しめでも、つなぎました命は一つ、御恩に高下はございませぬから、お草履つかんでなりとも、御荷物かついでなりとも、敵討の御伴に召しつれられて下さりませ」と、ケ樣に申したことであります、これ職分に高下はないと云ふことの例話である。

ショジン・ショブツ 諸神諸佛 【術語】

一切の神明と佛陀とを指して――と云ふ、

談叢 子遊と膽臺滅明

孔子聖人の弟子、子遊と云ふ人が武城と云ふ處の奉行になつた、其下役に膽臺滅明と云ふものがあつたが、通常の下役なれば上官へ追從して、切々御見舞をするけれども、かの滅明はいさゝかも追從輕薄をせぬ人ゆへ、何ぞ上の御用筋があれば格別、左もなければ一年立つても上官の邸へ行かなんだ、此上官も

尋常の人ならば腹を立てるのであろうに、孔子の門人子遊と云ふ賢人なれば、膽臺滅明が折々見舞せぬのを却つて賞賛して、天晴な士ぢやと云ふて喜んだとある、同じ人間でさへ仁義の道を知つた人は、おり〳〵見舞せぬのを咎めずして、却て其方正なのを喜んだ、況んや正直を體としたまふ神々、何の追從を御受けなされうぞ、依て御文に「諸神諸佛に追從申す心をもうちすてゝ」と仰せられてある

談叢 貞玉の狂歌

藝州廣島の十日市に貞玉と云ふ人がまくは爪の畫を書て狂歌を以て賛をした、

神の地に佛のたねをまくは爪
二つにわれど一つ味ひ

と詠んだ、この歌の意は神の地とはこの日本神國のことぢや、佛のたねとは衆生が佛になるたねの南無阿彌陀佛の佛法のことぢや、この日本の神の地へ佛のたねの佛法を蒔たれば一つのまくわ瓜が出來た、このまくは瓜を二つに割たけれども、もとが一つの瓜なれば味ひは少しも異りはなかつた、此日本の神國へ佛の因となる佛法を蒔き弘めようと思召して神と佛との二つに御分れなされ、佛法嫌ひの邪見なものは現世のことから引きよせて末は佛法に引き入れたひの御慈悲から、かりに一切の神明と示現なされたれども、もとは皆淨土の如來樣である。

大綱 圓慶と八幡宮

圓慶と云ふ出家が八幡宮へ參詣致されたところが道傍に小屋があつて、小屋の門に一人の女が立つて泣いて居る、圓慶がそれを見て何故泣くぞと尋ねられたれば、女の答ふるやう、昨夜私の母が病死致しましたけれど女の身ではあり、他に賴むべき人もなければ、葬式をいたすことも出來ず、致し方なくて斯うして泣いておりますと云ふたゆへ、それは哀れなことである、此難義を見すてゝ行くべきことではないとて、晝は人目もあることゆへ其夜半ごろ、其母の死骸を負ふて野に葬つておやりなされた、それより圓慶の思はるゝには、神樣は穢を忌み玉へば此方神前に近くこと恐れありとて、其夜馬場先の小家に宿を借りて居られたが、一人の男が來て云ふやうには、貴僧は無緣のものを葬つてやられたは甚だ感心のいたり、何の忌み憚ることはないゆへに早く來られよ、物語りなど致したいと云はるゝゆへ、圓慶大に喜び玉ひて、此男は只人にあらずと思ひつゝ同道して神前に至られたれば、まだ夜明前にして通夜の人も眠つて居る、そこで圓慶が今の男に向ふて法門の義理や、義門のわからぬ所などを尋ねらるれば一々明かに說いて聞かせ玉ふ、而して其男は我が本身と釋迦佛なりと云ふて忽ち消へ失せ玉ふた、これは元亨釋書の中に出てある因緣にして、彼の春日明神の託宣に

雖レ曳二千日ノ注連一 不レ到二邪見之家一
雖二重服深厚者一 可レ到二慈悲之家一

とあるのと、つまり同じ御意なのであります

大綱 常觀の慈悲心

常觀、大和の三輪に留錫し眞言秘密の法

を修して居られた、或時吉野に參詣せんとて出られたれば、途中にて十二三の娘をかしらに三人の小供が聲を限りに泣き悲んで居る、立寄つて樣子を問ひ玉へば、娘の答ふるやう私達の母は病氣で死ました、父は遠方にゆかれて今は留守で、近所の人は病氣を嫌ふて一人も寄りつかず、二人の弟は居ることであるし、どうしたならばよかろうかと、又さめざめと泣き出した、常觀はそれを聞いて大に同情の念を起し、吉野まいりを中止して、それから其死骸を見ぐるしくないやうにして三人の小供と共に近邊の野邊に葬られた、それから三輪の方へ歸ろうとすれば身體がつかれたやうになつて少しも動かぬ、吉野の方へ向ふと身體が爽快になる、そこで不審に思ひながら吉野の方面へあゆみ、神前近くなつたからモウこゝで野宿をせうと、不淨を遠慮して大木の下にやすんでおらるゝと、一人の神官が來りて常觀に向ふて云ふやう、「貴僧が慈悲心より小供の難儀を救はれたことは、甚だ尊ひ行ひである、決して忌み嫌ひはせぬさあ〳〵此方へ」と云ふて、袖を引いて神殿の前につれてゆかれたゆへ、常觀は涙とともに神前に法施をさゝげて歸られたとある、これ神は正直の頭に宿り玉ふと云ふの例話である。

ショセイ 處世【世語】

人生に處すること即ち人間のよわたりを云ふ、人の一生は重き荷つて遠きに行くが如し、

歌 明雲僧都の劔難

三井寺の明雲僧都は頻りに自分は劔難の相はありはせぬかと苦悶して、或時人相見にこの事を尋ねたら、人相見の云ふには「貴僧にはたしかに劔難の相がある」と云はれた、そこで明雲僧都は驚いて、「どこに劔難の相があるか」と折り返して尋ねた所が、人相見が云ふには「貴僧の上には別に變つた相好もないが、第一貴僧は身に法衣をつけ、手に珠數を持つて佛の前に座つて御座る身分で、如何に考へても劔や刀に因緣はない筈であるのに、かやうに八釜しく劔難の相はないか〳〵と尋ねらるゝので、其心配が即ち劔難の相であると答へられた。

其後、本曾義仲が平家追討の時、北國から攻め上つて三井寺に宿泊しやうとしたとき、この明雲僧都が門の前に立ち塞つて、木曾の軍勢を門内に入れまいと爭ふたが、終に其時矢に當つて死なれたと云ふ事である、實際は劍難の相はなくとも、劔難の相があると信じて心配すれば、それが事實になるのかもしれぬ、衣食を如何程に貯へて居ても、若し衣食が盡きた時にはどうしやうかと、夫のみ、始終心配するなら、終には其心配の爲めに、仕事は出來ず、病氣は起ると云ふ、風情で、實際に衣食が盡きるかもしれぬ、依つて何事も皆如來の御計ひにまかせて取越苦勞をせぬのが處世の秘訣だ。

談叢 射御の達人本間資氏

本間孫四郎資氏と云ふは射御の達人にて、鹽谷判官高貞が龍馬を後醍醐天皇に進奏したる時にも、資氏は召し出されて試み乘りたる

に、飛龍の雲を動かし猛虎の山を翅る如くであつたから、見る人感激して肝を消さぬものはなかつたとある、或時門下の高弟資氏に向ふて乘馬の秘術を問ふた、資氏の云ふに、棧を過ぐるに口傳がある、これは未熟の族らには傳へ難いと云ふ、高弟は頻りに其口傳を敎へてくれよと云ふて望みますので、資氏も止むを得ず師弟乘りつれて三里ばかり遠方の谷川にかけてある棧にいたり、資氏まづ棧のもとにてユラリと馬を降り、「此處こそ大事なり我が秘術をよく見られよ」と云ひながら、馬の口を取つて徐ろに棧をわたりて再び馬に乘つた、高弟は目を離さずこれを見て奇異の思ひをなし、口傳とは如何なる邊をさして云はるゝことでありますか、一向合點がまいりませぬと云ふと、資氏の答ふるやう、此谷川のやうな小さい川なれば、たとひ棧はなくとも一鞭あてたら安く飛び越へらるゝ、況んや棧の上を乘るには何の仔細もないことぢや、されど私が今乘つて渡ると云ふと貴公に危難を敎へることになる、棧をのるばかりぢやない、軒端わたしなんど云ふ術も皆人の目を悅ばするまでの事であるから、相搆へて自今以後無用の所作を好んではなりませぬ、危き功名をせぬやうにせねばならぬ、もし止むを得ず敵の多勢に相圍まれ、のがるゝ方なきに至らば死を一途に決する事にせよ、藝術の極秘傳これまでにて侍る」とて、打つれて歸つたとある、弓馬槍劔皆身を衞る藝術であるが、もし藝術をたのみて自ら厄きに陷らば始めより藝術なきに如かずである、啻に藝術のみならず、身を修め道を行ふものは必ずこの心得がなくてはなりませぬ。

談義 高畑三河守の功名

大友義鎭の家來に高畑三河守と云ふものがあつた、或時の戰爭に一日の中に十三度敵と鎗を合はせて十三度とも功名を立てられた、戰國時代に於ては一日に三度も敵と槍を合はせたならば、特に感狀を賜はり、朱塗の槍の柄を御免になると云ふ程に尊ばれたものである、然るに一日に十三度の槍合せとは實に殊勳と申さねばならぬ、其後、人が問ふて云ふには、「あなたは一日に十三度槍を合はして、しかも皆勝ちを得て平氣にしておるとは、本來の性根が剛氣であるにもよりませうが、何か秘術でもありはしませぬか」と、尋ねると高畑三河守それを聞いて無邪氣に打笑ひながら言はれるには、何も別の仔細はないが、私が戰場に向ふ時は、勿論覺悟の前であるけれども、死生存亡の間に少しも思案を費さぬ、他の人々は戰爭の始まらぬ先から死生の運命を氣にかけて、心が騷いでおるから、まだ敵に逢はぬ先きにハヤ五六人の敵と鎗合はせをした位につかれて居る、敵を見ない先に勇氣を皷し氣力を張つて居るから、それだけで戰はぬ先きに疲れてしまう、私は敵に逢ふた時は我首を敵に取らるゝか、敵の首を我が取るか、此二つの中より外はない、しかも其二つの中、何れに決定するかは、全く天命で我力の及ぶ所でないからそこは全く天命にまかせ

て少しも思案を費さない、そこで初めは他人の樣にからりきみをせぬ故、勇氣がないやうに見へますが、實際敵に逢ふて槍を合はせるときは猛然として突きかゝるから、一槍の中に勝負がわかれて、幾度び戰ふてもさほど草臥れませぬ」と答へたそうである、ア、好漢よく兵機を解せり、彼は誠に人事を盡して天命を待つものである、取り越し苦勞をせぬ人である、さればこそ一日の中に十三度も槍を合はせて、皆勝ち盡したのであります、今我々が人生五十年の世渡りも全くこの「人事を盡して天命を待つ」と云ふ處に腹をすへて、苦樂昇沈はすべて如來にまかせ奉り、唯現世に自已の成すべき職務を盡したいと云ふ決心をせねばなりませぬ、これが如來より賜はりたる信念の餘德であります。

談叢 伏見通ひの小舟

或人、大坂から伏見通ひの夜舟にのりしに其夜は別して乘合多くして甚だ窮屈であつたされど一夜のことなれば互に堪忍して居る中一人の男が物に感じたる體にて「ア、これが人なればこそ」とつぶやきければ、傍なる人「ソレは何事ぞ」と尋ねしに、かの男答ふるやう、「この小舟に溢れる程の大勢の乘り合ひが、人なればこそ堪忍しておれ、犬ならばさぞや嚙み合ふであらふ」と云ふた、なるほど犬をそれ程よせたら大變に八釜敷ことではあるまひか、流石は人間で互に堪忍して居れば嚙み合ふ程のことはなけれども、併しながら其嚙み合ふ犬より嚙み合はぬ人間の根性が餘程おそろしい。

談叢 ゲアルグと反響

獨逸にゲアルグと云ふ小供がありましたが或日山へ運動に出かけました時、大聲にて、オーと云へば、山の向ふにも大聲にて「オー」と答へる、ゲアルグは山の奥に惡しき小供ありて口眞似をするのであろうと思ひ、口眞似をするは何者ぞと叫へば、又山の方で、口眞似をするは何者ぞと云ふ、ゲアルグは大に立腹して、人を馬鹿にすなと云ふと、山の方でも亦、人を馬鹿にすなと云ふた、ゲアルグは泣いて我家に馳せかへり、母の前で右の始末をのべ、且つ申しますやうには、口眞似をする惡しき小供を誡めてやりて下さいと云ふた之を聞いて母親はゲアルグに向ひ斯う云ひきかせました、汝は小供ゆへ山の奥に惡しき小供が居るやうに思へど、これは惡しき小供ではない反響と云ふものぢや、汝が山に向ふてオー！と云へば、それが山へ響いてオーと答へる、即ち汝の申した通り汝の耳へ聞ゐるのぢや、世の中は何事も皆この反響のあるものでありて、人に親切をつくせば人よりも亦親切にせらるゝ、人に不禮をすれば人よりも亦不禮を加へらるゝ、この反響のあると云ふことを一生忘れぬ樣にして、人には親切をつくし善意を以て交はらねばなりませぬぞと、諄々と說き示されたそうです。

談叢 米國第一の金滿家

近頃米國第一の金滿家は、ロックフエラーと云人で拾四億以上の富みを有して居るさう

なが、聞く處に依れば一ヶ年（一昨年のこと）の收益のみにても無慮壹億貳千萬圓だと申すことである、隣の寶を數へても無益な話であるが、試みに此壹億貳千萬圓の收益を一ヶ月に打算すると、壹千萬圓となり、一日に割當てると參拾參萬參千餘圓となり、又時間に割ると、晝夜通じて一時間に壹萬參千九百圓となり、一分間に貳百參拾壹圓、一秒間に參圓八拾六錢づゝ儲かる勘定である、實に大變なものではないか、一脈一呼吸に數圓宛の收益を占むるとは、銅臭黨の目からは羨ましくも亦馬鹿らしくも見ゆるであらう、然るに此米國第一の金滿家は又、米國第一の不人望家であるさうな、何故世に嫌はるゝか、云ふまでもなく守錢奴である、公共、慈善等の事業には、一切手を出さぬ、寺院や學校等の寄附事などにも取り合はぬと云ふことであるから、其不人望も理の當然である、之等を精神の貧乏と云ふ。

自體、金錢を蓄ふる旨趣は那邊にあるか、財の貴き所以は社會に利用し國家の有益に使用するにある、たとひ巨萬の金、數億の財を倉庫に充たすとも、之を有益に用ひなければ瓦礫を積むと毫も異なる處はない節儉を貴び蓄財を重んずるは無論の話であるが、其富を長ずると同時に、又使用の道を誤たず、財の本分を全うするのが要である、唯殖すを能として散らす道を知らぬ者は必ず世の譏りを免れない、而して譏りの聲は金の嵩に應じて發るものである、先づ百萬圓を孤蓄すれば必ず百萬圓だけの譏りがある、壹千萬圓は壹千萬たけ譏りの聲が高くなる。

談叢 處世の秘訣

世に處して足らざるを憂へては限りがない この足らざるに安んずる所が卽ち貧を學するのである。

上みれば及ばぬことの多かりき
笠きてくらせ人の世の中

この道歌の心を以て世を渡れば何も悲むべきことはない、しかし大きな笠を着て下ばかり見ておると、進歩と云ものもなければ、發達と云ふこともない、そこで、

下見れば我にまさりしものもなし
笠とりて見よ空の高さを

と、笠をぬぎすてねばならぬ、こゝの呼吸をよく心得てゆくのが世に處するの秘訣ぢや、上をみれば足らざるを憂へ、下を見れば姑息に安んず、こゝの心得が肝要ぢや。

歌話 顯輔朝臣と鏡

白河院の御宇、左京の太夫顯輔と云ふ人があつたが、或人の讒言によつて無實の罪に處せられ遂に免官となつたのである、顯輔は身の不運をなげいて、氣色も快くなかつたが、フト思ひ出したのは、北野の天滿宮でさへ無實の罪を被られたのであるから、此の神樣に祈願をかけて、無實の罪を晴らさうと、それから大な鏡を棒げ鏡臺のうらに、

身をつみて照し納めよ十寸鏡
誰いつはりし曇りあらすな

と云ふ歌を書いて、一心に祈つたが、歌の德

であつたか、身の曇も隈なくはれて、元の如く召仕はれ、追々昇進せられたといふことである。

歌話 鳥語中の訓言

鳥に佛法僧と名くるものありて、佛法僧と唱ふるとて、消閑雑記に左の歌を載せたり。

我國のみのりのみちのひろければ
　鳥もとなふる佛法僧かな

又、古來、鶯が法華經を囀づるとて、左の如き歌あり、

鶯の春の序品になきしより
　一天四海皆歸妙法

今、此法華經に就きて、左の歌を心に浮べたり。

鶯が法華經をとくといふならば、
雀は忠々、鴉は孝々、

雀鴉も忠孝を說く

果して然らば、我人は、朝起きて雀聲を聞く毎に、忠を思ひ、晚に歸りて鴉聲を聞く毎に孝を思ひ、以て日夜忠孝を忘れざらんことを期すべし、これ處世上第一の心懸けである。

古語 誠は天の道なり之を誠にするは人の道なり。

誠の字は、言と成との二字を合せたる文字にして、言語の成就したる意である、言語の成就とは、言語の上にて一たび發したることを、毫も違ふことなく、其通りに實行したる所が、成就と申すものぢや、例へば約束の實行の如き、すべて言行の一致するを云ふのである、又此成就には、おのづから安全の意を

含んで居る、假りに城といふ文字を見るに、土と成との二字を合せてある、卽はち土の成就したる意味ぢや、土の成就とは、土を積み上げて、身を護し敵を防ぐことの出來るやうになりたる所を指して申すのぢや、すべて方法と目的との相合したることを、成就といふ斯くして城が出來上りたるときは、一身一家或は一國が、安全になる、之と同じく、言行一致して、約束の成就したるときは、人の信用を得、世の信任を受け、身も心も共に安全になるに相違ない、故に城は、國家の固めにして、誠は一身の固めと心得て宜い、卽ち誠を以て一身の城壁なりと考へ、其中に籠城すれば、旅順、浦鹽の砲臺よりも、尙ほ堅固安全にして、如何なる勁敵たりとも、犯すことも攻むることも出來ぬ、實に安全至極である是れは卽ち、言語の成就といふ譯ぢや。

古語 智人治心不治境、
　愚人治境不治心、

これは靈峯の御言である、智惠のある人は自分の心を直して向ふの境界を直さすと云ふことで、喩へてみると、矢があたらずはねらひの方を改めるので、的の方に手を出すではなかと云ふのと同じ事ぢや、すべて世の中のことは己れが心さへ持直してかゝれば世間に心のあはぬものはない道理である、愚人は之れに反對して心を直すことを知らずと云ふの御戒めぢや。

歌 埋火のあたりのどかに兄弟の
　圓居せし夜ぞたのしかりける

火鉢圍みて親子兄弟の圓居して、父は教訓となるべき興味多き話、殊に御佛の惠みを喜べるものは難有き御慈悲の話、さては昔の高僧知識の御苦勞の事など話し、兄は學問上の面白き事より近時の珍敷き事など話し、弟は學校にてきゝたる話をくりかへし、又は今日の遊戯に於ける出來事などいと仰々しく語る無邪氣なる狀況などを見は、如何なる人々も微笑であろう。

歌 もろひとの花見ん人のはじめとて
けふはおもひも開けぬるかな

元日と云ふ題にて讀みたる古人の歌、陽暦の今は未だ春ならぬ冬の空であれど、年が改まりますれば隨ひて我が心も改まるもので、上流社會のことは論の外として、尋常つねなみの人にもせよ、元日といへば今日は大切な四方拜の御日柄、せめて愼しみ守りて、此日を送ろうと云ふ考はあろうと想はれます、今こゝに申陳べんとするは、その元日の心得を以て、モウ一日〳〵と推しのべ〳〵して、三百六十五日に至られんことを希ふのであります。

歌 船と水なかよくてこそ世はわたれ
心のあらき波風ぞうき

世は海なり、身は船なり、志は揖なり、揖のとりやうが惡しければ船はくつがへる、體は船なり、心は水なり、水よく船を浮めて、心に波を起すべからず。

歌 世渡りは狂言綺語と同じこと
上々も役、下々も役

車を引くものがあれば乘るものもある、雇はるゝものがあれば雇ふものもある、米を作つて賣るものがあれは買つて食ふものもある車に乘るからゐらいとも限らず、引くからつまらぬとは申されぬ、又米を買ふから貴くて作るから賤しいと云ふ道理はない、人間の高下は其して居る職業に依て定まるものでなく其職分をつくす、心がけ一つで定まるものである。

歌 ふけぬとてかゝげ添へずは殘る夜の
なお暗からん窓の燈火

世がふけたからと云ふて燈心も添へず油をさゝなんたなら、三更四更と云ふ頃には燈火が消へてしまつて眞暗闇になるであろうからたとひ夜がふけたと云ふても、其儘に打ちやつてはならぬと云ふ意で、小澤蘆庵の詠まれた歌である、年が老ひたからと云ふて學ばなんだならば、後半世もやはり馬鹿でくらさねばならぬから、「八十の手習ひ」と云はれてもよい、教を聞き道を學ぶと云ふことには、一生懸命に力を盡くさねばなりませぬ。

歌 虎にのり片破舟にのるとても
人の口端に乘るな世の人

恐ろしい虎に乘つたり、危き片破舟にのるためしはあろうとも他人の口車にのるものではないと云ふ教訓です、これは荒木田先生の世の中百首の隨一でありますが、我等の座右の銘として深く味はねばならぬことてある。

歌 今ぞしる世々を心に照らしつゝ
人を鏡といひしまことを

これは了然の歌である、人の心は昇つては聖賢と等しかるべく、降ては兇賊惡漢と何の差なきに至るものなれば、人の善を見ては傚はんことを思ひ、人の惡を見ては自ら戒め、以て修養の資料としたらば、善惡吉凶、皆我心を養ふに足ると云ふことを謳ふたのである

寓喩 輕業師

輕業師が高い空中へ一條の繩を張つておいて、傘一本を手にして其上を氣樂そうに歩いて行く、人から見たらば是ほど危險千萬なことはなゐ、逆さまに落ちたなら大怪我をせねばならぬ、しかし輕業師にとつてこれが何ともなゐ、平氣にあるいて、而も落ちる氣遣ひのないのは、それは何故であるかと云ふに、中心を得て居るからである、身體がぶら〳〵と動いても傾いても、どんなにあぶなそうでも、いつも中心にすはつて居るから決して落ちる氣づかいはない、今私共の世渡はこの通りである、誠に此世の中は何につけても危いことばかりでして、何か一つ事業でも企てるには隨分飛はなれたこともせねばならぬ、仕事が大きければ、大きいほど、身分が高ければ高いほど、一條の繩の上を歩く輕業師の如く、それは〳〵あぶないことでありますが、しかし心にチャント中心が得られて居さへすれば、これほどたしかなことはなゐ安心なことはなゐ、如何にぐら〳〵しても傾いても、心だけは中心にゆりすはつて居りますから、少しも心配なく安心していることが出來るのであります。

寓喩 順風と逆風

我々の世渡りは船に乘つて海上を渡航するが如くで、運命は恰も風の如くである、若し順風に帆をまかせて行く時は難なく五十里百里と進むことが出來る、されどもし順風が一轉して逆風となるときは、折角漕きすゝみたる行路をも暫時の間に退けられ、又は五里霧中に迷はされてしまふ、私共の處世に於ても幸運は順風である、又不運は逆風である、其間に於て勉强とか勞働とか忍耐とかは、船を漕ぐ力のやうなものである、もし順風を得、幸運に逢へば舵は直さずとも船は漕がずともひとりでに彼岸の目的地に達することが出來るのです、そこで私共はこの世の大海へ船を乘り出したからは、モウ運命にまかせ天命に安んじて諦めて行くより外はなゐ、佛敎ではこれを前世の業報と云ひ、過去の約束と云ふて居る、此世のことは何事も過去の業報と諦めるより外はなゐのです。

寓喩 虱と蚤

一人の座禪をする比丘がありまして、始終林の中で座禪をして居ましたが、虱に啖まれるのを憂ひまして虱と約束し、おれが座禪中は貴樣も啖むのを休め、其代り座禪をせぬときは勝手に食へと云ふことにしました、其後一疋の蚤がのこ〳〵出て來て虱を見「お前は何故そんなに肥つて居るのか」と聞きますと虱が云ふには「おれは主人と約束して、時節々々に飲み食ひするから此通りである」と申しました、そこで蚤が「おれも其法に習ふ」

と云ふから、勝手にせよと虱が許しました、所が蚤は血と肉との香ばしいのに堪らなくなつて無暗に食ひましたから、座禪比丘も苦痛に堪へませず、遂に衣を脱いで火の中へ投げ入れました、これは報恩經に出ておる寓話である、私はこの寓話は「規律ある生活は幸である、されども彼の貪りて飽くことを知らぬものは禍である」と云ふことの教訓であろうと思ふ。

格言 辛苦の事業は卓絶の才に進む道路なり

勝海舟夙に長崎に遊びて西洋式の兵術を學ばしんとし軍艦に乘て實地の研究をなせしが往々危難に瀕せしことありといふ、業成りて江戸に歸りし後も孜々として兵學を修めて怠らず、常に良書に乏しきを慨嘆せり、一日某街を過ぎて新刊の兵書を見、其價を問へば五拾圓なりといふ、海舟は餓鬼の珍味に逢へるか如く、心中暗に垂涎に耐へざりしも、當時猶貧困にてありければ、之を購ふの力なく、さりとて、あたら奇寶を他人に奪はるゝも殘念なりと思ひ、百方奔走して漸く五拾圓を調へて書肆に到り、前日の書を買はんとせしに早已に見へず、海舟の失望遺らんかたなく、何人か買ひしと問ひしに、四ッ谷大番町の與力某なりと答へければ直ちに路を轉じて四ッ谷に至り、與力某を訪ふて懇懃に其情を陳し兵書を讓らんことを請ふ、某聽かず、更に借覽を請ひしも亦許さず、海舟曰く、晝間は閲覽の爲め、足下に必用ならんも、夜間寢に就きたる後は、之を割愛するに妨げなかるべしと、與力某は海舟の强請に驚き、言ひけるには、毎夜寢に就きたる後は要なし、然れども室外へ出すことは一歩も許し難しと、海舟大に喜び、翌夜より通學を始めたり、當時海舟は本所錦絲堀町に住みしか、四ッ谷大番町を距ること二里許りなり、左れど大雨盆を傾く夏の夜も、飛雪面を打つ冬の夕も、定刻に往きて定刻に歸り、未だ曾て一日も怠らず、其苦辛勉勵のほどは實に名狀す可らざりき、半歳の後、遂に八卷の兵書を寫し了り、主人には厚く禮を述べ、且つ質すに書中二三不審の點を以てせしかば主人は大に驚き、足下の勤勉と足下の忍耐には、小人實に感服せり、且つ小人は騰寫の勞もなくして足下の通學に及ばざるに、誠に耻づべきの甚しきことなり、小人は至寶を藏するも又何の益するところなし、請ふ此書を以て足下に呈せんと言ひければ、海舟は已に手寫の書一部あればとて固辭すれども聽かず、遂に之を受けて歸りけり後故ありて手寫の書を賣りけるに、參拾圓を得たりといふ、嗚呼功名富貴は妄りに來るものにあらず、海舟の立身出世せしは怪むに足らざるなり。

格言 了解は風味を生ず

了解は風味を生ずとは、西洋の諺である了解とは、理の分るといふことで、書物を看て能く了解したといひ、手紙の返詞を書ひて御書面之趣了解致候といふが如き、すべて譯の分るといふところに用ゆる詞である、風味とは、甘ひとか辛ひとかいふ尋常の味の外

に、一種言ふべからざる高尚にして、微妙なる味の存するものあるをいふ、甘ひとか辛ひとかいふは、皮相の味である、如何なる食物にても、皮相の味の外に、高尚微妙なる味の存在てをる、是れその物に於ける味の眞相にして、所謂風味なるものである、而してその眞の味たる風味は、了解せざれば知れざるものゆゑ、了解は風味を生ずとはいはれたのである。

食物の風味、風月堂の菓子は、甘ひといふが主意ではあるまひ、更科の蕎麥は、口ざわりが好ひといふが目的ではあるまひ、その甘ひとか口ざわりが好ひとかいふ皮相の感じの外に、別に必ず高尚な微妙な味がある、さればその味は、どんな味であるかといへば、何ともいへなひ、強ひて言へといはゞ、曰く言ひ難しといふより外に、いひやうのなひもの、是れが卽ちその菓子や蕎麥の風味である菓子や蕎麥の如きは、皮相の味のみにても隨分人に好まるゝものなれば、深くその風味を探らずともよひが、皮相の味の好からざる、納豆の如き、雲丹の如き、或は海草の如き、漬物の如きは、是非ともその內に含める風味を探り出さねばならぬ、若しこれを探らずして、その物に味なしといふは、その物の味なきにあらずして、自らその味を了解せざるの愚なるがゆゑである。

書畫草木等の風味、眞黑き古書、その墨痕に於てなんの美なるところがある、疎畧なる俳畫、その紙幅の中になんの妙なるところがある、然れども之を好むところの人が、多くの金を出しても、尙これを求めて止まざるものは、その皮相に見ゆる字形畫影の外に、言ふべかちざる面白き處、樂しき所がある、その面白き處、樂しき處のもの、是れその書畫に於ける風味である、又一株の萬年青素人これを見れば、五厘の葱と異なることなく、一朶の寒梅、俗客これを折れば、一錢の薪にも若かざるか如きも、而れども、これを愛する所の人にとりては、千金にも代へられじと思ふもの、是れその草木に存する風味を感じ得たるが故ではなひか、その他、茶人の茶に於ける、詩人の詩に於ける、或は刀劍を愛するの人、古器を弄ぶの人、他人の見て以て怪むほどにまで、之を愛し之を樂みて措かざるものは、その物の眞相を了解して、これが風味を領得せるがゆゑである。

以上の例によりて、總ての物事を考ふれば何れの物にも、如何なることにも、多少の風味の存せざるはなし、然るに、その風味にして、人に利あるものと、人に害あるものとの別あれば、吾人はそのこれを求むる上に於て、尤も注意せねばならぬ彼飲食物の風味、或は遊藝賭博等の風味は、隨分世人の好む所なれども、此等の風味は、これを求むるに就て、多くの費用を要するのみならず、往々我身に害を及ぼすことあり費用を要せずして、利益あり快樂の多くあるものは、德義上家業上に存ずる風味である。

徳義上の風味、東漢の東平王蒼は、皇武帝の第三子なり、ある時、京都に上りて孝明皇帝に御會ひ申せし砌、皇帝は色々御物語の末卿は鄙邑に在りて平生何を樂とせるやと問ひたまひしに、東平王はその御尋に對して臣に諸有の善行、みな臣の樂であると御答へ申した、又美濃の國竹鼻村に佐吉といへる佛敎信者がありた、此人は平生能く勉强して儉約な暮をなし、毫しも奢り貪るなどのことがなかつた、或人、佐吉に問ふて曰ふやう、人にはみな多少の樂ありて、家業の勞を慰めるものである、汝の樂は何であるかと、佐吉之れに答へて余には多くの樂がある、其内、佛前に御禮をすること、老母の用事を辨ずることが、第一の樂であるといはれた、此の二人の如きは、善行の眞味を了解せるがゆゑ、其の日々の善行と、悉く自分の何よりの樂となりたのである。

農工商の風味、彼の農家の主人が、朝早く起きて未面を洗はざる前に、田畠の畔に出でゝ、其作物の生ひ立ちたるを眺めて得々たるもの、その間に面白き風味のあるが故である又商人が朝夕忙がはしき家業の爲めに、奔走して倦まざるのみならず、人あり之れに向つて、御忙がしふ御座りましやうといひかくれば、ありがとう御座りますと謝辭を述ぶる、その商人の顏貞の、いかにもうれしげに見ゆるもの、是れその商業上の風味を了解せられて、面白く感ずるが故である、又細工人が一つの器を造りて、之を左に眺め右に視て、

轉た喜ばしき姿ある、是れも亦その工業上の風味を了解して樂に堪へざるものあるが故であらふ。

俚諺 短氣は損氣

岩崎といへば日本第一の金滿家であるが其岩崎も、始めから金滿家ではなくて、先祖、彌太郎と云ふ人の時代には種々の艱難が出て來たので、さすが豪膽の彌太郎も煩悶苦痛に堪へ兼て短刀を引きぬき、將に切腹せんとする折しも、一番々頭の川田小一郎が馳せ來つていきなり其手をおさへて、萬事氣は長く心は大きく持ちたまへ、待てば甘露の日和と云ふこともありますれば……、もし强いて死にたいと云ふならば、この小一郎に暫しの間御命を預けて下されと、泣く〳〵短刀を奪い取つた、それから一月ばかりたつと社運大に盛大を來し、日本一等の金滿家となられたので、小一郎が短刀を奪い取る油繪を岩崎家では今でも奥の間に掲けておいて其恩を感謝しつゝあるそうです、又、正行の自害を母が止めなんだならば、いかで大功を天下に立てゝ忠臣孝子の鑑と云はれませうぞ、命あつてのもの種、畑あつての芋種ですから、短氣を起して死ぬるなどは馬鹿の頂上と云はねばなりませぬ。

雜錄 ロスチャイルド氏の心得書

一 事務について瑣細の末まで仔細に吟味すべき事、

二 萬事に敏捷なるべし、

三 熟考は長くして決斷は速にすべし

四　斷然勇往前進すべし、
五　困難を忍耐すべし、
六　人生の競爭に勇なるべし、
七　誠實を神聖なるものとして守るべし
八　商賣上の虚言を吐くべからず、
九　無用の交際をなさゞる事、
十　有を有とし無き風を粧ひ飾るべからず、
十一　負債は速に償却すべし、
十二　時機に臨んで金を一擧に睹するの道を知るべし、
十三　大酒をなすべからず、
十四　時間をよろしく用ゆべし、
十五　運に依頼せざるべし、
十六　何人にも慇懃なるべし、
十七　決して失望せざるべし、
十八　刻苦勉勵すべし、
十九　よろしく遊ぶべし、

以上

雜錄　處世に關する俳句

角のある中は打たるゝ火打石
角とれて打つ人もなし火打石
實の入れば稻もじぎする田面かな
實の入らぬ稻はかへりて力味けり
借りものと思へば重し傘の雪
我がものと思へば輕し傘の雪
去られても闇に見にくる幟かな
思ふまじ見まじとすれど我家哉
早乙女や泣く子の方へ植へて行く
子の親の手笠いとはぬ時雨かな

負ふた子の髪なぶらるゝ暑さ哉

鳴かぬなら殺してしまへ時鳥（秀吉）
鳴かぬなら鳴してみせう時鳥（智者）
鳴かぬなら鳴くまで待ふ時鳥（辛抱もの）
鳴かぬなら鳥屋へはらへ時鳥（儉約もの）

雜錄　衣食住の戒め

衣食住をおごる者は三惡道の種なり、美服を好むは畜生の毛色を愛して姪するが如し、

人ごとに着るや狐の皮ごろも
化け化かされてわたる世の中

酒肉を好み美食を欲し麁言を云ひ口の愼みなきは餓鬼の因なり、

むさぼりて人の生血を吸ひすはれ
炎の食にほそりゆく咽

有るが上にもほしく、身の程よきを知らず、家藏をたてゝ多く貯ふるは地獄の業なり、

落ちてゆく奈落の底をのぞき見ん
いかほど深き慾の穴ぞと
（「ふくら雀」）

雜錄　福の神と貧乏神

福の神曰く、
一に一切すなをにて、
二ににうわつ慈悲ふかく、
三にさからひ諍はず、
四つよしあしわきまへて、
五ついつゝの人の道、
六つ無理せず無理いはず、
七つなかよく交れば、
八つやうちがうれしがり、
九つ子たちや孫までも、

十で富んでさかえた、
貧乏神の曰く、
一にいぢりきたのふて、
二に苦かい顔つきで、
三に先き借りばかりして、
四つ欲がふかさに、
五ついつもたばかりて、
六つむごいことしらず、
七つなさけがないゆへに、
八つ家内がばた〳〵と、
九つ小言のたへ間なく、
十でとんと仕舞ふた、（「教訓我守」）

雑録　伊勢貞丈の教訓

一　衣とは衣服の事なり、衣服は見苦しきはたか身を隠くす爲めのものなり、わろき衣服にても、はだか身をさへかくせば事足るなり、されば其身の分限、其位置相應の衣服を着すべし、身分不相應に結搆なる衣服を着するは、おごりなり。

一　食とは食物なり、食は命をつなぐ爲めのものなり、あじなき食にても、ひだるくなく命さへつなげは事足るなり、うまき物を好みて、金銀を費し、飲食を專らにする、たはけなる事なり、又養生の爲めにもならざるなり、奢りなり。

一　住とは住居の事なり家は雨風をふせぐ爲めのものなり、狹く見苦しき家にても雨風さへしのげば事たるなり、されば其身の程々につけて相應に家をつくるべし、不相應に結搆につくるは奢りなり。

右衣食住の本意を知つて奢るべからず、此三つは必ずおごりたかるものなり、これにて事たると云ふことを忘るべからず（「貞丈家訓」）

雑録　伊勢論語

伊勢の神主荒木田守武、大永五年の頃、一夜に百首の歌を詠じて子弟への庭訓となしぬ、一首毎に世間の二字をおきたる故「世の中百首」と題號す、世に「伊勢論語」とも稱す、言葉つき鄙俚に近きゆへ、愚かなる兒女賤しき男女の耳に入りやすく、自ら教訓となること多し、中にもよろしきを採りて爰に錄す、

世の中の親に孝ある人はたゞ
　何につけてもたのもしきかな
世の中はものゝ稽古をするがなる
　富士の高根に名をあげよ人
慳貪に善をもなさずおくりなば
　思ふまゝにはあらじ世の中
おもふべきものは身よりも名なりけり
　名は末代の人の世の中
世の中に人の恩をば恩として
　我がする恩ば恩とおもふな
世の中にせまじきものは我はがほ
　そらごとぬすみ勝負いさかひ

雑録　五福傳授

德へり下り神儒佛をば尊みて
　よろづ誠によろづ堪忍

福　腹たてず家内中よりおごりなく
　家職大切、實義大切

祿　おこたらずつとめ〳〵て眞實に
　うら表なく今日を大事に

壽　樂をせず酒色　財色　ふかくせず
　灸治鞠起足ることを知れ

子孫金玉はたからにあらず善心を
　つむ陰德に子孫榮ふる

雜錄

七福神の詠歌

大黑天の詠

忠孝の打出の槌に堪忍の
　袋をたもつ人をめぐまん

恵比須の詠

目でたいと世々を守らん正直に
　ゆがまぬ釣のすぐな人をば

福祿壽の詠

神儒佛尊む人ぞ福祿壽
　長くかしらにやとり守らん

布袋和尙の詠

にこ〳〵と腹をば立てずむつまじく
　家内和合の人を守らん

辨財天の詠

むりをせず理非明白に辨ふる
　人に寶をめぐみあたへん

壽老人の詠

慈悲ふかく陰德をなすめい〳〵の
　子孫に永く壽福あたへん

毘沙門天の詠

欲惡の鬼を殺して如意寶珠
　みがく人を常に守らん（「あつめ草」）

シヨブツシサ　諸佛咨差　【術語】

第十七願を指す、諸佛に我が名をほめられずば正覺を成らじとの御誓なり、

譬喩　藥嫌ひの大病人

九死一生の大病人、この上なしの藥きらいたゞの一口も藥を呑ふと云はぬ、そこで醫者がとくと診察して藥をあわせ、其藥の功能をほめて、はたに居る看病人にも、其藥の功能をほめさせる、自分の調合した藥をほめて、介抱人にもほめさせるのは、自慢の樣ぢやが自慢ぢやなゐ、藥きらいの大病人が本復させてやりたひばがりぢや、各々方や、我々も、無明業障の大病人、助かる緣の少しもなゐ、必墮無間の身でありながら、六字の藥をいやがりて、逃まはることにかゝりはて、一度や二度の御きかせでは、中々うけつけかねるゆへ、十方諸佛の看病人に、六字の功能ほめさせて、佛法ぎらいな大病人に、一度は六字の藥を呑ませ、明信佛智と本腹させて、往生させにやおくまいとある思召ぢや、藥の功能をほめさせるのは、いやがる病人に呑ませたいばかり、諸佛に我が名をほめさせたいと、願はせられた御本意は、各方や我々に、六字の名號のゆはれを聞かせてやりたいばかりぢやと仰せられる、併し如何程醫者が呑めよ〳〵と勸めても、介抱人はほめて聞かせても、呑にくい藥なら仕方はなゐが、もとより藥きらいと云ふことは、御醫者の方に承知ぢやゆへどんな者でも呑める樣、一粒の丸藥に仕立て上げ、白湯で一口呑むばかりなら、それを呑

ぬ道理はなゐ、なんぼ阿彌陀如來の勅命でも恒沙の諸佛の證誠でも、直らぬ心を直せとか出來ぬ修行をせよとか云ふ、根機にかなわぬ御法りなら、いたゝかれぬも道理ぢやが、醫王の佛に御如才はなゐ、惡人女人の心の中、骨の髓まで見ぬかせられ、御成就なされた御六字ゆへ、何にも六ヶ敷ことのなゐ、たのむばかりで助けると云ふ、機法一體の六字の名號丸藥は白湯で、丸呑み、南無阿彌陀佛の妙藥は、善知識の御教化より、耳から心の底へかゝる機までもと聞き開き、助け玉へとたのむばかりが南無阿彌陀佛丸もらいぢやぞよと御意あらせらるゝ、しかし藥のきらいなやつは、病氣のこゝとを云ふことにかゝりはてゝ藥を呑まぬで病が直らぬ、御前方も病の小言を云ふておりはせぬか、頭痛がするの眩暈がするの、胸がつかへるのと云より急いで藥を呑むがよい、どうも機の扱ひがとれ兼るの、薄紙一重がはれ兼るのと、胸の穿鑿にかゝり果て、顏をしかめて居ろうより、彼尊の御意を頂こうぞや、たのまれにや聞け、晴れにや聞け、たのむ心は南無の二字、助かる法は阿彌陀佛、疑はらすは光明の力、一から十まで手ぬかりなふ六字一つにたゝみ込み、聞き得る信の一念で、事たる樣に御成就ゆへ、いらぬ病氣の世話やめて、直す六字を頂けよと仰せられる。

譬喩 腕白小供と下女下男

至つて腕白な小供を下女や下男が坊樣々々と云ふて大切にするは何の故か、下女や下男は子供に恩なければ、義理もない、それに子供の守りをするは何故ぞといへば、其子供の親から下女や下男か給金をもろうて居るからぢや、そうしてみると小供の手前では大事にしてくれる下女や下男の恩よりは、それに給金を與へてくれた親の恩を喜ばねばならぬのぢや、今もそれと同じく、邪見な私を十方諸佛が守つて下さるは第十七願の給金をもろうて御座るからぢや、さすれば諸佛の恩よりは第十七願を立てゝ下された彌陀の御恩を喜ばねばならぬ。

シラカワラクオウ 白河樂翁 【人名】

姓は松平、名は定信、田安宗武の七子にして、出でゝ白河城主松平定邦の嗣となる、天明三年封を繼ぎて越中守となり、同七年老中となり侍從に任ぜらる、文化九年致仕して樂翁と號し、文政十二年卒す、年七十二、

談義 養子の心得

松平定信と云ふ人は八代將軍吉宗公の孫にして、白河樂翁と稱し、學德幷に秀で賢明の聞ある高き方でありた、この人は松平定邦と云ふ人の養子となりて松平家を襲がれたのである、或時一人の客が樂翁公の許にまいりて申す樣、「拙者は此度さる處へ養子にまいるのでござるが、貴下は御養子の身として幕府樞要の地位を占められ、國家の大政を料理なさるゝ方でありますから、定めて御辛勞も容易ならぬことでありませうが、一體どうゆう方針をとりてゆけば貴下の樣に御都合よくゆきますか、拙者も養子となるにつき、其心得方を伺ひとう存じますから、どうか其心得方を御指圖下されたい」と申した、すると樂翁公、

それはイトやすいことである、此方で實子養子と差別をつけるから、先方も自然に隔てをする樣になるのである、此方に其隔てさへせねば先方も其隔てをせぬ、されば養實無差別と云ふことが肝要である」と申されたとのことである、取捨愛憎の念を去り、同體平等になりさへすれば、家庭はキット圓滿におさまりがつくものであります。

談叢 樂翁と其夫人

樂翁、十八歳の時に白河の城主越中守の養子になられたのであるが、この白河と云ふは誠に土地がわるい上に、其越中守の御姫樣乃ち樂翁公の夫人にならるゝ方が身體虛弱で殊に容貌の醜い人であつたから、他の者は心配したけれども、公は少しもそんなことに擔はず、其所を相續なされて、夫婦中も誠に睦じく、十九歳の時に難波江と云ふ書物をかいて夫人に贈られたと云ふこともある、所が夫人は公よりも先きに亡くなられたが、其死なるゝ時に公は夫人に向つて「何か遺言はないか」と尋ねられたら、夫人の云はるゝやう、「貴方はあまり御實明にわたらせらるゝから私が亡くなつた後は誠に心配であります」と申されたそうです、それで公もこの遺言に深く感じて生涯身を慎まれたと云ふことである又この夫人の二十三回の忌辰に當りて、公が手向られた歌に、

年經てもいかでわすれんくみみてし
野中の水の深き心を

とある、この和歌によりて見ても其御夫婦の

交情の如何に睦まじかつたと云ふことがわかるでありませう。

談叢 樂翁の儉德

樂翁、七十になられた時、或人から「何か差上たふござるが何がよろしふござりますかと尋ねた、すると公は、天鵝絨の机かけが欲しいと云はれた、それから早速調へて差上たら大變に悅んでこれで、冬でも字を寫すことが出來る」と云はれた、してみるとそれまでは何も掛けずに居られたのであろう。

又、公は少しの間でも暇のある時には、手を空くして居ることはない、用のない時は必ず紙撚を造つて居つた、それで其紙撚でいろ〳〵細工せられたものが今殘つておる。

又、諸方から來た手紙の端の白い處を皆切りとらせて繼ぎ合せて障子を張つたと云ふことである。

又、公は舊物やら廢材をあつめて浴恩園の内に不捨庵と云ふを設けられた、其時の歌に

世のすつる物をも捨てぬ庵なれば
世のすてぬものいかで捨つべき

以上の事實に徵して考ふれば、公の儉德を伺ひ知ることが出來るであろう。

歌話 浴恩園の燒失

文政七年に神田佐久間町から火が出て、樂翁公の隱居所たる浴恩園の立派な御庭が燒けた、其御庭は公の意匠を凝らしてつくられたので樹木の如きも皆苗から植へて育てられたのであるから、無落膽せられておるであろうと、家族の方々は皆心配しておられたれど、

公はそんな氣色は少しもなくて、此大火に我が家が燒けたが、さぞ番をして居る士は辛いことであらうと云はれた、それから下屋敷にかへりて歌が出來た、

月花もしひて心にとめざりし
　ゆくへを今日の空に見るかな

又、狂歌に、

田樂をくし〳〵思ふ心から
　やけた上にも味噌つくるかな

どちらも味つてみると、此上ない諷詠である

逸話 樂翁と箱根の關

樂翁、箱根の嶺にかゝり關門を過ぐるとき役人皆座を下りて平伏す、或役人仰ぎ見て、「關法にて候ぞ御笠を取らるべし」と云へり、樂翁乃ち笠を手にして過ぎ、頓に使をはせて「われ笠のまゝにて關門を過ぎんとせしは大なる辟事なり、さるにも子がよく法を守り顯貴の爲めに之を曲げざりしことの健氣さよ」と、大に之を賞讃せられたとある、顯貴の爲めに恐れずして咎めたる役人も大に賞すべく又之を容れて非を改められたる樂翁の雅量もともに後世に傳ふべきことである。

雜錄 樂翁の教訓

樂翁は十一代將軍家齊公の輔佐として寛政の改革を斷行し、幕府中興の美を致し、退隱して樂翁と號し風月に優遊せり、政治上の功蹟は論なく、其品性詞藻も亦一代に卓出するを見る、その教訓に曰く、

寧靜　是養レ心第一法
讀書　是廣レ智第一法

含容　是待レ人第一法
安詳　是應レ事第一法
存厚　是召レ福第一法
謹謙　是保レ身第一法
勤儉　是治レ生第一法
愼交　是遠レ害第一法
知足　是享レ樂第一法
寡慾　是延レ壽第一法

ジリキ　自力　【術語】

自ら願を發し、行を修して成佛得脫を期するを云ふ、

因緣 畫像の御本尊

一人の薄德なる僧がありたが、年忌佛事に招いてくれる人もなく法話の招きに預かることもなく、それか爲め糊口に差支へて、何とかして糊口を凌ぎたいと思ふ處から、大津八丁の道端にさゝやかなる小屋を立てゝ、草鞋をつくりてそれを雲助などに賣りて細き烟を立てゝおられたと云ふことぢや、處が或人が其樣を見て、小屋の中に何もなかつたゆへ、坊主が佛樣を持たると云ふは誠に不愍なものぢやと思ふて、版で摺つた阿彌陀佛の像を一幅持つて來てそれを小屋の中へかけてくれたと云ふことである、すると其僧が一首の歌をかいて、彌陀の繪像の側に張りつけた、其歌に。

せまけれど宿をかすぞへ阿彌陀殿
　後生たのむと思ひたまひぞ

と書いたと云ふことぢや、これが自力教の識見であります。

因緣 智覺禪師と修行者

智覺禪師と云ふ大德が山中を御通りなさるゝ時、日が暮れて居たゆへ、今夜はこゝに夜を明かそうと思召して木の根を枕にして寢てござりたれば、遙か谷底で人の泣き叫ぶ聲がする、何事であろうかと耳をすまして御聞なされたれば、やれ怖ろしや日頃たくわへた寶をみな奪ひ取られた、悔しや悲しやと泣き叫ぶ、そこで智覺禪師、これは追剝にでも遇ふたものと見ゑる、せめて言の力にてもなりてやらんと、聲をしるべに谷底へ下りて御覽なされたれば、六十ばかりの老僧が破れた袈裟衣をきて石の上にすわりてさめ〴〵と泣いて居る、そこで禪師が「貴僧は追剝にても遇はれたか、怪我はせられなんだか」と御尋ねなされた、其時彼の老僧が涙ながらに申すには

「我は妻子に別れ家をすてゝ佛道修行をすることこゝに三十年、專ら觀念に心をこらして居つたが、今夜觀念の中にチラリト故郷の事を思ひ出し、過ぎし妻や小供の事を思ひ出したれば忘れんとすれど忘れられず、捨てんとすれど捨てられず、故に三十年貯へた菩提の寶を皆煩惱の賊の爲めに取られてしまいました、それが悔しさ殘念さに泣き悲んで居たのでござる」と申された故、禪師もあはれに思召して煩惱卽菩提の道理を御勸化なされたと云ふことがある、自力の菩提心は皆かように煩惱の爲めに動亂せらるゝ。

ジリリタ 自利々他 【佛語】

佛所說の敎に從ふて如說に修行し證果を得るは自利なり、人をして菩提心を發さしめ遂に得證せしむるは利他なり、

歌 小夜ふけて衣して打つ音きけば
急がぬ人も寢られざりけり

長き秋の夜のふくるまで、砧をうつて冬着る衣服の用意をする音をきくときは、曾て冬のこしらへなくて油斷しておる人も、心にかゝりて寢られぬやうになり、おのづからさしいそぎて我も來る冬の用意をする心がつくと云ふ歌のこゝろ、後生の用意に心がけあつく歡喜信樂してくらす人があると、後世とも未來とも知らずうか〳〵と油斷して暮しておる人も、自ら驚く心づきて、我と發起して法義に基くものなれば、誠の信心は自利のみにあらず、利他の化益も我れ知らず自然にあらはるゝのである。

この廻心懺悔をきゝてもげにもとおもいておなじく、日頃の惡心をひるがへして善心になりかへる人もあるべし、これまことに今月聖人の御忌の本懷にあひ叶ふべし、これ卽ち報恩謝德の懇志たるべきものなり。

と蓮如上人も示されてある。

シンエイ 眞影 【術語】

御文に「かたじけなくも目前に於て眞影を拜し奉る」とあり、これは親鸞聖人の木像を指すなり、

因緣 死せる孔明と生ける仲達

諸葛孔明が司馬懿仲達と交戰した時、孔明は自分の命つきて七日の後には必ず命終るべき事を考へ知つて、自身の木像をつくり、ひそかに遺言しておかれましたが、果して七日目に命終られた、されども孔明の死んだと云

ふことを敵の耳へ入らぬやうにとて、軍中にいましめて必ず沙汰をするなと隠しおいた、然る處流石大將の孔明が死んだに違ひなゐゆへに、すべての人々が皆力をおとし、ドーモ士氣の振はぬゆへ、敵の方では評判をして、察するところ孔明が死んだに違ひなゐ、今は心やすいから進軍せうとて、しきりに攻めよせた時、蜀の大將匡維が下知して、孔明の木像を車にのせ「孔明これにあり」とて車を引き出したれば、敵の兵卒はこれに恐れて、木像とは夢にも知らず、死んだと思ふた孔明が思ひの外存命ぢやもの、コリャたまらぬと云ふので、司馬懿仲達を始め數多の軍兵一同に旗を卷いて逃げ去りた、死せる孔明いける仲達を走らしむとは此事を云ふのである。孔明が存生中に我が木像を作りて置たは、敵を欺いて軍を追ひかへそう爲めの計略で眞實慈悲心から出たことではなゐが、今祖師聖人御存生の間にかず〳〵の御木像をきざみおかせられたは、大慈悲心が本とならせられ、入滅の後のかたみにとて御のこし下されたが處々にある御眞影樣ぢや。

因緣 文王の木像

周の武王が父文王すぎたまひて、中陰のうちに軍をおこし殷の紂王を滅ぼされた、其時文王の木主と云ふて、父王の木像をつくりて車に載せ、之を軍中に引き出して、今度の軍は武王の私ではなゐ、父文王の遺命ぢやと云ふことを示されたと云ふことがある、これは軍に勝たう爲めの計畧であるが、今この祖師聖人の御眞影樣も其如くで、御流れを汲む御門徒の八萬四千の煩惱の敵に勝つて、佛恩報謝の凱歌をあげさせう爲めに御殘し下されたものである。

因緣 關東武士と鰐

むかし、關東の武士が京都の在番に上るとき、桑名の渡を越ゆるに、何故であるか波も風もなゐに船が動かぬやうになつた〳〵何故であろうかと乘合の人々がいろ〳〵と評定をして居たが、彼の武士は弓取りの名人ゆへ、水底をすかしみると、大きな鰐が口を開いて向ふておる、オノレ憎き奴とにらみつけ矢を放ちますとあやまたず、鰐の咽喉を射ぬいたものと見へ、しばらくすると海上一町四方ほどの間、赤の血しほに染みましたので、乘合の人々も、大に其武德を當賛してくれました、それから京都へ上つて在番三年の勤めて終り關東へ歸る時、桑名の宿にとまりましたが、座敷の前の庭園の中にある泉水に石とも木ともわからぬものが橋にかけてある、不審のあまり亭主を呼んで尋ねますと、三年以前に自分が射殺した鰐の遺骸であつたので、武士も大に奇遇に感じ、早速庭園に下りてかの橋を指で推してみると、指先に鱗の芒があたつて微痛を感じたが、當分は何とも思はなんだれど、國へ歸つて十數日を經た後に其疵から腐が來て、遂に總身へまわり、百日餘の後、とう〳〵命終つたと云ふことが宗祇物語に書いてある、鰐は死んでも、恨めしいと思ふた一念が形に止りて遂に敵を取つたのぢや、祖師

聖人の御往生は六百五十年の昔なれど、迷ひの衆生を一度は佛になさふぞと彼尊の御念力が強いゆへ、今御眞影樣の前にひざまついて苟且でも御禮を遂げたれば、御廻向の信心は我等が總身にまわらせられ、五年十年の餘命はあれど、やがて命の終り次第、是非〳〵淨土に往生して、無上涅槃の佛になさしめ下さるゝが、祖師聖人御眞影の御利益である。

因緣 央雄の忠義

衞の靈公、彌子瑕を愛して宰相とし、遽伯玉を用ゐ玉はず、央雄と云ふ忠臣は大に之を憤慨して、三度び諫めても聞かれず、致方がなゐものであるから、我が屋敷の北の隅に北堂とて一つの堂を立てゝ、子息に遺言して云ふには、賢明なる遽伯玉を用ゐず、奸佞なる彌子瑕を宰相とし玉ふことは、國家の爲めに大なる不利益であると、三度まで君公を諫めたれども、予が言ふことを用ゐられぬから、我は切腹して死するで、死骸は葬らずしてこのまゝにおいてくれ、我が魂魄はこの死骸に留め、我が念力を以て一度は彌子瑕を遠ざけ遽伯玉を用ゐさせずばおくまいと云ふて自殺されたが、云はれた通りに死骸を葬らずにおくと、晝も夜も城をにらみつめて居られた、それから三年目に彌子瑕の惡事が露顯して、之を刑罰し、遽伯玉を用ゐ玉ふことになりた其時靈公かの北堂を吊ひ、「生きては詞を以て諫め、死しては骸を以て諫む、忠なるかな孝なるかな」との玉へば、死骸は忽ちみじ〳〵と碎けたとある、今祖師聖人は京都の本願寺より日本國中の同行をにらみつめ、一度は雜行の彌子瑕を去り、信心の遽伯玉を用ゐさせずばおくまいの御念力か、御眞影樣ぢやぞや

シンエンイバ 心猿意馬 【術語】

一境に止らず轉變きはまりなき心を猿の如く馬の如しと喩へたまふ、

談話 見猿聞猿言猿

昔、山王權現の猿が集りて庚申待を致しました、時に親猿の云ふやう、汝等各藝盡をして樂むべし、されどいつもの如く猿の木登も珍しからず、宜しく珍しき遊びを爲すべしと、其時一疋の子猿は兩手に眼を塞ぎて見猿となり、又一疋の子猿は耳を塞ぎて聞猿となり、他の一疋の小猿は口を塞ぎて言猿となりました、親猿は三疋の小猿を見て莞爾として問ひけるは汝が見猿と爲れる心は如何、見猿答て曰く、眼は諸欲の媒ちなり、他の金銀財寶を見ては貪欲の心を起し、他の婦人の美なるを見ては婬欲の念を起し、遂には不義不道の穴に落ちて身を誤る、眼に遮る物毎に就て惡念きざす故、只何事も見猿となるなりと申しました。

次に親猿の云ふやう、聞猿の心如何と、聞猿答て、聲耳に入て心に應ず、我を褒る詞をきけば喜び、我を謗る詞をきけば心に怒り人を恨み他を咎め、一朝の怒毒によりて身を誤る、又は他人の好事を聞ては羨み無根無形の聲の爲めに惑さるゝこと多し、何事もたゞ聞かざるとなつて善惡是非のことを耳へ入れざるなりと申しました。

次に親猿の云ふやう、言猿の心如何と、言猿答へて、口はこれ禍の門なり、舌はこれ身を斬るの刀なり、人の善惡是非を評量すれば、惡き者に忌み憎まれ、善言も盡さゞれば却て人の誹を受く、多言なれば敗れ多し、故に何事も言はざるなりと申しました。

時に親猿の曰く、汝等の言ふ所まことに世間に處して人と交はるの要路なりと雖ども、未だ至極とは云ひ難し、眼は物を見、耳は聲を聞き、口は言ふが其職なり、然れども眼にて見るにあらず、耳にて聞くにあらず、口にて言ふにあらず、見るべきもの聞くべきもの言ふべきものゝ心内に宿り居るなり、汝等知れりや否や、外にある眼耳口を塞ぎて外のみを防ぎ内を守るの要道に暗し、常に内を防ぎて我一心頭に見猿聞猿言猿の三猿を養ひおかば、眼にて見る所、耳にて聞く所、口にて言ふ所も、此三官の諸欲を内心の三猿が防ぐを以て貪り求むるの心路を絶す、砂糖を見て甘からんと思ふは我が心眼の前に亂さるゝなり其甘からんと思ふ所を防ぐべし、これ禪家の所謂「心は墻壁の如くにして道に入るべし」と言ふ所にて心路を斷ずる旨なり、昔或人が平生學問したる書物を庭に積んで焚き捨んとす、一人の禪僧曰く、汝何とて書を焚くぞ、彼人答て曰く、佛書は不淨を拭ふの紙屑なり儒書は聖人の詞の糠なり、今迄は徒らに文字の上に於て道を求めたり、これ文字の上に道のなきことを自得せり、故に焚捨んと思ふなりと、禪僧の曰く、汝書を焚かずとも汝が腹中の書物を忘るべしといへり、此等の意味を味はひ知らば、眼耳口を塞ぐには及ばずと長々説き曉しましたるに、三匹の子猿は詞を揃へて曰く、親父殿には何猿に爲らんと思はるゝやと、其時親猿從容として曰く、我は何事も不思猿に爲るべし口は鼻の如くにし、眼耳の如くにし、耳は尻の如くせば、適として可ならさるはなしと申しました。

この寓話の如く、精神を平かにし、邪欲を防ぎ、本心の主人公を見得せんには、「善惡を思はず、是非に關するなかれ」てふ古人の訓誡を守るにある、古歌に曰く、

見ず聞かず言はざるまでは守れども
思はざるこそつながれもせず

大緣 大納言の姫君

花の都に時めき玉ふ或大納言殿の姫君、花の顔月の眉十人並み勝れさせられた美人でありて、殊に御兩親の寵愛限りなく、彌が上にも立ち勝りて麗はしき方でありた、この姫君十五の春、何國へ行かれ玉ひしにや影だに見わずなりければ、御兩親の驚きは一方ならず洛中洛外山々谷々殘る隈なく探させ玉へど、如何にも御行衛が知れざるゆへ、如何はせんと泣くより外はなかりた、時に其御邸に幼少より召し使はれて居た臣下の一人、如何なる隙にや彼の姫君と情を通じ、遂に騙落を企て夜を日に次いで東に下り、奥州の淺香山まで逃げ至り、山中の人里離れたる處にて彼の姫君をいたわり、已れは日毎に人里へ下り、乞食して姫君を養ひ居けるに、三年の後に姫は

其男の種を懐胎せり、一日臣下は例の如く里に出でしに、如何なる故にや日暮れて尚歸り來らず、姫君山中に只一人道にて怪我でもしたことか、或は我身を捨て去りたかと、千々に思ひ惱みつゝ、そゝろに越方行末を案じ煩らひ、終夜涙と共に泣き明し、翌朝谷間に下りて水を呑まんと立ちよれば、かわりた姿の水鏡、さてはと顔をしかむれば、同じくしかむる我姿かなと、始めて驚き入り、跪きて都の方を伏し拜み、親に背いた不孝の子がなれの果てを御覽じませと、破れし小袖の袂をくひさき、喰ひ切る小指の血汐にて、今の身の上書き殘し、終に淵瀬に身をなげて、還らぬ旅路に趣いた、樵夫等これを見付け、痛しやと死骸を上げ谷の邊りに葬りて、遺書は人を以て都の方へ送りたが、其中に、

淺香山影さへみゆる山の井に
淺くも人を思ふものかは

と云ふ歌がありた、これ愛執と云ふものが忽然とおこりて、身を忘れ心を失ふやうになりたと云ふ事實の證明であるのぢやゝ、引かれなば惡しき道にも入りぬべし心の駒に手綱ゆるすな」の誡めは深く守らねばなりませぬ。

古語 仁は人心なり、義は人路なり

ジンギ　仁義　【由語】

道德の二大眼目にして、孔孟の主張して教ゆる所なり

仁義といふ二字は、支那日本の碩學高德が昔から大間道德の二大眼目であると唱へられて、いろ〳〵と委しく說き明されてをりますが、誠に味はへば味はふほど、甚深の意味が含まれてをることと考へます、西洋においても、之れほど尊き對語はないやうに思はれる故に此の二字について、聊か私の味ひ得たる所を述べて、諸君と共に、修身の道に進まうと存ずる次第であります。

仁も義も、共に支那にいはゆる會意文字に屬し、二文字の複合より成つてをる、即ち仁は二の人に傍ふるものにして「ひとし」又、「あはれむ」など訓じ、すべて人の平等同意なるの意を示しておるのである、隨つて自分を忘れ他人をおかず皆ひとしく幸福に生長することを計るの意となるのである即ち一視博愛のことであります、義は我の上に羊あり、羊とは美の事にして即ち我身を美はしく整ふ意になるので、のり又はすぢみちなどの訓があります、今こゝに仁義に對する訓言をあげて見ようと思ふ。

仁は人の安宅なり
義は人の正路なり
惻隱の心は仁なり
羞惡の心は義なり
仁の實は親に事ふることこれなり
義の實は兄に從ふことこれなり
親を親むは仁なり
長を敬するは義なり
人皆忍びざる所なり之を忍ぶ所に達するは仁也
人皆爲さざる所あり之を爲す所に達するは義也
仁は宅なり

義は路なり
仁は以て之を人にし
義は以て之を宜にす
仁とは忍びざるなり生に施し人を愛するなり

義とは宜なり斷決中を得るなり
博愛これを仁と云ひ
行ふて之を宜しくするこれを義と云ふ

シンクカクイ　心口各異【術語】

心に思ふことと口に言ふことと相違するを云ふ、大無量壽經に「一一一一言念無實」

歌

あい見ては嬉しからすの聲立てゝ
嘘を月夜になき明しけり
逢ふた時は口にうまい言の花を咲かせ、心には毒の針を含みながら、心口各異言念無實で、裡と表の相違のあることを、涅槃經には「羊頭をかけて狗肉を賣る」と御說きなされてある、表の看板には羊の頭を出して、其座敷では狗の肉を食はすぞとの玉ふたる佛の金言、表には人間の看板を出し、其腹底は犬猫にも劣りはてたる日暮し、恩を受けて恩とも思はす、義を欠て耻とせず、想ひ去り想ひ來れば實に御耻ケしいは、我々凡夫の狀態ではありませんか。

シンゲン　愼言【術語】

言語を愼むを云ふ、西該に曰く「言ふべきの事を知る人は亦默すべき時を知る」と、

譬喩

池の邊に二疋の鴈がすんで居て一疋の龜と親友でした、或時旱で池の水が涸れて仕舞ま

したから、二疋の鴈が相談をして、水が涸れて仕舞へば親友はきつと困つて居るに違ひないと云ふので龜の所へゆき、「池の水が涸れりやお前も永く潜んで居れまい、それで今から水の澤山ある所へつれて往つてあげるから、此木を咬へておいで、そうすりや私等が片端づゝ咬へてゆくから、だが木を咬へて居る間は物を言つてはいけないよ」と申し、木を咬へさして連れてゆきました、其途中に村の上を通りますと、村の小供がこれを見まして、「アレ見い鴈が龜を咬へて行きよるは」と騷ぎ立てました、龜は之を聞いて腹を立て、「貴樣等の世話にならん」と言ひますと、やがて木を失ひ地に墮ちて死んで仕舞ひました、これは五分律に出て居る話にして、口は禍の門である、汝の口を守りて妄りに語るなかれ、時と場合とを見て云はざれば、大なる失敗を來すであろうと云ふ教訓なのであります。

シンコウショウゴ　心光攝護【術語】

彌陀如來の攝取の光明を以て護りたまふを云ふ、高僧和讃に「彌陀の一一一一してながく生死をへだてけり、

歌

野に山にうかれ〳〵てかへるさを
寢屋までおくる秋の夜の月
酒や辨當を携へて月見に出かけ、酩酊して歌ふやら舞ふやら、十二分の愉快を極めて我家へかへりましたが、寢所へ入りてもやはり月は玲瓏として照しておると云ふ歌の意、今彌陀をたのんだ念佛行者もその如くで、攝取心光常照護、常に御照しづめ御守りづめと聞けば、何たる御慈悲ふかい大悲の親樣ぞど

ます〳〵仰いでうち喜ばねばなりませぬ。

句 ふところの子に袖笠や夜の雪

雪降の最中に人の軒端に立つた乞食が、我子寒かろうの親心より、小さき袖を以て、雪のかゝらぬやうに覆ふたと云ふあはれな有様を詠じた句、今大悲の親様は五濁亂漫の雪空に居る我等を、心光攝護の袖を以て覆ひたまふのである。

句 蚊帳つれば蚊も面白く月に飛び

煩惱の蚊の飛びゆくを、攝取の蚊帳の中からみせて頂くも、全く光明の月の御光り、

三毒の煩惱はしば〳〵起れども、眞の信心は、かれらにもきへられず、

顚倒の妄念は常に絶へざれども、更に來來の惡報を招かず、

おこる煩惱を御緣として念々稱名常懺悔。

句 串柿や烏も忌みしものながら

樹にある時は烏でさへ忌みて喰はぬ澁柿をもぎとつて串へさし、日光にさらすと、頰も落さんばかりの甘柿となる、昔は烏にさへ忌み嫌はれた澁柿が、斯く甘くなりたるは太陽の光りに照されたからである、我等も凡夫の生れなれば、澁柿同樣の心なれども、善知識の御教化を蒙り、御慈悲の日光に照さるればこそ、澁が變じて甘味となり、心光攝護の身と御定めにあづかるのである。

譬喩 親の側

親の側は究屈なもの氣づまりなもので、子供は親の側に長居はいやがる、それは何故なれば、親が側に見てござると、氣隨氣儘が出來ぬからぢや、然るに我身に大事が起つたり大病でも煩ふてみられよ、他人が如何程側に居ても、二人の親が枕の元に居て下さる程のたのみはなし、今も夫と同じ事で、死なぬ氣でいつ迄も邪見を働いてゐる機ゆへ、御冥見か究屈難義に思はるれども、サア今死ぬと云ふ場へ向つて、齒を喰いしばり眼を見張る、あの臨終に向ふてみられよ、「罪人臨終に重病を得て神識昏狂して心倒亂せり、地獄芥々として眼の前に現ずる時、白汗流出し手に空を把る、斯の如きの困苦誰かよく救はん、會是れ知識彌陀の恩なり」と般舟讃に仰せられた各々が六親眷屬の息を引き取る時、枕頭に居て見られた人もあろうが、物も云はれず目も見ねず、心一つの出て行く場になつて、彼奪が側にござる、こゝは光明の中ぢやと思ふたら、何程うれしかろう、いかほど賴母しからう、こゝをよく〳〵思はれてあるならば息の切れ場になりてから無いものさがす樣にうろたゑぬやう、今日から光明の中に住む身とならるゝが何よりの肝要。

譬喩 日光と雲霧

雨天の日には夜はあけたれども日光は拜まれぬ、日光は拜まれねども、夜分とは違ふて物の黑白がわかる、これを正信偈には、

譬如日光覆雲霧　雲霧之下明無闇

と仰せられてある、文軌にこれを釋して

已に能く無明を破し常恒に照護すといへども、穢質猶存じ報心未だ轉せず故に貪愛瞋憎の煩惱を起すなり、貪愛瞋憎の煩

惱その眞實信心を覆ふといへども、已に無明の大夜闇を破するが故に、泥洹の道復迷失せず、譬へば日光東に昇り雲霧の下夜闇に同じからざるが如し。

と云ひ、又、

宿善まさに開く疑闇消除して明に佛智を信ずるは卽ち如來名光の力なり、一たび天明に至れば雲霧の障碍ありといへども、再び昏夜となりて黑白に迷はず。

とありて、一念歸處の立處が夜のあけたすがた、けれども日光の拜まれぬ雨天である如くちやと云ふ御譬てす、又口傳鈔の中には、

日いでゝ夜はあくといふなり、これは譬なり、無碍光の日輪照觸せざるときは、永々昏夜の無明の夜あけず、然るに今宿善ときいたつて、不斷難思の日輪、貪瞋の半腹に行道するとき、無明漸く闇はれて、信心たちまちに明かなり、然りと雖ども貪瞋の雲霧かりに覆ふによりて、炎王淸淨等の日光あらはれず、これにより て煩惱障眼雖不見とも釋し、已能雖破明無闇ともの玉へり。

等とあり、夜の明けたは日輪の出たゆへである、他力信心の日輪が出てゝ疑の夜はあけたれども、貪愛瞋憎の雨天である、雨天なれども闇夜とは違ふて黑白を辨ずるから、極樂の道に迷ふことはなゐのであると云ふ御譬ぢや

シンジン　信心　【術語】

㊀一切の妄想滅盡して純眞なるを――と云ふ　㊁知來回向の――なり、これに二釋あり、懼に約すれは疑なく信ずる心なり、法に約すればまことの心なり、

詩　何必糸兼竹　山水有清音

これは左太沖の詩である、この意は、世間の人は糸竹音曲ばかりを樂のやうに思ふが、山の奥に世をのがれた身は、世間の樂の音はなけれども、松吹く風の音、谷の流れの音など、よく〳〵思へば、世の塵に離れたる所は糸竹に優つた妙な樂であると、人の知らぬ樂みを詠んだ詩である、今、念佛行者は世の人からみれば窮屈な人と見ゆれども、この信心を得た上の樂みは、後生知らずのものや、疑のはれぬものゝ知らぬ樂みで、思へば〳〵露の命、明日も知れぬ、遠い極樂と思ふたは我が誤り、今宵死ねば今宵が極樂とおもへば、人の知れぬ樂みのあるが念佛行者ぢや。

詩　掬水月在手　弄花香滿衣

水を兩手にそつくりと汲み上てみれば、忽ち天上の月が手の中へ影をうつし、まてしばしなしに宿り玉ふ、今も我々がこの胸の中へ御慈悲の影を宿して下さるゝは、たゞ御慈悲にすなほに向ふばかり、後生を一大事にせよ〳〵と仰せらるゝは、我胸をかきまはして追ひ立てかへすことではない、いよ〳〵一大事になれば仕樣模樣のない未來、たゞ御敎化御慈悲に直に向ふより外はない、また花を弄へば自ら香りが衣裳にとゞまる、これを大悲胸に薰ずと云ふ。

詩　盡日尋春春不見芒鞋踏遍隴頭雲　歸來笑捻梅花嗅春滿枝頭已十分

に人々が春になりた、春はよいものぢやと云

ふに由て、愚な者がどーぞ春を捕へようと、草鞋がけにて毎日々々、所々方々を尋ねあるいても、別に春らしきものもなければ、何うしたら春に出遇ふであろうかと、それは〳〵苦勞したと云ふことを『盡日春を尋ねて春見へず芒鞋踏み遍し隴頭の雲』と云ふたものぢや、何程歩いても春にあはぬから、どうしたらよかろうと思ひ〳〵歸る道で、フト氣がついて、オ、それよ春になれば梅が咲く、おほかた自宅の梅も咲いたであろう、これが咲たら春になりた驗、何の辨當もつて探しまわるに及ばぬものをと、我家へかへりて裏の藪陰へ行て見れば、案に違はず梅が咲いて居るア、爰に春がありたものをと、笑ひ〳〵梅花を捻りて香を嗅いてみれば、春は枝頭にありて、モハヤ十分でありたと云ふ詩の意、御座の同行衆が信心を得よう〳〵と、此處の寺院彼處の法筵と、かけまわり、今日の何々博士の信仰談、明日は何講師の御示談とうろついて居る、フト我家の御内佛で、如來樣を拜んでおる中に宿善到來して、不思議の願力で御助けおやものをと氣がついてみたれば、後生の重荷おろして、さては彼尊が我が往生成就の御相で御座りたかと安心する。

歌 ぬりかくすうるしの下の黒佛

なか〳〵はげよもこの白木に

これは親鸞聖人の御歌である、折角漆で塗り上げて、御信心を立派に飾り立てようとは常の信者の願である、うれしいとか難有いとか稱名とか報恩とか、何でも漆の上にも漆

をつけて、コッテリと塗りあげて、立派な信者になろうとするは、まことに果敢なきことである、「外に賢善精進の相を現ずることなかれ、内に虚假を懷けばなり」で、罪惡の塊たるこの身、煩惱で積みあげたるこのこゝろ、土人形の樣に磨けば磨くほど汚ない泥土になる迷心にて、信せられましたとか、疑はれましたとか塗りかくすことに骨折りておるものが多い樣に思はるゝ、されど考へてみなされ塗りたものならいつか剝げることがある、塗りあげた信者なら、うれしさも冷め喜びも薄らぎ念佛も稱へられぬ時が來ると、どうぢやしらぬと顔をしかめる。

山がつの白木の合子そのまゝに
漆つけねばはげ色もなし

塗らず飾らず其儘なれば、いつもはげる氣遣ひはなし、我々はもとより罪惡の身にして、地獄は一定すみ家でありますから、かゝる機までも御助け下さることのうれしやと信じた上には、たゞうれしく念佛を稱へさせて頂くばかりである。

歌 うれしさを昔は袖につゝみけり

こよひは身にもあまりぬるかな

此歌は西行法師の撰集鈔には四條大納言公任卿の歌なりとして、公任進位幷に行年左遷の事と云ふ下に乃ち左の如く記してある、曰く、むかし四條大納言公任・齊信の中納言に超へて一階をしたまへる時にかくぞよみたまひける、「うれしさを昔は袖につゝみけり、こよひは身にもあまりぬるかな」まことに身を

立つるならばさこそうれしさを思ひ給ひけめこの事は右衛門齊信卿清暑堂の御神樂によりて公任をこされ、侍りけるなり、其時中納言の辭表をまいらせけるに君匡房を御使にて、これはこれある辭表なればおさむまじきなり速に一階をそへ給へと仰せ給はされて超へられ給へりし、耻を清むるのみにあらず、超へかへしたまひければ、人も目出度ことになし申し侍べりけれど、身にあまるまで思ひ給ひけるめなり、さて悦びを袖につゝめぬ、又身にあまると云ふことは柿本の歌なり、誰かこれをそしりきこへん文、今蓮如上人は一帖目初通の御文にこの歌を引いて、公任が超越せし立身を喜びし心事を隨宜轉用して信前信後の念相に格段の相違あることを顯はし玉ふ歌となし玉ふのである。

歌 獅子舞の舞はぬ先から里の子が
手の舞ひ足の踏むを忘れて

田舍の祭禮に獅子舞があると、小供は十日も二十日も前から指折り數へて待つて居る、いよ〳〵今日が宵宮となると、一張羅の着物を着せてもらうて、神社の廣庭へより集り、獅子舞ぢや〳〵と獅子舞の舞わぬ先から、小供は手の舞ひ足の踏むを忘れて喜んでおると云ふ歌の意「至心信樂已れを忘れる」とはこの味ひぢやぞや、たとひ罪業は深重なりとも必ず救ふの先手の佛勅、きゝ開かれた腹ありだけは、機の善惡に目をかけず、已れ忘れて後生助け玉へと彌陀をたのみ奉るのぢや。

歌 笛吹かず太鼓たゝかず獅子舞の

あと足になる胸のやすさよ

田舍の秋祭になると獅子舞を奉納せうとて村の若い衆がさはぎたてる、笛を吹くもあり太鼓をたゝくもあり、獅子を舞はすもあり、いろ〳〵の役目はあるけれども、獅子舞の跡足になるのが一番に心やすい、たゞ前足のする通りにあとからついてゆきさへすればよいのぢや「師匠は針の如く、弟子は糸の如く」と喩へてありて、針の行く處へ糸のついてゆく如く、雜行すてゝ彌陀をたのめの御化導は針の如くであるから、我々は御助け候へと御順ひ申すばかりぢや、獅子舞の跡足同樣の心やすきことである。

歌 流れ行く千里の波はうごけども
やどれる月の影はうごかじ

漫々たる大海、よせては返す雄波雌波の動くはしばしもやまねども、宿れる一輪の月影のみ、さらに動かず碎けざるは他なし、天心にかゝれる明月、朗々として更に動かぬからである、我々の散亂麁動の胸にたゞ信心の慰安のみ、煩惱の風にも妄念の浪にもさらに動かされざるは、永劫にもかわらず動かぬ如來の大願業力があるからです、煩惱の風吹かば吹け、妄念の波さわがばさわげ、我にまことの信心ありて、決して彼等にさへられず動かされざるなり。

歌 吉野山うれしかりける知るべかな
さらでは奥の花を見まじや

これは名高き西行法師の歌ぢや、吉野の櫻の花も表に咲いた間は多くの人かみるけれど

も、谷の奥に咲た花まで見るものは甚だ少い然るによき案内者に出合ふて、谷の奥まで花の咲いたのを見たと云ふ歌のこゝろぢや、ありかたいは御座の同行、南無阿彌陀佛の花は日本國に咲き亂れて下され、空也上人や永觀律師も念佛を御弘めなさるゝが、他力信心の谷の奥の花見案内はして下さらぬのに、祖師聖人の御案内者に出合ふて、たゞ口に南無阿彌陀佛々々々々と稱ふるばかりではない、深く信じて往生一定の覺悟の上より、うれしさに稱ふる念佛ぢやぞやと、谷の奥の花を見せて下されたことぢや、こゝを蓮如上人は、されば當流には信心のかたを以て先とせられたる、其故をよく知らずはいたすらことなり。

歌 春の夜のやみはあやなし梅の花
いろこそ見へね香やはかくる

梅は百花に先だつて咲くゆへ花の兄とも稱美せられ、そのうへ諸花に秀でし薫りゆへ、文なき闇の夜でも香を以て花あることを知ると云ふ歌の意ぢや、今も其如く、他力信心の梅花は煩惱の雪の中にも往生一定と領解を開き、妄念妄執の文なき闇の夜もすがらも、うれしや南無阿彌陀佛と報謝の念佛四方にかほる、これ即ち信心の梅花の開けし驗である、その上自力聖道の諸花に先達ちて秀し香をあらはすゆへ、横超金剛心の花の兄と稱美せらるゝ、依つて四重の破人あつて他力念佛には往生は叶はずなどと云ふとも、それは梅花を牡丹なり芍藥なりと云ふに同じく、かつて信用すべからざる事である。

歌 花と咲き枝葉としげり實となるも
もとは一つの種にこそあれ

梅花開き枝葉しげり、澤山に梅の實のなるは、種一つが本である、今も丁度その如く、現世に於て仁義忠孝の花と咲き、子孫繁榮の枝葉もしげり、稱名報恩の香ひも出て、やがて涅槃佛果の果實を結ぶは、眞實の信心一つが本となるのである。

歌 この度はぬさも取りあへず手向山
紅葉の錦神のまに〳〵

朱雀院南都に御座なされ手向山へ行幸の時菅原道眞公が供奉なされて御詠みになつた歌ぢや、ぬさとは幣帛のこと、昔は錦を以て御幣をつくり、これを神前へ献せらるゝことであつたが、朱雀院此度の御參詣は、にわかの思召たちなれば、左樣の御用意はなかつた程に、幸ひ此山を手向山と云ふなれば、折しも山中一面の紅葉錦にまさるこの景色、これをこのまゝ手向け奉りまする程に、たゞ神の御心のまゝにしたまへと云ふ歌の意、山中の紅葉のありのまゝをいろはずさはらず直に神へ手向けると云ふのこゝろ、今なぞらへて聽聞に及ぶと、煩惱具足の凡夫のまゝ、智惠の鏡を磨くに及ばぬ、煩惱の垢をきよめるに及ばぬ、罪業深重のありのまゝで、光りを放つ佛になして下さる、これ程無造作なことはなひによつて、何の樣もなく何の造作もなく何の煩ひもなくと仰せられた。

歌 あだに咲く花は浮世の一さかり
常盤の松の蔭ののどかさ

定善散善の人は、外相には道心ふかく殊勝に見へるので、櫻や桃の花盛りのやうであれど、それは一時のことであつて、名利の風に誘はれ煩惱の霜に打たるゝと、直に散りうせてしまう、又、松は、松無二古今色一と云ふていつまでも綠りの色かはらず久しく榮へるものであつて、丁度、內心にふかく信心を貯へ外に當流法義の色を見せぬのと同じ事ぢや。

歌 折り得ても心ゆるすな山櫻
さそふ嵐のありもこそすれ

櫻狩りに行つた人の家土產にせんと枝を折つて立ちかへるに、もはや我家に入りたる花なればとて、油斷をしてはならぬ、折りたる花にても嵐が誘へは吹き散らさるゝものなりと油斷を戒めたる歌である、病加二於少癒一と云ふ如くで、病の盛なる時には養生のみに心を碎いて少しも油斷なく醫藥を用ゆれども、さて全快期に近くと云ふと油斷が出來て不養生に流れやすく、爲めに再發して仕損するものが多い、と云ふ戒めぢや、これは暫く其一例であるか、此外何事によらず、油斷すると必ず過のあるものである、御法義の上に於ても亦然りで、信心の花を手に入れた心地して油斷をすると、遂に五欲の風に吹き散らされて、あとかたもなくなるものである、依て蓮如上人は、

さりながら其儘打すて候へば信心もうせ候べし細々に信心の溝をさらへて彌陀の法水を流せといへることありげに候と戒められてある。

歌 松立てずしめ飾りせず餅つかず
かゝる家にも春は來にけり

貧乏人が新年における述懷である、門松は立てず餅はつかずとも、春の正月は向ふから來ると云ふ歌の意ぢや、他力の信心が其如くで、煩惱斷ぜず惡業やめず、昔にかはらぬ淺間しき身なれども、光明名號の因緣で御助けの春は來るのである。

歌 我ながら我もなつかし亡き人の
わけて殘せし形見と思へば

此意は、惣体子たるものゝ體は親の肉、其親が子より先に死んだれば、子の爲めには亡き人と云ふもの、依て如何程戀しいなつかしいと思ふても亡父母に逢ふ事はかなはぬ、然るに我身は其亡き父母の分けて殘しておかれた形見ぢやと思へば、我身ながら我身がなつかしいと思はれると、至りて親を戀ひ慕ふたる心をよんだ歌ぢや、今も其如く如何程に如來聖人を戀しなつかしと存じても唯今御目にかゝる事は叶はぬが、それにつけても貴むべきは我等の信心、この信心は取りも直さず佛祖の御慈悲の肉を分けて與ゑて下されたも彼尊の御形見ぢやと思へば、我ながら我が信心が大切に思はれ、いよ〳〵御恩報謝の相續に及ばいでかなわぬ筈ぢや、親子なれば、口元が似るか、目元が似るか、何處ぞに親に似て居る處がある、なせかなれば身體髮膚これを父母に受くると云ふて、五尺の身體は丸

々親よりのもらいものであるからぢや、一念の信心も其如く、如來回向のもらいもの、ゆゝ大悲の親樣に似た處がある、それが形以下にあらはれるで、道德的の行ひをする樣になるのぢや。

句 水うてば葉毎〳〵の月夜かな

新緑しげれる庭前へ水をうてば葉毎々々に月影が宿る如く、宿善開發の露さへあれば、佛智の月は宿つて下さるのである、一切善惡凡夫人聞信如來弘誓願、善人でも惡人でも、男子女人の隔てなく、如來の弘誓願の聞信なられた人々なら、信心の月影はあざやかに宿つて下さるゝ。

句 我はいつ蚊帳を出たやら時鳥

時鳥の聲が聞きたい〳〵と始終心にかけて居た風流人が、或時一聲の時鳥をきくなり、やれうれしやと蚊帳を飛び出て、窓の戸を明けて見たと云ふ句の意、時鳥の一聲に己れ忘れたありさまは、この十七字の上にあり〳〵と顯はれて居ります、至心信樂已を忘れて速に無行不成の願海に歸するとはこゝの事。

句 紅さした口を忘るゝ清水かな

夏の時分に山路を歩むと、喉はかわく、汗は流れる、ア、暑い〳〵と扇をつかいながら歩んでおると、岩の間から清水が流れ出ておる、それを見つけるなり、紅さした事を忘れて、其清水を手に掬ふて呑むと云ふ句の意、今日の我々が、後生の大事と思ふてみると、善根はなし功德はなし、惡業はやまず煩惱はのかず、今にも無常に誘はれたら、泣いて地獄に落るより、外に仕方のなゐものに、たとひ罪業は深重なりともかならず救ふの勅命が耳から心へ聞へるなり、機の善惡の紅を忘れて、本願の清水を頂かせてもらうばかりぢや

句 下女ひとり夜なべにおきて時鳥

晝は仕事においまわされて、着物を縫ふ暇がないので、夜おそくまで仕事をしておるとはからず時鳥の聲をきいたと云ふ句のこゝろ聞きたい〳〵と思ふて骨折つても、なか〳〵聞かるゝものでないのに、思ひかけなく聞かせてもらうたと云ふ喜びぢや、今も丁度其如くで、信心を得やう〳〵と云ふて骨折つてもなか〳〵聽聞が出來なんだに、此方で骨折つてこしらへるでなかつた、如來招喚の御呼聲のきこゑかゝる機までも御助け候へと御受けのなられたのが御信心のもらはれたと申すものである。

句 一輪に心こめたる室の梅

風流三昧の樂隱居が、正月の元日に梅の花を咲かせ、茶友達に誇らうと、冬至前から骨折りて、室へ梅の盆栽を入れて温めるやら日當りのよき處へ鉢を出すやら、それは〳〵一方ならぬ骨折で、漸く元朝に一輪の花が開いたと云ふ句の意、今大悲の親樣が、五濁亂漫の雪の中に、一念歸命の花を咲かせうとて種々に善巧方便と手をかへ品をかへての御骨折で、今は後生たすけ玉へと彌陀をたのむと云ふ、一念の信が得られたのぢやぞや、隱居が咲かせた梅の花は茶友達が褒める、今我々の得た信心には、諸佛稱讃の益がある。

句 この泥があればこそさけ蓮の花

往生論註に維摩經を御引なされて「高原ノ陸地不レ生ニ蓮華一卑濕淤泥乃生ニ蓮華ヲ」と御喩なされてある、高い野原や砂の上には、蓮の花は咲かぬ、きたなゐ泥田の中に鮮娟な花が開く、泥はうるさいものなれども、蓮を咲かすには入用なものぢや、信心の花が其通り、悪業煩惱の濁りのなゐ、智者聖者の野原へは、却て六字がいたゞかれぬ、穢悪汚染とけがれきりた、煩惱さかまく腹底へ、其まゝなりと御回向が、南無阿彌陀佛の六字ぢやゆへ、「この罪があればこれさけ信の花」親にゆはれぬ子に話されぬ、夫婦中でも割りて云はれぬ、我身でさへも愛想のつきた、煩惱具足の心の中へ、たのめ助ける間違はさぬの、仰せ一つを聞き開き、罪もさわりもひつくるめ、かゝる機までもと打ちまかせ、助け玉へとたのむなり、親の方には轉悪成善、三世の罪のさらりときゆる願力ゆへ、たのむ一念の端的が、ハヤ正定聚の位ぢやぞよと御意あらせらるゝ。

句 どうなりと風にまかせた柳かな

隣りの主人が來て申すには、私が今度上京致すについて娘も連れて上りてくれよと、いろ〳〵に申しますから、つれて上ろうと思ふて居ますが、貴方の御娘さんも御參詣なされては如何です、私が身にかへて、私の娘と同樣にキット御世話をいたします程にと、それは〳〵深切なるすゝめによりて、左樣なればどうぞつれてまいりて下されと云ふた、これが隣りの主人の丈夫な心に隨ふたので、どうなりと風にまかせた柳かな、たのみまかせたのである、今十萬億西の御淨土へ、死なば決定行くに違ひなゐと疑の雲霧はれて、御まかせのなられたは、御淨土の亭主役たる阿彌陀如來の、まかせよ〳〵の仰せが、たのみになり力らになりたゆへ、どうなりと彼尊まかせと落付ておる、これを一念歸命の安心と云ふのぢや。

句 明月やふる茶の中の千世界

大空に一輪の明月がかゝり、仲秋三五の良夜なれば、二三の雅客はこの月光の前に團欒して抹茶會を開きましたが、茶筅にて茶をふれば（茶をたてるをふると云ふ）ふるに隨つて千百の泡が立つ、泡一つ一つに月影をあらはす、千個の泡があれば千輪の月を映ず、されど天に千個の月あるにあらず、唯これ一輪の明月のみ、千ありながら一の月輪、一にして而もこれ千である、今我々が疑なく本願を信じ奉る一念の信心が丁度其如くて、正覺大音の御呼聲を善知識の御取次によつて聽聞してみれば、罪ありながら障かゝへながら十人も百人も洩しはせぬぞよの先手の仰せ、いよ〳〵かゝる機までも御助け候へと御請のなられたのが彌陀をたのむ一念歸命の領解、千個の泡があれば千個の月を映す如く、願樂欲聞と耳さし出して聽聞する同行が、千人あらば千人、萬人あらば萬人、共に頂かれるのが他力回向の信心であります。

句 露みちて月のこぼれぬ里もなし

一月天にあつて影萬水に宿す、芭蕉葉のやうな大きな葉でも露がなければ月は宿らぬ、どんなちり〳〵草の小さい葉でも露さへあれば影をひそめて月は御宿りなさる、宿す宿さぬは月の咎ではなひ、露のあるとなひとによる、今もそれと同じこと、

十方微塵世界の　念佛の衆生をみそなはし
攝取して捨てざれば　阿彌陀と名けたてまつる

あれは助ける、これは助けぬと彌陀の方に隔てはなひ、願生淨土の心がなければ攝取の御利益はなひ。

古語 玉扈無レ底雖レ寶非用

ちよと見た處では光りかゝやく結搆なる品ゆへ、これは何でござるといへば拙者重代の重寶、玉の杯ぢやと云ふ、さても結搆な御道具かなと、手に取つてよく〳〵見れば、肝心の底がぬけてある、如何に結搆な玉の扈でも肝心の底がなふては酒はのまれぬ、酒がのまれねば扈の役はあがつた、本願名號の玉の扈はあれども、肝心の信心の底がなければ、往生淨土の用にはたゝぬ。

古語 陶犬無二守レ夜之警一
瓦雞無二司レ晨之益一

これはよい細工ぢや、ほとんど正眞ぢやといへども、土細工の鷄や、陶器の犬は、何の益にもたゝぬ、それは何故なれば如何に形はよく似てあつても肝心の性根玉がないからのこと、我れも御門徒ぢや同行ぢやと、肩衣で出かけても、胸に信心の性根玉がなくては極樂まいりはかなはぬ。

譬喩 四季の循環

春になれば花が咲き、秋は木の實を結ぶ、夏の暑きも、冬の寒いも、四季循環にうそはない、これが「天は云はずして自ら信あり」と云ふ處ぢや、木火土金水の五行も信を土にかたどり、土がなくば五穀が實らぬ、土がなくば金も出ぬ、木も育たぬ、水も湧かぬ、又五常の中でも信が一つ欠けては人間とは云はれぬ、信がなくば仁でもなひ、義でもなひ、禮でもなひ、五本の指の其中に、親指一本が信の如くで、餘の四本の指は、親指の信の一本が相手なり、世間の上に於ても此信の一つが欠けては一日も日はたゝぬ、況んや三僧祇百大劫の修行をはねこへて彌陀同體の證りを開くには、信心が何よりの肝要ぢや、「佛法の大海には信を以て能入とする」、

譬喩 簾と皮草履

「あはれなるかな〳〵」と云ふ題に「簾になる竹のうわきは皮草履一とつけられたと云ふ話がある、筍の時は竹をつゝんで出た竹の皮なれど、竹は段々生長して簾になる、簾になれば貴顯方の御殿に飾らるゝ、其竹を包んだ竹の皮は草履となつて人の足にかけられ泥の中へふみこまれ、塵捨場へすてらるゝ、筍の時には一所に居たものが、後には果報が大違ひぢや、今この御座では信不信とも御門徒のやうな顔付をしておれども、臨終の夕になると大違ひで、三明六通無碍自在の證りをひらくものと、無間地獄の釜じきになるものとの差が出來る。

譬喩 旦那の祝宴

金滿家の檀那が出入の權助の宅へ行き、「拙者は當年が四十二、妻も三十三ぢやで、何日から三日の間、大祝宴を開くから、其方達夫婦は無論の事、娘も息子も小供もつれて、手傳ひかた〳〵來てもらいたい御祝儀を持つて行かねばならぬと云ふ樣な心配は更になゐ樣に、ホンノ空手のなりて來てくれよと、それは〳〵念の入つた御案内、又門口に遊んで居る五つ六つの小供の頭をなでゝ、ア、坊よ賢い子ぢや、今日から五つ程ねると伯父の家の御客ぢやから來てくれよ、坊のお父さんもお母さんも兄さんも姉さんも皆つれて一緒に來いよ、高い御膳で鯛の御馳走ぢやぞ」と云へば坊はニコ〳〵顔でうなづいた、さて檀那のかへられた跡で權助夫婦は心配ぢや「なんぼ空手で來いと云はれたとて四人も五人も行くのぢやもの酒壹升に肴料の五拾錢は包まねばならぬ、壹圓の工面をせねは行かれぬ」と青息吐息、息子は羽織がわるいと云ふて小言を云ふ、娘は帶や簪がなゐとて泣き出す、一家は心配で滿ちておれど、其中で安穩なのは坊一人、モウ五つねると高い御膳で鯛の御馳走ぢや」と喜んで居る、計ひするなの御教化は毎日毎夜聞きながら、如何にも左樣は仰せられますれども、けれども黙いておるは檀那の親切のうけられぬ權助夫婦と同じことぢや。

譬喩 紛失もの

沙地一聲識得自已とは禪關策進の語、沙地一聲如失物得見慶快平生是其字義也とは蓮宗寶鑑の説である、是を近ふ喩へて申さば、何そ家の重寶大切な物が置ところに見ねぬさあ、失ふた、但しは思ひわすれこそと置ところが違ふたかと、家内を紅蓮かへして探せども、遂見ねぬ、どうでも誰ぞ盗むだか那を失ふてはならぬがと云ひ居る矢先に、思ひ寄らぬ處から、不圖出た時は、あゝ爰に在たそと云爾時ははゝあと云は、亡へた物を見つけてやれ嬉しやと慶快こゝろから、思はず知らず出る聲ぢや、されば禪家に見性悟道を心掛て、何とぞ本來の面目が悟り得たひと諸國を遍參して、明師に近かづき、又は座禪工夫して、胸の中を探して見れば、いろ〳〵の妄念、さま〳〵無用の事ばかり心に浮んで本來の面目らしひ事は曾て見付ぬ、斯の如く二十年も三十年も失物を探すやうに尋ねまはる矢先、思ひがけなふ大悟發明した時、思はず知らずはゝあと云聲の出るは、今まで苦勞しても得さかしあたらなんだに、即今こそと思ふ時、我しらず出る聲ぢや、そこを「沙地一聲慶快平生」と云ふた、これで御開山の一念慶喜と仰せられたがよく聞へた、凡夫の淺い心では信心といへば何ぞ一物胸の中に出來るやうに心得て、これが信心かあれが信心かと、胸の中を探し求めても、かつて信心らしいものも見へなんだが、宿善到來したれば、往生は願力の不思議で彼方より御成就ぢやものをと、重荷おろしたやうに往生を安堵したとき思はずしらず聲にあらはして、はゝ

ああありがたや、南無阿彌陀佛、と稱へるが慶喜一念の味ひと申すもの……。

譬喩 癲癇病

癲癇病の人が川へ落ちて一里程川下で引上られて、いとしや何國の人やら何として落たやらと騒いて居る間に、フット氣がついて正氣になりてみたれば、持病のことぢや故其病平癒した處で何の惱みもなゐ、そこで助けし人々が、水は呑まなんだか、さぞ術なくありたであろうと尋しに、其時今の人云へるには私は癲癇が起りて川へ落入りました、此病が起りてある間ば夢中にて死人同樣ぢあ故に、水も呑まず、つめたひとも術なひとも思ひませぬ、正氣の時ならとても助かることは出來まいに、死したればこそ生きたなれ、死なすは生きまいものをと云ふたと無住禪師の沙石集の中に書いてある、今御座の同行も丁度それぢや、自力の智惠をすてゝ愚痴になりたればこそ、他力の智惠を頂いて、未來程の一大事を見通すやうに無上智惠者になりた、これ愚痴になりたればこそ智惠が出來たなれ、愚痴にならずば如來回向の信心の智惠は得られまいものをと、偏に御慈悲を喜ばれよ。

譬喩 醫師と病人

或人が病氣にかゝつた時、いろ〳〵と病氣のことを氣にかけて、醫師に向つて、此藥は何と何との調合でありますかと尋てみたり、或時は驗溫器を自分に取つて熱を計つて見たり、又時には自ら自分の脈を計つて見ると云ふやうに色々に病氣のことを苦にして居たが

病氣は唯日々增すばかりである、或時醫師の云はるゝには、今日は一つ貴下に御相談かある、もし聞きわけて下さるなら、今日以後は醫師の持前の仕事と病人の仕事とを判然區別してもらいたい、藥味の調合は何であるかと云ふことは醫師の調べる仕事で病人の仕事ではない、熱度を計り脈を計ると云ふことは看護婦の仕事で、それが爲めに態々看護婦がつけてある、然るに醫師や看護婦の爲すべき事を病人が心配して一人の身の上に醫師と病人とを兼ねやうとするのは全体無理である、醫師の仕事を盜むから安心は出來ずに唯病氣が增すばかりである、今日より以後は醫師の仕事は私にまかせて、貴下は病人ばかりになつてくれぬかと云はれたので、其人はハッと氣がついて、一切を醫師にまかせて、自分は唯病人になつて、何事も醫師の計ひにまかせた所が、二三日をたゝぬ中に、病氣は漸々快方に趣いて、五六日たゝぬ中に全快いたしたと云ふ事である。

今、我々も如來の仕事を盜むからいかぬ、往生の一大事は如來がよき樣に計ふて下される、我々が罪惡や業障は如來が必ず責任を負ふて始末をつけて下される、如來の仕事を如來にまかせて、自分は唯罪惡の凡夫となりまして、この機のまゝの御助けと信じて、罪惡の重荷を卸し光明の懷ろに抱き取られた時が信心決定と申すものぢや。

譬喩 旅客の喜び

非常な多數な旅客を乘せて進行する瀛車中

の狀態は隨分混雜なものである、一人の旅客はこの混雜の中に立つて背中には大きな荷物を負ひ、腰をかける處もなく、人の中におしもまれて誠に氣の毒な有樣であつた、所が其側に腰をかけて居た一人の婦人が、此姿を見兼て、自分が一方にかたよつて、一人の座られる丈の席をつくり、荷物のおかゝるやうに塲所をこしらへてやつて、其立ち往生の旅客に向ふて云はるゝには、貴方は誠に御氣の毒である、その荷物をおろして、此處に腰をかけては如何ですと勸めた、所が其旅客は非常に喜んで、背中の荷物をおろし、腰掛に腰をかけた時、腹の底から湧き出したやうな聲を漏して、ヤレ〳〵これで助かりましたと申されました、この「助かりました」の一語は、如何にも眞面目で、眞に肺肝から湧き出た語である。

今、我々が如來の御慈悲に助けられたと云ふ意味も實際はかやうでなくてはならぬと思ひます、人生の荒波にもまれ、罪惡の重荷を負ふて、身の置所もなく苦しんで居た所に、如來の慈悲の御呼聲に由て、其罪惡は佛にまかせよ、佛の方で始末をつけてやる、遠慮ごゝろを離れて如來の慈悲に腰をかけよ、如來の慈悲はこのまゝである、このまゝなりで救ふのであるとの、大悲の御呼聲の聞へた時に罪惡も業障も投げ出して、往生一つは如來の御はからひである、凡夫の心配すべき事ではない、往生一つを如來にまかせた上からは、ともかく如來の御導きにまかせて進みませうア、これで重荷がおりました、やれ〳〵これで助かりましたと、一身を如來にまかせて全く他力本願によつて安心したのが、信心決定と申すものである。

譬喻 電氣

一條の電線はこれを其儘おいたばかりでは何の力もなく働きもありませぬが、もしこの電線が電信柱に張られ、これに電氣が傳はりますと、忽ち大變に強い力があらはれます、或は電車となつて重い車をゴロ〳〵と動かしますし、或は電燈となつて赫々たる光明を放つて闇の夜を晝の如くに明るう照します、また電信電話となつては百里千里をへだつ友達に音信を通ずる不思議な作用をも現はします、わづか一條の綱線でも其中へ電氣の通じました時には斯の如く大きい強い働らきがあらはれるではありませんか、今私共の身の上がそうです、自分たけでは實に軟弱いものである小さい力である、只飲みたい食いたい欲しい〳〵で、まづいこゝろ、つまらぬ身の上である、何の役にも立たぬ身である、併しながら私共のこの心が一つ大きい電氣に觸れてその力が働きますと、忽ち弱い身が強くなり、小さい心が大きくなり、身にも心にも大變な力量があらはれるのである、即ち私共は如來樣の大きな威神力に觸れさして頂き無限の慈悲に此心が感じますと、不思議にも強い作用があらはれる、電力が重い車をコロ〳〵と動かすやうに、私共をもこの信仰の電氣はよく動かしまして、自分の懈怠なる身體ばか

りでなく、また世の人達をも動かします、又電燈の輝くやうに、大きな光明を放つて世の闇に迷へる人の心を千載の後までも照します而して又人の心に感應してさま〴〵の強い影響を與へますことは、電信電話の如く不思議にも神速に傳はります、何でも如來の不思議な大御力が、私共のこの心へ電氣のかゝつたやうに通じさへ致しますれば、勤勉も努力も自ら現はれ、人間以上の力も現はれるのであります、彼の名高き吉崎の與三次の女房が、深夜おそろしき鬼に出遇ひながら、

はまばはめ食はゞくらへ金剛の
他力の信は齒には合ふまじ

と詠せし如きは、たしかに其現象の一であろうと思ふのであります。

譬喩 庭前の朝顔

夏の頃に庭前へ出て見れば、叢の中に奇麗な朝顔が咲いてあるゆへ、これは不思議ぢや、種を蒔いた覺へもなく、勿論植へた覺へもなく、蒔かぬ種に花のさかふ道理はなぬ、これは合點がゆかぬと、段々蔓を調べて見れば、花の咲いたも道理、根本は垣を越ゑて隣りの屋敷、花の咲いたはこちらの屋敷の草の中、根本は垣をこへて隣の屋敷、今各々方や我々も、貪瞋の叢の中へ、いつの間にやら助け玉への鮮かな信心の花の開いたは、どうした譯ぢやと思へば、花の開いたも道理、助け玉へと臍落して彌陀のたのまれた筈、善知識の御教化の蔓より、根本をしらべてみたりや、娑婆と淨土の垣越ゑて、極樂淨土で聲は

り上て、御呼びづめの本願招喚の勅命、蓮如上人は、彌陀の勅命の届き心を知らせて、「後生助け玉への思ひぢや」と御示しあらせらるゝ。

譬喩 猫と金貨

同行の中には、私は信心を決定させて頂いても、耻かしいことには、金拾圓もろうた程にもござりませぬ、ナントこれでも信心のそなはつた歡喜がござりませうかと申さるゝ人がある、これはよく〳〵考へると、金拾圓はうれしいが信心決定させてもろうたはそれ程にないと云ふのは、信心のつかひ場がわからぬからぢや、何故と云ふに、同じ金拾圓でも人間がもらうとうれしいけれども、犬や猫に取らせると一向喜ばぬ、何故なれば犬や猫は喜ばぬも道理で、金の使ひ場を知らぬ、人間はつかい場を知つておるゆへ、金さへ持つてゆけば御馳走も食はるゝ、着物も買はるゝ、普請も出來る、所謂黃金萬能でいろ〳〵のはたらきのあるが金ぢやと知つておるゆへ喜ばずには居られぬ、今信心決定しても拾圓もろうた程にも喜ばれぬと云ふは、未だ信心のつかひ場を知らぬ故ぢや、其信心のつかひ場は何處ぢやと云ふと、臨終一念の夕、今が後生とふみ出したら、其時に用に立つて下さるゝが他力回向の信心ぢやぞや、この信心がなかつたなら、泣いて三塗に沈むより外はないのは……、そこで身にもよろこび心にもよろこぶ故歡喜のおもいがある、依て信心歡喜と仰せらるゝのである。

譬喩

伯父と甥

伯父が東京で數萬圓の財產を有する身となりておる處へ、田舍の甥が金の無心に行いたと云ふ話がある、これは信解の信に喩へたのですが、俗該にも『伯父の金と春の日はくれそうでくれぬ』と云ふて、中々金と云ふものは、くれるものではなゐ、されど零落に及んで仕方のなゐ處から、わざ〳〵金の無心に東京まで出かけた、新橋へ着くなり、豫て聞いて居る伯父の宅に至り、いろ〳〵と事情を陳べ窮狀を訴へたれば、伯父も委細を聞き終りて云ふ樣、貴樣も親にはやく別れたことゆへ借金の出來たのも無理はなゐで、如何にも要求する通り金三百圓をやるぞよ」と心よく承諾してくれて、金庫の鍵に手をかけた時に、やれ〳〵うれしやと安堵したのが信解の信の味ひぢや、今度の後生の一大事は助けて下さるであろうか助けて下さるまいかしらねども一大事の後生のことなれば、どこ〳〵までも彌陀をたのんで御助けの金をもろうた上で安堵せねばならぬと云ふが信解の信と云ふものぢや、さて深信の信と云ふはそれとは違ふて田舍の甥からたのみにゆかぬ先に東京の伯父の方より、甥の零落を聞いて、これが見舞の爲めに下りて來て、そなたは難義をしておるそうなが不便なことぢや、依てこの三百圓の金をやる程に、親の跡を都合よく相續せよと云ふて下されたら、思ひがけなゐことゆへにさては難有い伯父樣なればこそと、踊りあがりて喜ぶばかりぢや、今深く信ずる深信の味

ひはこゝぢやわい、今日の我々は二十五有海の其間、發菩提心の商ひにかゝれば煩惱の利足にひかれて曾無一善と資本を失ひ、十惡五逆のつゐれを纏ふて、出離生死の目當のなきものに、彌陀の方より先手をかけて呼んで下さる御呼び聲の聞き開かれた一念に、因位の萬行果地の萬德、阿彌陀如來の身代ありだけを、名號の中に封じこめて御與ゑ下さるゝのである、それゆへ我等の受け手前では、かゝるものを御助け下さるは阿彌陀如來御一佛ぞと喜ぶより外はありませぬ。

譬喩

飼猫と盜猫

飼猫と盜猫とは大きな違ひ目のあるもので飼猫に御飯をやると猫の半殘しと云ふて、半分喰ふて半分殘しておく、所が飼猫は腹がふくれたので寢ておる、さて盜猫は腹がひもじてならぬから、何ぞなひかと探してあるく間に見付たが半殘しの飯、やれうれしやと早速飛びついて喰ふておる、それを家の老婆が見つけて、ヤイト聲をかけると盜猫は云ふまでもなく飼猫までが驚いて椽の下へ逃げこむ、逃ける所は一所ぢやが飼猫はしばらくするとニャンと云ふて歸つて來て老婆の膝の上へ乘る、これが飼猫のしるしぢや、盜猫は一返椽の下へ逃げると、モウ歸つて來る時節がなひこれが盜猫の證據ぢや、今信者と不信者とが其如くで、三毒煩惱の椽の下へ逃げこんたところは信者も不信者も同じことで、おしひほしい憎い可愛い、さらに違ひ目はない、然るに不信心者は一度三毒煩惱の椽の下へにげこ

むと決してもどりがなひ、慚愧稱名のもどりのなひが不信心者ぢや、信心決定の人は三毒煩惱の椽の下へにげこむ所は不信心者と同樣で、祖師聖人の仰せの如く、

凡夫といふは無明煩惱我等が身にみちみちて、いかり、はらだち、にくみ、ねたむこゝろの臨終の一念にいたるで、とゞまらず、きゑず、たゑずと、水火二河の譬にあらはせり。

と、此所は同樣ぢや、さりながら慚愧稱名のもどりがある、はやく云へば此御座へ參詣して居ても、世間話の貪欲にまぎれこむことがある、しかし其下から、やれ五尊の御前へ出ながら世間話とは何事ぞ、大悲の親樣は他心徹鑒で御見拔ぢやが、やれ御耻かしやと、大悲の手元へふりかへり攝取の膝の上へ上るのである。

椽 孝行娘と蜜柑

或在所の長者が、種々の災難の爲めに破產して、今は見る影もなゐ小屋住居、父は已に先き立たれ、十二になる娘が母親と二人、細き煙りを立てゝ居た、然るところ、母は長々の大病で此頃粥の湯もたべられぬ程の重症となりた、天性孝行な娘は母の傍を離れずに介抱して居たが、或時蜜柑が一つ食ひたいとの母の所望ゆへ、それでは買ふて來ませうと、村中を尋ねまわりたけど、至極田舍の事ゆへ賣りて居る店もなかりた、どうしたものであろうかと心を痛めて戻る道すがら、蜜柑畑に澤山に蜜柑のなりて居るを見付けた、あれを

一つ……と思ふて、二つ三つとりておると、「ヤレ泥棒よ野荒しよ」と、地主に捕へられ駐在巡査の所へつれて行かれ、「サア吟味して下され、この娘は私の蜜柑畑へ這入りて蜜柑を盜んだ野荒しの泥棒、しかも現行犯ですから早速縛りて下され」と云ふて出た、巡査が之をきいて「コリヤ娘其方は何處の者ぢや」「ハイ私はこの村端の小屋に居る者でございます」「どう云ふ譯で盜みに來た」「ハイお母樣が永々の病氣、此頃は粥さへ喉をこさぬゆへ何か欲しいものはござりませぬかと尋ねたら蜜柑が一つ食ひたいとの御望み、村中探せど店屋にはなし困りた事ぢやと思ふて歸る道すがら、この蜜柑畑の蜜柑が目につきましたから、つい取りに這入りました」「フムそれでは盜んでもよいと思たか」「イヱ〳〵そんな事も思ひませぬ」、「そんなら盜んでも母上へ上れば孝行になるでと思ふたか」「そんな事も思ひませぬ」「そんなら取りて惡いと思ふたか」「惡いとも思ひませぬ」「それではよいと思ふたか全體何と思ふて盜んだか、サア返答如何に」と問ひつめられて、娘は「よいとも惡いとも何とも思ひませぬ、唯お母ちんが蜜柑がたべたい〳〵と仰しやるで、上けたいと思ふ心より外は御座りませぬ」と申上たれば、巡査も深く感心して、よく將來を警め、且つ蜜柑を百ばかり籠に入れて、母の見舞にと云ふて下されたとある、世間に鬼はなゐものぢや、至心信樂已を忘れてと云ふ味ひはこれでよくよく合點せられよ、善とも思はず惡とも思はず

孝行になるともならぬともそんな處に心はなぬ、唯母親のたべたいの言のなり、上げたいと思ふより外に心はなぬと云ふた、これが己を忘れた相ぢや、たのめとある佛勅ゆへ、たのまれば仰せにはづれる、たのめば自力になりはせぬか、任せば法體になりはせぬか、稱へりや口稱づのりではあるまいかと、いろいろに心を苦めるは己れを忘れぬのぢや、自力で證るのでさへ最後の一念は無分別ぢやのに戒は持たず修行はせず、持つたものさへ忘れる樣な凡夫ぢやもの、あれでこれでとまごつくぢやなぬ、佛の勅命のまゝに順ふのぢや、

因緣 造花と眞花

昔、イスラエル國に賢王がありました、隣國セバノ女王これを試みやうと思ひ、或日美なる二本の薔薇を携へて、イスラエル國王を問ひました、一本は眞實の花にして一本は名工の作りたものであります、到底肉眼では分別の出來ない程能く似て居ります、女王はこれを兩手に持ち、何れか眞實のものなりやと問ひましたが、王は偶々庭園に蜂の花を尋ねて居るのを見て、直に侍臣に命じて其窓を開かせました、すると蜂は窓より入りて女王の右手にとまりましたが、卽ちこれが眞實のものであると答へられました、そこで女王は大に感ぜられましたと云ふ話があります、これ眞花と造花とは一見似てはおりますけれども悲い哉造花には活氣と云ふものがありませぬ眞實信心必具名號とありて、如實の信心には必ず名號を稱ふると云ふ活氣があります、不如實の信には活氣がない。

因緣 安部の仲丸

小倉百人一首の中に、安部の仲丸

あまのはらふりさけ見れば春日なる
三笠の山に出でし月かも

と云ふ歌がある、この安部の仲丸と云ふ人は永く唐朝の官吏となつて御座たが、或時故郷へかへらんと船にのり出したが、生憎難風に出逢ふて、又唐の濱へ打ち上げられた、其時三五の明月をながめて感慨おく能はず、東の方を望んで、我は遙々異國に渡りてより幾年の間、處かはれば風かはる、何を聞ても聞きなれぬこと、何を見ても見なれぬもの、しかしながら天上にながむる月ばかりは故郷日の本奈良の里三笠の山にかゝやく月にてあらふものをと、深く感慨して詠まれた歌ぢや、いかさま唐と日本と、遠く處は隔つておれど、空におがむる月は唐とて日本とて差別はない、今彌陀の本願の御相手は十方衆生、在家と出家、善人と惡人、人にかはりはあらふとも、かはらぬものは御廻向の信心ばかり、

「大海もつるべも同じ月の影」

因緣 八代艦長と白石少佐

淺間艦長八代六郎氏がら白石少佐の夫人に宛てられたる書面を新聞紙上で拜見しましたが、其記事によりますと三十七八年の戰役に旅順港の第三回閉塞の計畫が定つた時、八代艦長と同じく淺間艦に乘り込み居たる白石少佐は第三回閉塞の時閉塞船佐倉丸の指揮官となつて、いよ〳〵明日出發すると云ふ時、八

代艦長が白石少佐の爲めに訣別の式を行ひ、さて其席上で申さるゝには、君は今度旅順閉塞に行けば勿論戰死と思はねばならぬ、萬一君が戰死するとせば、君の愛兒は予が引受けて撫育し必ず立派な海軍々人に仕立てやうがしかし子供の事は大切であるから申し殘すことがあるなら今遺言いたすがよからふ」と申しました、所が白石少佐の言はるゝには「私が今更たのまずとも艦長の方よりかねて私が戰死した時は必ず愛兒は宜きに計ふて下さるとの事であるから、今に及んで申殘すことは更にない、艦長が我が愛兒を撫育してくれることは必定ぢや、私は艦長の一言によつて滿足する」と云ふて、勇ましく旅順港に進發して、敵軍をして舌を捲かしむる程の眼さましき働きをせられたと云ふことですが、悲壯と申しませうか、慘烈と申しませうか、我身は戰死の境に入る、愛兒はそれとも知らで故郷に殘されて居る、誠に哀れである、しかし白石少佐は艦長を信ずることの篤きによつて、愛兒に關する一切の苦痛を救はれて勇ましく軍人の職務につくされました、人間の力を信ずることですらかやうではありませんか、まして況んや慈悲に於て智慧に於て御力に於て圓滿具足してござる如來であるから、此如來を信ずるならば後生の一大事にはすべての苦痛煩悶を救はれて安心安堵の身の上と御定めにあづかるのである。

大綱 保定の蘇生

白河天皇の御近習に權中納言保定と云ふ公卿が有たが、或時重き病氣に罹つて遂に果敢なくなつたのを、天皇殊の外に惜ませられ、增譽上人と隆命上人との兩人に仰せつけられ保定の宅へ加持におつかはしなされた、兩上人は勅を奉じて保定の遺骸の前で頻りに法華經を讀んで祈られた處が、保定の宿因いまだ盡きなんだものと見ゑて、忽ち蘇生せられたとある、それより保定は深く道心を起して佛法の信仰甚だ篤く、或時摩訶止觀を讀んで、

・溢然として長く往きぬれば所有の產貨は徒らに他の有となる、冥々として濁り逝く、誰か之を訪らはんや、

と云ふ處に至つてさめ〴〵と涙を流し、昔し一旦息の絕ゑた時には實に之に違ひなかつた妻子眷屬が如何に泣き悲んでも何の益にも立たず、今宵にもまた出た息が入らなくなれば誰あつて道連れになるものはなけれども、今では佛法を聽聞した御蔭で冥途の路用が相應に出ておるから誠に心が大丈夫であると云ふて喜ばれたとある、蓮如上人も「信心とは何の要ぞと云へば無善造惡の我等が樣なるあさましき凡夫がたやすく彌陀の淨土へまいるべき用意なり」と仰せられて、後生の路用となるが他力廻向の信心である。

大綱 玄伯と巨卿

唐の玄伯と巨卿とは無二の親友でありた、家は二十里も隔つておるが、意氣投合するものゆへ、若年の頃には同じ處で學問をして居られた、或時巨卿の云ふには、明年八月十五日に貴君の宅へまいりませう」と云ふと、玄

伯は大に喜び、かたく約束をした、さて翌年の八月十五日になると家の掃除をするやら、酒肴の用意をするやら、玄伯は大に奔走して待ちうけのこしらへをして居る、そこで母親の云ふには「去年約束をしたばかりで、其後何の沙汰もなゐのに、其様にこしらへをせずともよいではなゐか、もし間違ふたら何の所詮もなゐぞ」と云へど、玄伯はかぶりをふりて「イヤ〳〵左右ではござらぬ、あの巨卿と云ふ人は嘘を云はぬ人です、もし今日來られねば死なれたに違いなゐ」と云ふて、母の止めるもきゝ入れず、御馳走をとゝのへて待つて居た處が、晝時分になると案に違はず巨卿は來られました、玄伯はよろこんで之を迎へ互につもる山々の話をせられたと云ふことがある、阿彌陀如來の御慈悲を知らぬものは、兎や角と疑ふは最もなれども、巨卿の心を知りておるゆへ、母親が何と云ふても玄伯一人は疑はぬ如く、親を疑ひ子を疑ふ樣な我々がかゝる機までも御助け候へと疑なく本願の不思議を信したてまつることである。

内緣 面白いと目出度ひ

神代の話であるが、天照皇太神が天の岩戸へ隱れさせられたことがある、そうすると世界中が闇黑になりて方角も分らぬ樣になりた八百萬神が集りていろ〳〵と相談の上、神樂を奏することになりて、神々が笛や太鼓ではやしたて、歌ふやら舞ふやら、おもしろそうな音をきゝ玉ひて、岩戸を細目にあけてのぞき玉ふと、今迄は、黑白わからぬ闇でありたのが、細目にあけられたばかりで、人の面も白々とみへる樣になりたから、神々は面白い〳〵と云ふて手を打たれた、面白とは人の面の黑白さへわからなんだものが、面の色がしろ〳〵とみゑる樣になりたと云ふが面白ひと云ふ言の初りぢや、又三人の神樣が、天照皇太神を岩戸の中より出てもらう爲めに、岩戸の扉をはづして隱してしまわれた、それゆへに世界中の闇がはれて元の通りに明かになりたによりて眼に白い黑いのみらるゝ事となり神々は喜んで目出度い〳〵と云はれたが、目出度と云ふ言の初りぢや、目はありながら目なきが如く、物を見ることの叶はなんだものが、天照皇太神の御蔭によりて、再び物を見ることが出來ると云ふが目出度と云ふ御言の意です、信心決定の身も亦光明の御照しによりて因果を知り、恩を知り、自己を知り、他力の本願を知るゆへに、目出度本望これにすぐべからずとある。

内緣 智不智校三十里

魏の曹操と其幕下についた楊德祖と云ふものとが江南へ行きし時、其處に曹蛾と云ふ女の墓があつて、其墓には立派に銘が彫り付けある、其銘の傍に、黃絹幼婦外孫虀臼と云ふ八字の判じものが彫りてある、黃絹とは糸の色で絶の字、幼婦とは少女にして妙の字、外孫とは女子にして好の字、虀臼とは幸を受く卽ち辭の字である、卽ち絶妙好辭と云ふことぢや、この判じ物を楊德祖は一目見ると早速判じる、曹操は馬に騎りて三十里ばかり過ぎ

て後に漸く合點せられたとある、かやうに智慧にも淺深があつて、楊德祖と曹操とは三十里の違ひがあると云ふことで、智不智校三十里と云ふ中華の諺となつたのである、世間の智慧でさへ猶斯の如くであるが、況んや出世間佛法の上に於ても、「智慧格別なるが故に信亦格別」と云ふの現象を呈するは無論のことである、しかしながらこれは自力の上のこと、「往生の信心に至りては善惡の凡夫ともに佛の方よりたまわる信心」と云ふが他力廻向のもらいものであるから、智愚の別なく一味なのである、この意を御知せ下されたが御傳鈔上卷第七段の御教化であります。

譬喩 角力好き

金滿家の一人息子が非常な角力好きで、當に見物に出かける位ではない、自分が土俵の上にあがつて勝負を爭ふやうになつたので、兩親は大に打ち驚き、懇ロニ說諭を加へて土俵に上ることを止めさせた、息子も深く感じたものと見へて、五六日は頗る謹愼して居たが、或日の事、息子のすがたがみゑぬやうになつた、如何したのであろうかと思ひ、隣家まで探しに行くと、近村にて大相撲の興行があつておるとの事、さては其處へ行いたのであろうかと、父親は血眼になつてかけつけみると、息子は大關と組〻で角力の眞最中ぢや父親は致し方がないものであるから、角力の終るのを待つておると、彼の息子はとう〳〵大關を負かしたので、見物人一同の喝采鳴りもやまず、中にも一人の男が大音聲であの樣な力量の勝れた子を持つて居る人は、何たる仕合であろうか、其親達がみたいナァ」と云ふと、父親は子の大勝利を得たうれしさに、「乃公ぢや」と云ふて土俵の上へ飛び上つたとある、これが己を忘れた有樣ぢや、可愛い我子の大勝利を得たのに己を忘れて乃公ぢやと云ふて名乘りて出たのである。

シンジンイホン 信心爲本 【術語】

凡夫往生の正因は他力の信心を本とすると云ふ意なり

譬喩 煙草盆と火

路傍の茶店へ客がひとり這入りて「煙草盆をくれよ」と云ふ、又跡から一人來て「火を一つくれよ」と云ふ、初めの客と後の客と、言は違へども心は一つ、煙草盆と云ふたら火はつきもの、火と云へば煙草盆はつく、元祖の念佛爲本と仰せられた煙草盆には、信心の火はつきもの、我祖の信心一つと仰せらるゝ火には、起行作業の煙草盆は、こりやつきもの、念佛爲本と信心爲本と、御言は替れども御心は全く一つである。

譬喩 本山と別院

御本山の大師堂では、西は九州、東は北海道、諸國の同行が集りて居るゆへ、「御前どこぢや」と問はれたら、赤穗でござる」と答へては譯がわからぬ、「播州で御座る」と答へにやならぬ、別院では播州の同行ばかりゆへ「御前どこぢや」と問はれたら、「播州でござる」と答へると人が笑ふ「赤穗で御座る」と答へにやならぬ、法然聖人の念佛爲本と仰せられたは、右も左も聖道自力の他國が相手ゆ

へ、行から御勸めなさらにや彌陀の本願が弘らぬ、依て行々相對に約して念佛爲本と仰せられたのぢや、祖師聖人は五十年おくれての御化導、念佛稱へるものが御相手ゆへ、國の別院の如く、稱へよと御勸めなさるゝにには及ばぬ、念佛稱ふるは結搆ぢやが、疑ひながらの念佛では殘念ぢやて、折角稱へる念佛なら、本願を信じ彌陀をたのんで、うれしく〳〵の念佛を稱へよとあるが祖師聖人の御勸め、念佛爲本にかたよりて、稱へさへすりや御助けと、行に片寄りたものには、一向に念佛を稱ふとも信心淺くば往生し難く候」と御誡めあらせられ、信にかたよりたものには、信心ありとも名號を稱へざらんは詮なく候」と御誡め、然れば如何なるものが往生が出來るかと云へば、信に片寄らす行に片寄らず、信じて稱ふるが目出度き往生ぢやと仰せらるゝ。

シンシンテツトウ　眞心徹倒【術語】

眞心とは眞實の心、徹到とは通徹到入の義にして、如來の眞實心の至り屆きたるを云ふ、

譬喩　我宗のほまれあらはす下三品

これは海岸の人の話しぢや、俄の難風にて船がこはれ舟人が死んで陸に打上られた、早速國元へ知らせてやると、親兄弟妻子が尋て來る、然るに二十日も三十日も立つてからの事ゆへ、人相はさつぱり譯らぬ、漸く着物の縞柄でこれでもあろうか、しかし似た縞も澤山あるもの、年恰好も分らぬ土左衞門なれども、爭はれぬことが唯一つある、それは外でもなゐ、其死骸に他人がさはつては印がなひが、親や兄弟や我子がさはると、二十日も三十日も立つた死骸からでも血が流れ出る、これは何故なれば親兄弟は血脈が一體であるからぢや、妻がさはつては血が出ぬ、なぜなれば、血脈が違ふ、これゆへ夫婦は義合と云ふて合はせものぢやから分かれてみれば水くさい、親子兄弟は血合にて、血すじを分けた身ゆへ表は別々の樣なれども決して別るゝことの出來ぬものである、御和讃はは逆謗の屍骸とあつて、下三品の惡人は五逆謗法の土左衞門、舟人は二十日か三十日我等は無始以來の腐れもの、諸佛菩薩の他人では一念發起の血しほは出ぬ、然るに添けない、第十八願と下三品とは血脈一體、六字の親の呼び聲が聞へるなり、如是至心と一念發起の血の出るは屆ても切られぬ彌陀と衆生と親子の因緣

譬喩　鶴の巣籠り

尺八にて、鶴の巣籠りを吹く時に二管で吹くのは、親鶴と雛鶴との鳴聲を吹分けるが巣籠りの妙曲である、遙か大空にて親鶴が一聲クワット鳴けは、巣の雛鶴が又一聲クワット鳴く、雛鶴が巣で鳴けば又大空で親鶴が鳴く、それをうまく吹きわけるが尺八の妙である、今も其如く、遙か大空の大悲の親樣が、招きづめ御呼びつめ思ひづめにして下さるゝ眞實が、娑婆の巣籠の我等凡夫の心中へ屆いて下されたればこそ兩手あはして彼尊を拜み、歡喜慶喜の稱名念佛

譬喩　筑紫富士と太陽

家内の者を皆連れて箱崎の濱へ春遊びに出かけたが、「春風春水一時ニ來ル」で、何とも角とも云へぬ絶景ぢや、息子が云ふには「お父さんあの向ふに、

名にしおふ筑紫の濱に來てみれば
霞にまどふ雲の浮嶽

と西行法師の詠まれた名高い山がありますそうなが何の山でありませうか」と問へば、父は「己はモウ眼が霞んで居るから筑紫富士どころではなゐ、近くの島や山でさゑ朧ろにしか見ゑぬのぢや」と聞いて、「それはマアひどく眼の惡いことでありますな、それでは彼處の大きな松が見ゑますか」「イヤそれも少しも目にかゝらぬ」、「さて〳〵少し隔つた松さへも見ゑませぬか、ではあの太陽は見ゑますかと云ふと、父はすこしムッとして「人を惡く云ふにも程がある、太陽が見ゑいでなるものか」と云ふ、「それではお父さんの眼は變な眼ぢや、僅か向ふの松の木さゑ見ゑぬと云はるゝに、彼の太陽が見ゑますか、太陽のある處は中々遠くありますのに、それが見ゆるとは變な眼ぢや」と云ふと、父も驚いて「お前がそう云へば其通りで、近い處のものは見ゑず却て遠い處の太陽の見ゆるとは己が眼は變な眼ぢやナア」と云ふたことがある、近い處はよく見ゑずして遠い太陽の見ゑるのは、もとより太陽に光りがあるゆへ、其光りの功德で此方から見るではなゐ、彼方から見せて下さるのぢや、今一文不知の愚かなものが、書籍を讀んだでもなく學問したことはなけれども

たのむべきは彌陀如來、まいるべきは安養淨土と明かに安心安堵のなられたのは、此方より落つくのではなゐ、如來の淸淨願心の念力から落つかせて下さるので、眞心徹到したからのことであります。

譬喩 緣付いた娘と母親

二三里ある處へ緣付いた娘が、親の家へやすみに來る、他人ばかりの中で箸のあげさげにまで心を配らねばならぬ身が、親の家へきてみれば身も心も樂々と、思ふ存分にやすんで居たが、さていよ〳〵今日は緣付いた先へ歸らねばならぬと云ふ日になると、早朝より髮を結ひ湯に入り、相當なる着物を着て帶をしめ、父親や母親に挨拶して俥に乘る、母親は風呂敷包みの着がへやら土產の品々を俥に積み、車夫が梶棒をあげて、いよ〳〵別るゝと云ふ時、「さよならお母さん……」と云ふて母子互に顏を見合せ、ポロリと一滴の涙をこぼす、これに千萬無量の情がこもりて居る、母親は可愛い娘が姑や小姑中でいろ〳〵と苦勞するであろうと云ふ同情心を起し、娘は生れた家へ斯うして來るも親のある間だけのこと、お父さんやお母さんが亡くなられたら、來るは來ても樂みがすくなひが、どうぞ長く居て下さるやうと親を思ふ孝心、親は子を思ひ子は親を思ふて、互にホロリと一滴の涙を流すのぢや、一念歸命の味ひと云ふも全く此通りであります、彌陀の御慈悲が眞心徹到といたり屆いて下されて、親樣なればこそとうちとけられた味ひが、雜行すてゝ後生たすけ

玉へと彌陀をたのむ一念と申すものぢや。

内緣 康頼と卒都婆

平判官康頼、丹波少將成經、法性寺の執行俊寛の三人は、平家討滅の謀が洩れて鬼界ヶ島へ流されたり、其中に於て康頼は孝心ふかく、朝夕たゞ京都にまします母親を慕ひ、小卒都婆一千を造り、左の二首の歌を書いて大海に流す、

思ひやれしばしと思ふ旅だにも
　猶故郷は戀しきものを
薩摩潟沖の小島にわれありと
　親にはつげよ八重の汐風

千枚の卒都婆の中、たゞ一枚泉州堺の浦につく、浦人其孝心を感じ、京都の母公の許へおくりたとある、凡夫の心の念力でさへ、千に一つは届くゆへ、況んや、如來大悲の御念力が手強いゆへ、我等の心へ御慈悲のとゞかぬ道理はありませぬ。

内緣 長那と愛兒

唐の長那と云ふは二人の男子を擧げて、樂しき家庭に暮して居られたが、風花雪月の喩の通り、フトした病氣の爲めに妻は黄泉の旅路におもむいた、致方なく後妻を迎る、二人の男子の養育を托しましたが、初めの間は折れ合ひもよかりたが、段々と月日の立つに隨ふて、繼子いじめを始め、長那が他行すると繼母は二人の繼子を引くゝりて泥中へ埋め殺してしもうた、さて長那は宅に歸りたれど二人の子供は自宅におらず、段々と行衛を尋ねたら、川向ひの藪に穴をほりて埋めたときく

早速堀りかへしてみたら、二人の屍體があらはれた、それを父親は膝の上へ抱き上て、ヤレ可愛の兄よ！弟よ！一生懸命に呼びたてたれば、二人の兄弟がパッチリ目をあけて、父様と云ふて蘇生したとある、これは親のまことが、二人の兄弟へ至り届いたのぢや、今歸の言は至なりとある、至はいたると云ふ字で、煩惱の繼母の爲めに三惡道の穴へ埋められ、永不成佛の我々を大悲の親様なればこそ末代の凡夫よ五障の女人よ、我を一心にたのめ必ず助けるぞよと、呼んで下さる御慈悲の程が、至り届いて下されたで、たのむばかりで御助け候へと御受けをさせてもらうのである。

内緣 不孝なる惡漢

不孝なる惡漢がありましたが、七八年の間病みて居る中風症の父親を欺き、近村に御法座があるから參詣をして、說教を聽聞せられよとて、自分が負て自宅を出たのであるが、御法座があるとは眞赤な嘘で、實は山奥へつれて行いて之を殺そうと云ふの惡計なのである、父親をおろして思ふて居ることを申しましたら、父親も承知をして「御前方が愛想をつくも無理はなゐで、如何にも殺してくれ、しかしながら、此世の御暇乞に正信偈六首引をつとめるから、願以此功德を相圖に殺してくれよ」と云ひまして、父親は泣く〳〵正信偈を讀み初めた、息子は御つとめの終るを待つておる、そこへ突然と一人の巡査があらはれて、其息子に向ひ「貴様が父親を負ふて御

法座まいりをしたと云ふことを聞いたから、大低こんなことであろうと尾行して來て、先刻からの模樣は一から十まで見届けた、謀殺未遂の現行犯ぢや、サア早く繩にかゝれ」と云ふた。其處へ病人の父親が這ふて出て「決して悴に罪はござりませぬ、私が長い病にあきはてゝ、はやくこの苦患をぬいてくれよとたのみましたので、つい今晩はケ樣なことになりましたのてす、悴は誠に平生から孝心なものでござります」と、涙ながして不孝なる息子を辨護します。其親の親切なことばを聞いたら、不孝なる息子も大に感じたとみゑまして、巡査の前に平伏し、自分の不心得のありのまゝを懺悔しました、父親は之を聞いて打ち驚ぎ「悴の云ふのは皆嘘でござります、全く私から殺してくれよとたのんたのであります」と、息子を罪に落すまいとするの親切を見て巡査も大に感心し、「何を隱さう我れも年老ひたる父親を國許に殘して此地に巡査を奉職して居るのであるが、親と云ふものは何たる慈悲なものであろうか、我れもはやく辭職をして國許にかへり、親の心を慰めねばならぬ」と云ふて巡査までが孝道に趣いたとある、又不孝な息子もそれから心を入れかへて孝行な人となりたとある、誠あれば感ず感ずれば應ずとは、これらの事を云ふのでありませう、一念歸命の安心も亦それと同じことで慈悲の父親とは西方淨土の阿彌陀如來、不孝な息子とは今日在座の我々。

因緣 白玉太夫の親切

昔、江戸寛永寺塔中の和尚と吉原角海老の白玉太夫とが深く名馴になつて、朝きぬ〴〵の時「晩に必ず忍んで來い裡口あけて待つて居る」、「間違なふ晩にまいります」と太夫と和尚の約束をしたと、さて其日の晝前より雨風はげしく降り出したので、今宵はとてもよう來まいと思ひ、和尚は裡口をしめて寢てしまはれた、然るに白玉太夫は唯一人吉原田圃をこけつまろびつ裡口へ來てみれば、戸をしめて錠がかけてある、そこで女はどん〴〵と戸を叩くと、和尚は中から誰ぢやと言をかける、白玉太夫取りあへず一首の歌、

我ならでかゝる雨夜に誰かこん
誰ぞとは君は二人待つらん

誰ぢやと云はるゝ筈はない、晩に必ず來いキッとまいりますと朝の約束、それを誰ぢやと云はるゝからは妾の外にまだ一人待つてござる人があるに違ひはあるまいと云はれたので和尚は一言もない、このはげしき雨風ではよう來まいと思ふたが無調法、雨が降るならやめておけ、風が吹いたら見合はせよの約束ではないから、こんな天氣ではよう來まいと疑ふたが和尚の落度、

濁世の起惡造罪は　暴風駛雨にことならず
諸佛これらをあはれみて　すゝめて淨土に歸せしめり

煩惱の雨がふるならやめておけの約束でばない、たとひ罪業は深重なりとも必ず救ふの彌陀の勅命。

ジンセイ 人生 【世語】

生より死に至るの中間を指して一一と云ふ、古人の句

に「盥より盥にうつる五十年」とあり、

談叢　佛國の物語

佛國の古き物語に曰く、或一人の小童あり一日魔神現はれて一箇の絲環を與へて曰く、汝小童よ、もし汝の運命にて不滿なりせば兎も角も、滿足であるならばこの絲環に手を觸るゝことなかれ、汝の光陰は停止して永久に向つて動かざるべし、もし汝の境遇が苦痛にして堪へざれば須らくこの糸環をほどくべし汝の運命は電光石火の裡にをはり行くべしと小童この使命をいたく喜びあへり、然るに飜へつてつら〳〵考ふるに、我今保姆の許に支配せられ、一として自由を得ず、萬事不都合なれば、せめて十歳にもなりたらんにはと、かの糸環を二まき三まきほぐしけるに、小童は忽ちに十歳の少年となりたり、されば今度は家庭教師の配下に置かるゝに至り、學課に遊戯に甚だ嚴格にして其苦痛や實に忍びざるものありければ、又もや、二まき三まきほぐしけるに、少年は忽ち鼻下に八字の髭を蓄へ美しき紳士となれり、尚青年は高位榮職に就き、且つ妻をも娶らんと絲環をほくし一躍して社會の競爭場裡に立ち、一方の首長とはなりたるに、彼れは萬務の繁離にして、且つ家庭には小兒は群をなし實に世の複雜なるを忌み、早く世を子孫に讓り安樂に暮らさんものと、又糸をほぐしけるに、忽ち其望みは滿たされたりといへども、頭には雪を頂き顔には四海の波をよせ、腰には梓の弓をはり、體力は衰へ疾病はおこり、其苦しみ云はん方なければ、泣く〳〵糸環に最終の手を觸れければ、老人の痛苦は頓にやみ、墓標一片の塔婆となり、こゝに永久のかくれ家を得たりと、初め魔神の現はれたるより此時に及ぶまで、僅が六ヶ月の短日月にてありしと云ふ、これは一場の作話であるが、シエクスピヤ！氏の所謂「人生は悲の相續者なり」とある格言はこの作話によりて能く顯はされてあります。

談叢　早蕨

南總十日市場、佐久間彌左衛門の一子、隣村鳥海氏の女婿となりましたが、性淳朴にして君子の風がありました、文學を好み花道を嗜みて名を兎園と號しましたが、一日、鹿臺高倉へ參詣しましたが、途中に蕨が生へておつたものですから之を土産にせうとて澤山にとり、歸途酒店に憩ひました、すると遊山にても行いた人であろうか、隣の座敷で酒を酌み交はして居ましたが俄に喧嘩を初め、非常に大悶着を引き起しました、亭主の仲裁で漸く圓滿におさまり、仲直りの酒を呑んでおる兎園はこの有樣を見て、古人の附句なる、

酒でする喧嘩の中を直す酒

の一句を想ひ起し、筆を執つて、

りきんでも又折れ易き蕨かな

と書かれた、當意卽妙と云ふべしである、近衛關白の歌に、

早蕨の握りこぶしをふり立てゝ
山の額を春風ぞ吹く

とあるに似通ひて、優にやさしき心がけであると云ふて、人々感じたとある。

談叢 孟嘗君と憑媛

齊の孟嘗君、全盛な頃には常に三千人の食客があつて、殊の外賑はしかりたが、孟嘗君一旦落ちぶれられた時には、三千人が皆ちり〳〵になつて、遂には一人も寄りつきてがなく、其時孟嘗君、人の薄情をとがめて無念がられたれば、憑媛と云ふ臣下が申すやう、喩へば市場の如くで、朝の間は賣たり買たりする用事があるから多數の人が我れ一と集まるモハヤ市がすめば用がなゐによつて面々其場を立ち去る、君むかし全盛にまします時は君の恩澤にあづからん爲めに三千の客が集まりたれど、君落魄したまひたれば恩澤を望まふやうもなし、何の所用もなければ自然とよりつくものがござらぬ、君あやしみ玉ふことなかれと云はれた、人情の浮薄なることを露骨に云ふてみれば誠にこの通りである。

談叢 ゴルチェフと瀛船の火事

露國のイグナット、ゴルチェフと云ふ人が多年勞働の結果、赤貧より身を起して遂にボル河に瀛船を浮べる程の金滿家となりた、或時に其瀛船が火災を起して燃ゑかけたが、ゴルチェフは之を見ながら平氣で酒を呑んでおる、そこで友人が「汝は大事な瀛船が燒けて居るのに、ナゼ其樣に平氣で酒を飲んで居るのであるか」と問ふと、彼は男らしく左の如く答へた、「僕は泣いた處で其涙で船の火が消ゑるでもあるまい、たとひ瀛船はやけても、僕の腕のある間には、又瀛船を得ることが出來るよ……」

談叢 揚震四知に對する評言

彼の揚震の四知と云ふたら實に千古の美談であつて、何人も感歎おく能はざることゝ思ふ、或日の黄昏に王密と云ふ一人の男が揚震の許に尋て來て、訴訟沙汰を自分の方に勝にして貰ふといふ積りで、こつそりと莫大なる黄金を贈つた、所がさすが揚震で「斯の樣な御金は拙者の受くべき理由がない」と辭退した、依て王密は「今は誰も知るものはない、見て居る者もない、受納を願ひたい」と、吳々たのんだ、其時に揚震は嚴として「天知り地知り、我知り、子知る、何ぞ知るものなしと云ふや」と答へて遂に賄賂を取らなかつたと云ふことである、然るに或學者はこの言を評して、「揚震の言では知るものがあるからそれを畏れて折角の賄賂を受取らなかつた樣である、もし知る者がなかつたならば受取つたに違ひなひ、揚震の言は甚だ間違つて居る、なぜ其時に不義の金であるから取らぬと、一言でやりつけなかつたであろうかと云ふて居る、一寸聞くと一理あるやうぢやが、よく考へてみると此學者はまた經驗の足らぬ實行の方面に目のない人であろう、何となれば賄賂と云ふものは利慾ばかりで行はれるものではない、其間には雙方とも切つても切れにくい情實があるものであるであるが、露骨に不義の金であるから取らないと云ふことは到底出來ないのである、もし斷然そう云ふても相手が中々上手に操つて承知するものでない、そこで天知る地知ると、人をして自ら敬畏の

念を起さしむる、所謂『知る者』といふ大威力者を借りて來て、角立つことなく二の句をつぐことの出來ないやうにうまく之を却けたのである。知る者にないと云ふた王密も、たしかに知つて居る者があると云はれて見ると自身も底氣味わるくなつて強ひることが出來なかつたのである、斯くの如く、情を制するには是非とも『知るもの』即ち監督者がなくてはならぬのであります」と云ふた、これは最もなる評言であろうと思ふ。

詩 盛年不二重來一一日難二再晨一
及レ時當二勉勵一歲月不レ待二人ヲ

人間も一とさかり、三十を壯と云なれば、段々成長して三十に成りた時が人間の頂上四十を初老と云て、四十になれば始めて老人の仲間へ入る、去るほどに四十霞と云て、どこともなふ目がわるふなつて、細な物を見れば何とやら霞を隔たやうて、分明せぬに由て、是はと思ふて目を撫る、撫てもく〳〵かすむこそ道理、いつの間にやら眼力が衰るた、そこでやう〳〵氣が付て、とふても目かわるふなつたのさうなと誰誇ねねどもそろ〳〵眼鏡を懷中する、若ひ時分に剛ひ物を喰ば、歯のわるひ老人が見て浦山しがる、近來まで羨ましたか、何日共無其身も物を喰には歯の間だに爽て、心持ちがわるさに、敷揚技をつかへば、次第に歯が搖だして、一本抜た時は親に離れたほど悲しかりた、年よりたと見せまひ爲めに、彼かに義歯をする、又程なく一本ぬけた、是も一本や二本は入れ歯もなれ其五本も七本も抜るとさう〳〵入歯もならず、隠すに隠されぬやうになる人が見ていかう御歯が抜ましたといへば、去ればまう埒あきませぬと云が御定まりの口上其れに限らず、髪の濃ものは二毛になり、髪の淡ひものは聰へ火の手があがりて、余ほど高年めいて來れば、近項までは饗の座敷でも御わかひにと云て飯酒を強られたが、いつからいひ止だやら、何處へ出ても若輩といひ手がなひ、彼れ是れするうち、人が名を呼すに老父といへば、我心には猶其樣に思はぬに、親仁と云たは憎ひと思へども、誰れに逢ふても同じ口上そこで心から得心して、さて〳〵是非もなひ、老人に成たとやう〳〵蟲に合點する、どふぞ今一度本の二十や十八に成りて見たひと思へども

まう此世では叶はぬほどに、「盛年不二重來一一日難二再晨一」若ひ時分にもどられぬばかりではなひ、猶一日の暑でも、夕陽朝にもどらず只今が先尅にはならぬ、前滅後生々々と遷りゆく分野は、白駒の隙を過る如くなれば必ず〳〵油斷するな、青年うち精出さねば、時すぎて後悔するぞと、古人は誡しめ置たが併し凡て人間一生は夢の戯れ、手習せひで瓏搔ふが、學問せひで文盲に有ふが、渡世に油斷して貧乏せふが、夫れはしばらくの間だ、追つけ死して仕舞ふたらば、何の遺恨もあるまひが、油斷のならぬは後生の大事此回參りそこなふたらば、後の世を何とせふ然るに今日も油斷し昨日も油斷し、去年もおこたり、今年もおこたりで、遠く後生を取はづしたら